
ワナビ荘の住人たち

動野たけのこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワナビ荘の住人たち

【Zコード】

Z2217W

【作者名】

動野たけのこ

【あらすじ】

ワナビ（小説家や漫画家などになる夢を持つ若者たち）たちが集う「ワナビ荘」は今日もにぎやかである。コンクールに応募する者しない者、作品を書きながらも仕事をする者しない者、遊ぶ者遊ばない者、夢を叶える者叶えられない者……。さまざまな愉快な（当社比）仲間たちが繰り広げる自己満足エンタテインメント。本物の作家志望の方はどうか怒らずに、広い心でお読みいただければ幸いです。

プロローグと「うわの登場人物紹介

「お兄ちゃん！ 起きて、お兄ちゃん！ 早くしないと遅刻しちゃうよー！」

「朝っぱらからひたいなあ、かわいいブラコンの妹子。はいはいいま起きるよ、おはよー……つてうげえ！ お前朝からなんて格好してやがる！」

「ふええ、ほんやりしてておぱんつ履くの忘れてたよー……」

「つておーおい、そんなことよりもうこんな時間！ 急いでもギリギリ間に合つた微妙だぜ！」

「なーにやつてるのよー、早くしないと置いてくわよー。冴えないクセになぜか周囲からモテモテ男くん！」

「あー、元気系幼馴染子！ 待つてくれ、今すぐそつちに行くから」

「きやー、なんでズボン履いてないのよー！」

「うわつ、うつかり忘れてたぜ！ これじゃかわいいブラコンの妹子のこと笑えねえや！」

「せーんぱいっ。今日もいい天気ですねー」

「うわつ、天然系おっぱい後輩子、朝から抱きつくなー！ う、腕に何かやわらかいものが当たつてるうー！」

「ちょっとー、冴えないクセになぜか周囲からモテモテ男くん、なに鼻の下伸ばしてるのよー！ ちょっとこっち来なさいー！」

「いででで！ 耳を引っ張るな、千切れる、ひいい！」

「なんですかー、元気系幼馴染子先輩、冴えないクセになぜか周囲からモテモテ男先輩を一人占めしないでくださいー」

「お、お兄ちゃんのこと一番好きなのはわたしだもん！ 一緒にお風呂入つてるんだもん！」

「ひ、ひいい！ そ、そんなとこ引つぱっちゃらめええ！ 千切れるー！ ひきいー」

「うがああああ！！」

僕は自分で書いた原稿を解読不能になるまで細かく破り捨てた。

ワナビという人種がいる。

ワサビじゃない。ワナビである。

間違えないように。

ワナビとは、つまるところ、漫画家だとか、小説家だとか、ミュージシャンだとか、そういうのに「なりたい人」を指す。
wanna beをそのまま日本語読みしたものである。

ある意味で差別的ニュアンスで使われることもある。時には皮肉な意味を込めて呼ばれることがあるそうだ（おそらく作家志望者はそれなりに厄介な人格の人が多いせいだと僕は個人的に推測している）。

まあ要するに、僕のよつな奴のことだ。

僕はライトノベル作家になりたいと思っている。

本気だ。嘘じゃない。

けつこう本気で、作家業で一生食べていきたいと思っている。
僕には心から尊敬し、崇めていたるライトノベル作家がいる。「城島ダイヤ」と言うのだが、ちなみに性別は不明である、この人は本当に素敵なライトノベルを書くのだ。

あるときはファンタジー、あるときはミステリ、あるときは学園モノ……、ライトノベルと呼ばれるジャンルのほぼ全てを網羅し、なお実力の底を見せない、怪物のような作家。筆も早く、怖ろしいペースで新作を刊行する。今やライトノベル界のエースと言つてい人物だ。

そして高校のとき、この人の作品に出会つた僕は、あつという間に彼に心酔した。こんなに素晴らしい世界があつたなんて。それからというもの、僕はありつたけの小遣いをはたいて彼の本を全て購入、繰り返し読んだものだ。それどころか、勢い余つて彼の作品で

一次創作を行い、ネットや同人誌で発表するようになつた。今思うと恥ずかし出来のものもたくさん生み出してきたけれど、若気のいたりということでぜひ許していただきたい。だつて、「物語を書く」という行為は 、本当に楽しかつたのだから。

そして、受験勉強を経て大学に入り 、僕は本格的に小説を書き始めるのだった。あの、城島先生のようになるために。彼の描くような、素敵な世界を僕も創り上げて、多くの人を魅了したい。純粋な願望から、そして書くことの楽しみから、僕はこの世界を志したのだった。

さて、そんな僕が、いざ一人暮らしの寮を選ぼうと、大学の生協に相談しに行つたとき、あるトンデモナイ広告が目に入ったのだ。『『なりたいもの』がある若者、夢を追う若者よ、集え！ 格安合同生活寮『ワナビ荘』』

僕は不覚にも、そんなふざけた広告を興味本位で手にとつてしまつたのだ。それが全ての間違いの始まりだったのである（と、興味本位で先を読んでいただけそうなアオリを入れてみるのだが興味を持つていただけかはわからない。人の興味を引くというのは難しいものである）。

「うおおお！ まー君の作品キタコレじゃない！ ほらほら、『道塚魔太郎氏、一次選考突破』だつて書いてあるわよ！ これ、まー君のことよね、すつゞーーー！」

「しょせんまだ一次選考ですよ。言つてみれば大学受験におけるエリミネイト、足切りみたいなもんです。ここから先が一気に厳しくなるんです

「ワン」

「そろは言いますけど、今まで小説賞で一次選考通過できたのまー君だけですよ？ もうちょっと自信持つてもいいと思います」「まぐれですよ、まぐれ」

「もつちーもこっちに来てみるといいわよ。そして思つ存分まー氏に嫉妬して苦悶に表情を歪めるといいわ」

「ワン」

卓を囲んでパソコンを覗き込んでいる三人の男女、と一匹。彼らを少し離れた距離から眺めている僕という構図。どうやらまー君の作品が有名出版社の小説大賞でいいここまで行つているらしい。ちなみにもつちーとは僕のことだ。

まー君は都内で「ゴーストタクシー」なる斬新で新しい事業を切り開こうとしている、タクシー運転手のワナビだ。髪の毛が真っ赤なので誤解されやすいが、紳士的な好成年なのだ。さらに小説の才能もある。彼はホラー小説家志望なのだ。ついでに横文字が好きだ。使い方はかなり怪しいが。

「くつそー、あたし漫画はこの間ダメだつたのよねー。今回のはけつこう自信あつたんだけどな。血と汗と涙と鼻水の結晶」

「リョー君さんは鼻水みたいな余計なもの入れるから良くないんだと思いませんけど……。さすがのあれには私もドン引いてしまいました」

「リョー君さんは鼻水つていうよりカウパー液を作中に垂れ流し過ぎなんじやあ……」

「ワン」

「何よー！ しょせん素人には私の芸術なんて理解できないんだー！」

「うがー！」

バタンとばかりに倒れ込むリョー君さんは美容師兼腐女子である。三次元一次元、イケメンフツメンちょいブサメン、有機物無機物、何でもいける人である。ぐちよぐちよである。ゴスロリファツションとかをコミケで着る。残念ながらメガネはかけていない。残念というのは僕の主観的感想である。

リョー君さんは主にBL小説を書く。BL漫画も描く。いつかBLで芥川賞を取る、と息巻いている。あたしは第一の三島由紀夫になるんだー、と大言壯語なリョー君さん。おそらく何か勘違いして

おられる。

「そういうのんちゃんはどうなのよー。この間書いた声優オーディションに、エントリーしたんでしょー」

「あ、あれはエントリーじゃなくて、声優事務所の方に演技を聞いてもらつて、感想をお聞きしただけです！ダメ元つていうか、最初からけなされるのを覚悟で行つたし、これで何か、結果を残すつていうか、そういう目的じゃなかつたつていうか……」

「ほら、そーやって最初から自分で逃げ道を作っちゃう。それが良くなないのよー。ね、まー君もそう思うでしょー」

「はあ、そうですねえ。のんちゃんの声質はとってもファンタジックでチャーミングですから、あとは演技力さえ整えばプロ顔負けのステキな声優が一人ここに誕生しますよ。いつソリヨーコさんの作品に声でも当ててみてはいかがですか？動画サイトでアップするとか」

「……それ、もうやりました」「やつたのか。

「しかし、リョー坊さんと組むと絡み合つ美少年の声ばっかりやられるからもうイヤです……。方向性の違いで結成一日でコニシト解散しましたね」

「それでも一日持つたんですね」

この大人しい感じを強調する二点リーダを使いこなす、何とも奥ゆかしい少女は、のんちゃんである。彼女は専門学校生で、声優を目指しているんだとか。こうして謙遜――、というか、どちらかと言えば自分を卑下しているような、内気でマイナス思考に寄りがちなところはあるが、実のところ声質は素晴らしいものがある。将来を期待される、我が荘の看板娘だ。

別に彼女はとりたてて美少女というわけでもないが、僕は彼女が大好きである。背が低く、髪形はさえにおかっぱで前髪が長く、分厚いメガネをかけていて、服装ははつきり言ってダサく、人とハキハキと話すのも苦手……。この垢抜けなさが、ダメさが何とも愛

おしゃいのだ。皆さんにも「こういつの経験はおありではないだろ?」か?
(内気な彼女と仲良くなつた理由については後述しようと思つ。いつになるかわからないけど)

「ワン」

せりきからワンとかうるさい奴が一匹いるのでついでに紹介しておひや。この犬はカフカである。恥ずかしい名前だ。僕も言うのすら恥ずかしい。小説家志望が自分のペットに文豪の名前をつけるというのもよくあることだが、断つておくが、こいつは僕のペットでも何でもない。このアパートの大家の飼い犬だ。

以前リヨーゴが「こいつの名前カフカじゃなくてザムザにしない?」と提案したが飼い主に直々に却下された。僕はいい名前だと思つたんだけどなあ(「こ」でクスッと笑つていただければ本望である)。

さりにちなみに、犬というのは正確には「ワン」とは鳴かないものである。せいぜい英語表現の「バウワウ」くらいが順当なところだろう。日本語の「ワン」は英語圏では「one」と聞こえるらしいが、もし「ワンワン」と犬が鳴いたならば「one-one」に聞こえることだろう。一対一のいい勝負である。何が、と冷静な突つ込みを入れられる前にこの話題は切り上げよ。

そういうえば猫も「ニャー」とは鳴かないだろ? な。英語で発音すると「ne a」だろ? な。ネイティヴの猫語の発音をよく聞くと「なーお」とでも言つてゐるよつな……。ちなみに猫語のネイティヴは日本では本物の猫と豊崎愛生くら~である。

何を言つてゐるのか……。とりあえず話を戻したい(ギーク)。
「さーや、みんなにやつてるの? やつと机の上片付けて。
ご飯の時間よう。今日はね、アタシ特製・旬の食材の納豆鍋! こ
れさえ食べればあなた方もお肌つやつやになるわよ、ブホホホ
「あ、ロ」。おつづー。あのね、まー君の小説が一次選考突破した
んだよー」

「あらま、ホントー? おんめんでんとひー。やだ、お祝いしなく

ちや。あとでケーキでも買つてこないと。ちゅうひ納豆鍋でよかつたわあ

「え、納豆鍋つてめでたい料理だつたの？」

最後に部屋にのっそりと入つてきたエプロン姿のオネエ系キャラは、（うすす勘付いているかとは思われるが）残念ながら女性ではない。というか、鬱面である。もう言い訳のしようがないほど、気持ちいいくらいに、男らしいにかつてオッサンである。身長一九〇近くあるのではないかと、巨体に、全身引き締まつた筋肉を持つ。髪の毛はレゲエ系の……、何と呼ぶのかよくわからないが、全ての毛を三つ編みにしているかのような、とにかく手間のかかりそなヘアスタイルをしている。

彼の名は「」。その名の通り、ふだんは彼の経営するクラブでディスクジョッキーをしている。沖縄出身。彼がワナビ歴が一番長い。実に一〇年近く、宗教や家族愛をテーマに小説を書いては投稿し続け、ボツを食らつてはいる。その数、実に一百と十二。そこまで落ちれば、普通ならさすがに「才能なし」と断じて諦めると思つるが、彼は違つらし。

「理解されるものだけが小説じゃないの。生み出す、ということは人間のスピリットと、自然界のグレートスピリット、すなわち私たちの信仰対象がダイレクトに接続されることであり、私はその神聖な行為 자체に価値を見出すの」

と、わかるようなわからないようなことを言つ。なるほど、これでは出版社にも理解はされまい。彼の話に傾きながらも密かにそう思つ僕である。

そして彼は、いの、僕たちワナビの住むボロアパート「ワナビ荘」の主人でもある。（ゆえにカフカの飼い主でもある。どうでもいい情報おわり）

大家であると同時に、僕たちの良き理解者であり、親代わりのような存在。

ちなみに「ワナビ荘」というのは僕らが勝手に決めたあだ名である

り、正式名称は「ハイツ」だかなんだか、特に面白味もないものだ（当たり前である）。

ローハイのアパート名のセンスについてだけは今でも悔やんでいる。もつと「ハイセンスでグルーヴィーな名前にしておけばよかつた」と（グルーヴィーがどういうことを指すのか、例によつて僕は聞かずにおいた。聞くと話が長くなつて面倒だからだ）。

はてさて、都内某所にひつそりと存在するこの「ワナビ荘」、果たして平成の「トキワ荘」となり得るのか。それはいくら何でも志が高過ぎか。まあでも、夢はでかいに越したことはない。

そんな感じで、以下、夢を追い続けるオタクたちのしょーもないエピソードが展開される。

本当にどうしようもないの、正統派（？）ライトノベルファンの方々はお怒りになるかもしれないが、そういう方々はここに至るまでに既に脱落していると思われるので、気にせずに進めることにある。

細かいことを気にしていたらワナビなんてやつてられないのである。

第1話 ナーストタクシーパーフィッシュの夜 その1

「それにしても、これ、タクシー？」

僕は思わず素で訪ねてしまった。僕の中の「タクシー」という普通名詞の指す概念が、ガラガラと音を立てて崩れ去っていくような感覚だ（これ、実に陳腐な表現だが僕は気に入っている。最初に考えた奴は天才だ）。

「よく暴走車と間違われますよ。コップに追いかけられることもあります。何が何でもタクシーです、の一言で押し通しますけど」

「コップ？ ああ、警察のことね……」

ワナビ荘の、身を屈めないと入れないほど狭くて暗い車庫の中である。狭さゆえか口はここを「ケツの穴」と呼ぶ。まったくもつて下品な男だ。

僕はまー君お気に入りのタクシーを見せてもらっていた。黒を基調とした車体には数えきれないドクロ、血しづき、コウモリが描かれており、ボンネットとドアパネルに、大鎌を持った半裸の悪魔っぽい女の子が鎮座している。街中でこれが走っているのを見たらと思うと、軽くホラーである。

分類上は痛車なんだろうが、その、何といつが、方向性が違う。何と違うのかわからぬけど。

「こっちに来てからびっくりしました。彼らはちゃんとジョブをこなしますからね」

「四国の方ではこなさないの？」

「こなさないです。向こには悪意のない奴なら見逃す文化があります」

日本語のイントネーションがおかしいが、別にまー君は帰国子女とかではない。純血の高知生まれ四国男児である。しかし彼は話を盛るクセがあるので、彼の言ひ口とは話半分に聞いておいた方が無難だ。

「東京の『カツプは偉いですよ。ワナビと回じへりへじ、回じへりへじ偉いです』

「ワナビって偉いの？」

「はい、『カツプと回じへりへじ偉いです』

「…………はあ…………」

「ぶふつ」

先ほどから運転席に座つて、ハンドルを掴みながら運転じつこをしていたのんちゃんが吹き出した。見ると、肩を震わせて口元を抑え、すっかりツボにはまつた様子であった。今の会話のどこに面白いところがあったのか甚だ疑問である。

僕はふと目についた、フエンダーミラーにぶら下がつてゐる、目玉の飛び出たゾンビストラップを手に持つてみた。ころころと掌で転がしてみる。悪趣味なアクセサリーだ。運転中に何かの間違いで紐が切れ、目の前に落ちてきたらと思うとぞつとする。

『『ターストタクシー』は全く新しいビジネスモデルです。そもそも、タクシー業界にはいま一つ遊び心がない。街を走っているタクシーはみんな地味です。もっと面白味のある、パトカーや救急車のような『デザインのタクシー』が走っていてもいいと思ふのですが』

「紛らわし過ぎるだろそれは……」

「そこで、移動する必要はなくとも、思わずみんなが乗りたくなるようなタクシーを作ろうと思い至つたわけです。ファミリー、カツプル、おじいちゃんおばあちゃん、みんなが気軽に使えるような『そのターゲットを想定してなぜこの『デザイン』になる！？』

「お化け屋敷はみんな大好きです」

「おじいちゃんおばあちゃんを脅かしてどうする。びっくりしそぎてポツクリ逝つちゃつたら、お化けが一体増えることになるだ」

「さりに、走行中にもさまざまアトラクションが車内で展開します。車がカーブを曲がると、CGで窓の外からお化けが襲つてくる映像が流れます」

「走行中に脅かすのかよ！ 危な過ぎるだろそれは！」

「とても良い出来ですよ。僕もときどきびっくりします」

「フロントウインドウにも出でてくるのかよ！ もうちょっと乗客の安全とか考えてくれ！ その企画自体がホラーだよ！」

「発想はなかなかいいと思うんですが、いま一つ集客率が良くないですねえ。まず誰もタクシーだと認識してくれないんですよ。で、タクシーを待つていそうな人の前に停車すると逃げられる。子どもになら受けたと思って、しおちゅう道行く親子に声をかけてるんですけど、子どもには泣き出されてしまつし、親には通報されてしまうし、散々です。最近は暇だから女子中学生を追い回したりします」

「実は申し開きのできない状況まで行つてるんじゃねえかお前……」

「いいなあ、かつこいいなあ。運転したいです」

僕たちの話なんてまるで聞いていなかつたかのように田を輝かしながらピッパーとクラクションを鳴らし、タクシーを発信させよつとするのんぢゃん。能天氣というか、マイペースな奴なのである。僕はまー君との会話で荒んでいた心がほんの少しだけ癒された。

「ああ、ちよつとちよつと。やめてくださいよ、キー差したままなんですから、本当に動いちゃいます」

「というかのんぢゃん、あんた免許持つてなかつただろ。いまどき無免許運転とか飲酒運転とかやつたら、『ついつたあ』っていう怖いサイトで捕捉されて、さらで『まとめこと』っていうもつと怖いサイトで晒されて全国的に有名になるんだぞ。知つてるか？」

「ロッパも動き出しますよ。ちよつとでも逃げようとしたらバキューんつて、フロントガラスに穴が開きます」

「東京の警官はそんな簡単に発砲しねえよ。というか、四国でもしねえだろ」

「します。僕も仮免中に四発撃ち込まれました。今でも痕が残つています」

絶対に嘘だ。

「そうだ、せつかくだから今日は僕の営業につけてきますか。『ゴーストタクシー』というアトラクションの素晴らしさを田の当たり

にすれば、きっとみんなさんの考え方も変わること思います

「僕たちが乗つてたら他のお客様が乗れないだろ。そもそも、君の仲間だと思われること自体が怖いんだけどな、僕としては」

「まあまあそう言わずに。のんちゃんが一緒に乗つてればそれだけでホラー要素も増しますし」

「失礼千万です！ いつも見えてもわたくし、花も恥じらひ女でござりましてよ！」

しゃべり方が変だ。

「ござ乗れつて言わると、確かにすっごく乗りたくないな、痛車つて……。道行く人々と目が合つただけで恥ずかしくて憤死しそうだ」

「それがだんだん快感になつてくるんですよ」

ああ、僕の恥ずかしい姿をもつと見て……、といつ感じだろうか。とりあえず、ハマると怖そつなことだけはわかる。ぜひとも遠慮させていただきたい。

「一晩ぐらいいじやないですか。今なら友人待遇といつことで十パーセントオフにしておきますよ

「金どるんかい！」

「あ、いいこと思いつきました。もの凄いスピードで料金メーターの数値が上がつていくタクシー。これが一番スリルがあつてドキドキするんじやないでしょうか？」

「どうか普通にホラーだ。

早くも小説だとか創作だとかから話が逸れまくつており、読んでいてだんだん不安になる展開かとお察しする。「あれ？ これ、小説家になりたい人の話だよね？ ちゃんと本筋に戻るの？」という声が聞こえてきそうだ。僕だつてそう思つ。

「安心召されよ、不安なのは語つていい僕とて同じである。無責任だと思つてになるかもしねえが、まあこの不安に揺られながらページをめぐり続けるのも、ホラー小説としてはまた一興。物語にしてもタクシーにしても、行きつく先がわからない乗り物

ほど恐ろしこものはない。
あなたもそう思ひだらう。

第1話 ノーストタクシーひつけの夜 その2

で、案の定、泣かれた。
子どもに。

「うわああ～～ん、お化け怖いよ～、怖いよ～！」

「すいません、そこでもう降ろしてもらえますか。お金は払います
んで」

「も、申し訳ないです……」

ぎゃんぎゃん泣きわめく子どもの手を引っぱりながら、母親が一
刻も早くタクシーから離れようとしている、そんな様子がサイドミ
ラーから嫌というほど良く見えた。車両の中で三人は、誰からとも
なく悩ましい溜息をつくのだった。

「ほらね。こんな感じでフイニッショ、一丁上がりです」

「なんとしてやつたりみみたいなセリフなんだよ！ 何かをやり遂げ
たような顔をするな！ 嫌な奴だなホントにもうつ！」

「もつちーがぎゃあぎゃあうるさかったのも、子どもをおびえさせ
た原因の一つかと思うよ……」

「仕方ないだろ、怖かつたんだから！」

まー君製作の『ノーストタクシー』は走行中四方八方の窓ガラス
に妖怪やら幽霊のCGが浮かび上がり、乗客を脅かすというものな
のだが、実際に目の当たりにするとその無駄なリアルさに心底驚か
された。頭が割れていたり、目玉がこぼれていたり、血しづきが飛
んできたり、そういうギミックに力入れるか、普通？ どこがファ
ミリー向けだ。大人でもトラウマになるぞ。

僕たちはあの後、街に出て乗ってくれそうなお客を探していたの
だが、案の定誰も彼もが『ノーストタクシー』を目にした瞬間に、クモ
の子を散らすようにさーっとその場からいなくなってしまい、とて
も商売どころではない状況であった。仕方なく僕がその辺の親子に
声をかけ、頭を下げ下げ、やつとの思いで乗つてもらつたのだが……

…。

「せっかくの僕の努力をフイにしゃがつて……。確かに凝つた作りだし、ごく一部のマニアには受けそうだけど、一般人はどう考へても乗らないぞ。こんなもの」

「じゃあそのマニアをロックオン、狙い撃ちすればいいわけです。きっと今の日本にはホーラーファンは六千万人くらいありますから、広告を新聞などに載せれば注文が殺到するはず。寝る暇もありません」

「人口の半分がホーラーファンかよ。どんな計算だ……」

「まさにどんな判断だ、金をドブにする気か、ですね」

「金はもう相当額ドブに捨てていそだけどな……」

「そもそも、なんでこんな怖いタクシー作ったんですか？ ホーラーファンなのはわかりますけど、ここまでお金をかける情熱はちょっと、普通じやない、っていうか……」

「確かに。どうこう経緯でこんなものを造つたと想ひ至つたのか知りたいね」

「…………話せば長くなります」

「長くなんのか。それじゃやつぱりいや、と言おうとしたが、まー君はすでに語り口調で話し始めていた。失敗した、余計な事言つんじやなかつた。激しく後悔。」

「あれは、僕が東京に飛び出してきたばかりの、まだピカピカのルーキー、大学新入生の頃でした。桜咲くフレッシュな季節、長くつらかつた受験勉強から解放された僕は、さつそくホーラー作品を愛好するサークルに入り、そこであるキュートドミステリアスな女性と出会いました」

（語り口調が気持ち悪いな。今のうちに逃げとくか）

（知りたいくつていったのはもつちーだよ。責任持つて最後まで聞くべきだよ。…………だけど私は先に帰らせてもらひつけだい）

（あつ、バカヤロ、逃げんじやねえ）

（私は無関係、ナッシントウドゥだよー これにてドロロンさせたいただくで）

(まー君のなんちゃって英語が移ってる！？ そしてドロンするつて古いな！ 何時代から来た古代人だよお前は。カンブリア期か（前から思つてたけど、もつちーは私を女扱いする氣が皆無だね…）

「彼女は名前を 仮にみつちゃんとしておきましょ。みつちゃんはサークルの談笑の輪にも入らず、いつもサイレント無口で、部屋の片隅で本を読んでいるような女性でした。自分でホラー小説を書いているようでしたが、性格ははつきり言って暗く、周りのメンバーたちからはちょっと距離を置かれていたというのが実のところです。ひょんな時に僕は彼女と一人きりになつて話す機会を得ました。そこで、僕は彼女のサプライジング、思わぬ一面を田にすることになります」

(おいおい、そんなクールのテンプレートみたいな女は三次元の現実世界には存在しないって誰かこいつに教えてやれよ。手遅れになるぞ)

(いや、だから彼は三次元の話をしてるんだと思うんだけど)

(とりあえず帰ろう。もつなんかほつといても大丈夫だと思つぞこいつ、自分の世界入つてるし)

(ああ、ダメだめ。もつちーはまー君を怒らせたことないの？ 正直、あとあと怖いよ)

(な……なんだよ、どうなるつてんだ)

(一週間くらい顔を合わせるたびに口の中でも『もじ』文句らしきものを呟いたり、会つたときに田を逸らしたり、私物の位置を微妙にずらしてきたりするの)

(うわっ、めんどくせえ……)

「みつちゃんはこう言いました、『ホラーの世界つて、文章で読んだり映画で見たりするより、実際に体験してみたいですね』って。僕はすぐにピンときました。そう、彼女は僕をお化け屋敷デートに誘つていると！ 彼女がこんなに積極的な女性だとは僕は気付かなかつた。さつそく僕はその週末の遊園地のチケットを一枚手に入れ

ました」

ひそひそ話す僕たちに構わず話し続けるまー君。この皿に酔つ
ぶりもそうだが、話の内容がすでにホラーである。主にそのみつち
やんという女性にとって。

以下、なるべく臨場感が伝わるように、まー君の語り口でお送り
する。臨場感が伝わると何かいいことがあるかと聞かれると疑問符
が残るのだが。彼の話を伝える上で、突っ込みを入れるのが面倒く
さくなつたとこもある。いや、そもそもこの話を伝える必要
もあるのか？

第1話 パーストタクシードライブつけの夜 その3

「僕はみっちゃんに、『イエスタデイの話、OKだよ。トウモローの朝九時に、大学の門で待つてる』とメールしました。するとすぐに返事が来て、『何の話ですか』と……。僕はみっちゃんはなんてうぶで恥ずかしがりやな女性なのかと、感激する思いでした。これが本当の奥ゆかしさ、ナイーヴさなのか、と。

当日みっちゃんは来ませんでした。おそらくあまりにシャイな性格だったんでしよう、僕と顔を合わせるのも怖れるくらいなんですから。僕はみっちゃんがますます気に入りました。そこで彼女の家を直接訪ね、『レツ、お化け屋敷！』と掛け声をかけ、彼女を自慢の愛車に乗せました（本当は親の車だったのですが、格好をつけたかったので彼女にそのことは黙っていました）。みっちゃんははじめきょとんとした顔をしていましたが、すぐにアイスブレイク、打ち解けて、僕とホラー映画や小説の話をはじめました。いいものですね、女の子と話をするということは。彼女はスプラッタ映画が大好きで、特に内臓や血肉が飛び散るベリー・ハードな作品を見るとたまらなくすかっとすると言っていました。正直僕よりアブノーマルな趣味です！ ワアオ！

そして僕と彼女は、遊園地を楽しみました。とはいってもお化け屋敷に十回入つただけで、他のアトラクションは見ませんでしたけど。ベリー最高でしたね、あそこのお化け屋敷は。トロッコ式だったんですが、出てくるお化けたちの姿のグロテスクなこと！ すっかり彼女はお化けたちの虜です。僕はヘッドバンギングをしながらはしゃぐ喜ぶ彼女の姿を見て、ああ、連れてきて良かつたなあ、と心から思つたものです。

しかし、その帰り道のことです。彼女は僕の運転する車のサイドシートで、ぼそりといつ呟きました。『普段からあんな風な車に乗れればなあ』と。

それからは、僕にとつてはインベント、工夫に工夫を重ねる、いわば戦いの日々でした。どうすれば彼女を満足させられるか。どんなグロテスクな幽霊を用意すれば、彼女を喜ばすことができるか。それだけを考えながら、僕は（親の）車の改造を続けました。あの日、彼女が車のサイドシートに置いたまま忘れていた、遊園地で買ったゾンビのストラップ……、それを見るたびに、僕は彼女の笑顔を思い出し、自分を奮い立たせることができました。

そしてそれから一年の月日が経ちました。僕はついに、走行しているだけでお化け屋敷のようなスリルが味わえる、『スリラーカー』を開発することに成功。親は『そんな車もういらん』と快く僕に譲ってくれたので、晴れて僕は思いのままにデザインした自分の車を手に入れた、というわけです。ちなみに、車体に描かれている悪魔の女の子は、当然みつちゃんをモデルにしてイラストレイターさんに描いてもらつたものです。

さて、こうして僕は満を持して彼女を迎えに行きました。そのときの僕の心境は、さながらペガサス、白馬に乗つてプリンセスを迎えて行く、一国のプリンスとでも申しましょうか。僕は問題なくシステム通りに現れるお化けたちを見て満足しながら、ゆっくりと彼女の家に向きました。楽しみはなるべく焦らした方が大きくなるというのが僕の美学でして、その日も僕はあえて遠回りをして彼女の家に向かつたんです。

しかし僕の車は、運悪く途中でコップに見とがめられ、それどころか僕は職務質問までされました。さすが東京のコップは違う、口ボコッコッぱりの働きぶりだと感心したものです。僕はそこで『友人の車だ』という嘘をつき通し、なんとかお目こぼしをいただきました。東京のコップにも優しいところはありました。

で、ほうほうのていで彼女の家の前まで着いたとき、偶然にも彼女、お出かけから帰つてくる途中で、道の向こう側にいたわけです。僕の車をひと目見たらすっかり目を輝かせてしまつて。今思うと不用心な話ですが、興奮していたのでしきゅう。右も左も見ずに、

僕の車に向かつて突つ込んできたんです。僕は思わず『デンジャラス、スタッフ!』と叫んだのですが、そこに運悪くトラックが……。

僕は彼女の体が吹っ飛ぶところを見てしました。人間の体つてこんなに軽くて小さいんだって、頭のどこかではそんな場違いな事を考えていました。だけど、僕にはどうすることもできなかつた。僕はすぐに彼女に駆け寄りましたが……、そのときには、もう……。

僕は悔やみました。もつと早く僕が彼女の家に着いていたら、あのときコップにつかまりさえしなければ、いや、そもそもあんな遠回りなんてしていなければ、あのタイミングで彼女と会うことはなかつたというのに……。

それ以来、僕は彼女に見せたくて造つたこの車で夜の街を走り続けました。また彼女が出てきてくれるよつに、『まあなんてステキでクレイジーな車、ぜひ私を乗せて』って言つて、サイドシートに滑り込んできてくれるよつに……。彼女を隣に乗せてドライブするその日を、ただひたすら夢見ながら走りました。

そんなある日、ついに彼女は出ました。僕がたまたま彼女の家の近くを走つていたとき、青白い影が見えたので、何ごと? と思つて近づいてみたら……、それは紛れもなく、あの日と同じ輝いた目をした、彼女でした。

僕は夢見ごこちで彼女をサイドシートに乗せました。『ステキな車ですね』。彼女は第一声にそう言つてくれました。それは僕がドリームの中で何度も聞いたセリフで、思わずその幸せさに頭がクラクラしたのを覚えています。僕は早速車を発信させ、アトラクションを彼女に見せてあげました。もちろん、彼女はきやあきやあ言って喜んでくれました。

それ以来彼女は、夜な夜な僕のドライブコースに現れては、青白い顔でそつと手を挙げて、車に乗りこんでくるようになりました。その頃から、僕はこの車を運転する、ということを一生の仕事にしようと考えていました。もつともつとステキなアトラクションを作り、もつともつとステキなドライビングテクニックを見せて、彼女

を楽しませようと。

実はこの車をタクシーにしようと言い出したのも彼女です。タクシーの乗客にはさまざまな人種があり、当然さまざまなバックグラウンド、さまざまな人生のシーンがありますからねえ。彼女は僕の口から語られる、そんな人々のストーリーを聞くのを楽しみにしていました。何しろ彼女は、生きているほとんどの人間と直接話すことができないですから。そんなわけでこの車は、昼は普通のタクシー、夜は彼女専用のリムジンと化したわけです。そして僕は、言わば彼女専属のドライバーです。

僕と彼女は、幽霊たちの飛び交う車内で、色々な話をしました。彼女がホラー小説を書くのが好きだったことは先ほどお話しましたとおりですが、彼女は僕にも『ホラー小説を書いてみてほしい』と持ちかけたわけです。そんなわけで、今でも僕は彼女にアイデアをもういながらホラー小説を書いている、というわけです。この車内で、毎夜毎夜、彼女は僕に、自分の書きたかった小説のネタを提供するというわけです。彼女がこの世から消え去る時は、そのネタが全て尽きたときだ、って言つてました。

これで僕の話は終わりです。ベリーロングな時間付き合わせてしまって、申し訳ありません。この話をしたのはお一人が初めてですよ。聞いてもらえてハッピーでした、ありがとうございました。

(……おい、どうすんだこの空氣。ちゃんと最後まで聞けつて言ったのはのんちゃんだろ、責任取れよ)

(そんなこと言つても、こんなに重い話だとは思わなかつたのよ……。ていうか、死んだ彼女と毎晩会つてるとか予想以上にまー君つてヤバい人だつたね。これは、明らかに逃げるタイミングを逃したとしか。どうする?)

(まあちょっと変なモンが見えるくらいなら無害だから、今まで通り普通に付き合えればいいと思うんだけど……。話の出だしからして勘違いつぶりがやばいからな、彼女の死に關しても言つていいこと

が真実かどうかわからん。万が一といふこともある。とりあえず、その辺で降ろしてもらつて、その後は全力で逃げよつ

(うん、それがいいね。さわらぬ神にはたたりナッシング)

(だから変な英語移つてゐや……)

「うん？ どうしました？」

（（なななんでもつ！））

突然呼ばれて、思い切り不自然な反応を返してしまつた。まずい、疑われると思いつつ、ふたたび額を寄せ合ひう僕たち。いやほんと、どうすればいいの。

「あつ！ そんなとこにいたの、みつちやん！」

「ひいいつ！？」

まー君が僕の座つている助手席の足下を見てそんなことを叫ぶものだから、僕は思わずその場から勢いよく立ち上がって頭を天井にしたたか打ちつけた。足下にはもちろん誰もいないし、何もない（備品のドクロ型ダストボックスは置いてあるけど）。彼は「ははは、冗談ですよ」と笑つたが、目が笑つていない気がする。僕は居心地が悪くなり、一刻も早く車から降りたい気分だつた。おいおい、なんだよこの状況。なんだかんだでまー君自身が一番ホラーだつたつてオチかい。

「ま、まー君？ 僕たち、そ、そろそろ……」

「おつと、そろそろ時間だ」

まー君は僕に最後まで言わせず、ぐんつと勢いよくアクセルを踏み込んだ。止まっていた車が急発進する。「ひょええつ！？」後部座席でのんちやんが激しくバウンスボールである。

「まー君！ ビニに行くつもりだ？ そりそろ降ろしてほしいんだけど」

「あー、もうちょっとだけ付き合つてくださいよー。もうすぐ夜の十一時でしょ、そろそろみつちゃんが出てくる頃なんです。おー人にも紹介しますよ、綺麗な子なんですよー」

「ひえええつ、棒読みが怖い！！」

まー君はどういん車のスピードを上げた。僕はまー君の顔を見る。

やがて、田がトシが田をうながす。田のうながす……。

「みつちゃんの発想力は凄いんですよ。きっとお一人もワナビとして気に入ると思います。なにしろ、すつゞくエグいこと、次から次に思いつきますからねえ、ふふふ。そうだ、きっと彼女もお一人を見て何か凄いことを思いつくかも。これは面白いことになりそうだなあ……」

のんちゃん、顔面を崩壊させてのマジ泣きである。正直僕も途中まで怖がっていたが、彼女の泣き声を聞くと正直ドン引きの気持ちの方が勝つてしまった。「おー」おおおおおおなどと鶏の首でも絞めたような声を出されると、むしろまー君よりのんちゃんの方が怖くなつてくるぞ。少なくともこの車内に出てくるお化けの中ではダンツの一位だ。

いやはや、僕が漫画家でなくて本当に良かった。漫画での状況を再現するならば、ならばのんちゃんの壮絶な表情を仔細に描かねばならないんだからな、きっと苦労するだろ。いや、あるいはここでほぼ確実に笑いを取れるからむしろお得なんだろ？

そんな彼女の表情である。年上の女の子に向かって、ひとい
言いぐさではあるが、まあこじがたぶんこの話の中で一番面白い部
分だからあえて詳細に描写させていただいた。え、こじが一番面白
いとか本気か、って？ 申し訳ないが本気である。そもそも僕はの
んちゃんが世界で一番可愛くて面白いと思つてゐるから、その比較精
度のほどは定かなものではないが。まったく、本当にひどい言ごく
さである（棒読み）。

「もうすぐですよ。そこ」の角を曲がれば、そこはすぐ彼女の家です。

カーブを曲がる際、巨大なお化けの映像が迫ってきたが、今はCGのお化けより現実に現れる幽霊の方が恐ろしい（のんちゃんはもつと恐ろしい）。僕は深夜の薄暗い住宅街、その歩道に本当に誰かがいるのか、じつと窓の外を注視した。

そしてはつと息を飲む。そこには、たしかに青白い顔をした若くて美しい女性が立っていたのである。

「マジかよ……」

「ひ、ひいい……」

ドタリ。後部座席ののんちゃんが泡を吹いて倒れ込んだ音である。静かになって良かった。僕は暗闇の中に立ち尽くす女性をじつと睨み続ける。ここで目を逸らしたら、魂とかなんとか、よくわからないけど大事なものを抜き取られてしまいそうな気がした。

「く、来るなら来おい……」

僕はわなわなと震えていたと思う。まー君の車は女性の隣にちょうど駐車した。彼女の細くてしなやかな、白い腕がドアにかかる。僕はゴクリと唾を飲み下した。

しかし、ドアが開くよりサイドウインドウの方が先に開いた。まー君が開けたのだ。そして、女性は僕の顔を覗き込んで、一言、こう告げたのである。

「『めんなさい、そこは私の指定席なんです。幽霊は、自分の居場所にこだわるんですよ』

第1話 ナーストタクシーひづりつけの夜 その4

「そもそも僕は一言も彼女が死んだなんて言つていませんが?」
ぬけぬけと抜かしながら運転するまー君であつた。く、悔しい…
。僕は真つ赤になつた顔を俯いて必死に隠しながら、拳をブルブルと震わせていた。

「じゃ、じゃあ、さつきの話はウソ……? ひどいなあ。純真な私たちを騙すだなんて」

怒り心頭のんちゃんである。まー君はいつになくにこにこと眩しい笑顔。その笑顔の半分くらいは僕たちに、もう半分くらいは助手席のみつちゃん、みぢるさんへと向けられていた。

「いいえ、一切ウソは混ぜていません。僕がさつき言つたことも、今お一人が見ている光景も、どちらも紛うことなき真実です。ただ、少しだけ言い方に変化があるだけです。これがホントの叙述トリック、アツと驚く真相つてやつですよ」

「ええ、でも彼女はトラックに轢かれたつて……」

「『運悪くトラックが……、そして彼女の体が吹っ飛んだ』つていふ部分ですね。あれ、実は『運悪くトラックが停まつていた』の略だつたんですよ。彼女は僕の車に夢中で気付かなかつたんです。で、自分でトラックの車体に思い切りタックルしていつた、と。僕が駆け寄つたときには、もう、手の骨にヒビの入るほどの怪我をしてしまつていて、なんと三日間の入院。しばらく『病院から』出ることができなかつたわけです」

「アホだな……」
「アホですね……」

思わず言つてしまつた。みぢるさんの顔が見る見る赤く染まつていくのに気付いて、僕は慌てて話題を次に移した。

「『彼女が生きた人間と会話できない』って言つてたのは?」
『『殆ど』がついていましたよね。要はそれくらいシャイだつてい

う意味です」

「さすがにオーバーですよ、それは。私だって知らない人と話すところまでいきます。人見知り、頑張って克服したんだから」「ふくーっと膨れるみちるさんである。おお、なんというか、可愛い女性だ。こうして見ると、とても一度幽霊と間違えた相手とは思えない。」

「『この世から消え去るのはネタが出なくなつたときだ』とか言ってましたけど、あれも」

「そのくらい、次から次にアイデアが出てくるつていう意味ですよ。私、あのトラックにぶつかった日から、頭のうちどころが悪かつた、もとい良かつたのでしきう、なんだか空から降つてくる、あるいは水が沸いてくるかのように、アイデアを絶えず思いつくりよつになつたんです。いわゆる怪我の巧妙、というやつですかね」

「なるほどね。でも、それじゃあ自分で書かれればいいのでは?」

僕は質問する。するとみちるさんは、右の掌に、とても愛おしい

ものを見るようなまなざしを向けた。

「残念ながら、こんこんと湧きだすアイデアの対価として、私は書く能力を失いました。短時間なら良いのですが、長時間ペンを持つたりキー・ボードを打ち続けると、痛みが走るようになつてしまつたんです。そこで、私たちは、一人で一人の作家になることに決めました」

「それが『道塚魔太郎』というわけか……。『道塚』って、ひょっとしてみちるさんの『道』なのかな。それじゃあ、みつちゃんつて結局仮名じやなかつたんだね」

「私が毎夜、このタクシーの中で、彼の用意してくれた幽霊たちを眺めながら、彼にアイデアをつぶさに話す。彼も彼で、お昼に乗せたお客様のエピソードを私に聞かせてくれる。こんなタクシーですから、乗つてくるお客様はおかしな人ばかりでしょう。だからこそ、私はこうした、一風変わった人たちの話を聞いたかつたんです。そして、私は彼から聞いた人々のエピソードから、新しい物語

のアイデアを練り上げ、次の夜同じよつこいで彼に話す……。もうずっとそんなことを続けてきました

「帰つてから出勤時間までずっと執筆してるから、殆ど寝る時間が取れなくて……。けつこつ苦労しましたよ。ただ、それでも彼女の役に立てることはとてもハッピー、嬉しかった」

「それはやっぱり、みちるさんに怪我をさせてしまったといつ罪悪感から……なんでしょうか」

のんちゃんが尋ねる。もう彼女は怒つてはいない。相変わらず幽霊があちこちから立ちのぼっているクセに、車内にはどこか温かい雰囲気が漂っていた。

「それももちろんありました。なんだかんだで、みつちゃんが怪我をしてしまったのは僕の責任だから……。ずいぶんとその事で思い悩みもしましたよ。なので、この執筆したり、エピソードを蒐集したりという行為は僕にとって贖罪でもあります。ただ、……、その、それ以上に、僕が彼女にいかれちまつてたつていうのもあります」

「まったく、リア充爆発しろっ！」

照れて顔を赤くして笑うまー君。ここまで、かなりぶつちやけた内容の話をしているのに、一人がまったく動じる様子が無いということは、もう二人の間ではたっぷり話し合いが行われ、すっかりお互いわかり合っているということなのだらう。そして、すでにお互いがお互いを許し合っている。

まったく本当に、リア充爆発しろ、だ。

まあ、確かに。

自分のためだけに、これだけとんでもない装置を搭載した車なんて造られたら、さすがに惚れないわけにはいかないかも知れないな。僕は目の前を飛び交うお化けたちを眺めながらそう思った。

「このドライブはいつまで続けるんだ？　みちるさんがこの車を気に入つてるのはわかるけどさ、さすがにこの先ずっと、というわけにもいくまい。それに、彼女から直接アイデアを聞きながら書いた方が効率がいいだろう。いつかはそういう方式に切り替えないと

「そうですね。もちろん、それはわかっています。これ以上彼に負担をかけることは、私としても本意ではありません」

「そこで提案なんんですけど、実は」

「あ、そろそろワナビ荘が見えてきました」

微妙に空気の読めないのんちゃんが指を差す。一晩のドライブを終え、朝日が差し込む逆光の中、ワナビ荘はいつもよりも眩しく照り映えていた。

「いと
が心配してゐるがもしれないわ
急いでご飯を作る支度をしな

丈夫？」

「大丈夫、慣れますから。皆さんこそ大丈夫ですか？リディです、ゆっくりお休みになつてください」

ふああ
確かに一晩寝なかつたからタクタクせ
んぢやん、今日はべぐずと画まで寝るとするか

「ええっ、私ともつちーが昼までぐちょぐちょと同衾！？ そ、そ
んなあ、アツアツなお二人を見てもつちーも燃え上がつちゃつたの

「…………。恥ずかしい…………。まだ心の準備があ…………。
…………。」

「だぞ。お前はさつさともう一人の朝食当番であるつばー」を起こして来い」

「リョーマさんならこの時間はまだ爆睡してるはずですよ。よーし、必殺百合百合拳法であられもない姿のリョーマさんを襲つて来ます

「兼ねて二つ持つ

車から下りてすっかり田のぼった眩しい空を見上げる。お化けには都合の悪い時間だ、『ゴーストタクシー』もさっさとアトラクション機能を切った方がいいだろう。朝日の中の幽霊だなんて、なんだか興ざめで、滑稽である。

ふと気になり、僕は車の中を覗いてみた。助手席には田玉の飛び

出したゾンビのストラップが落ちており、それ以外は空っぽだった。人が降りたような形跡もない。まー君は、とっくに車外に降りて、青空を眺めながら一人でタバコを吸っている。

「……一夜の夢、か」

僕は呟くと、昨日の分までゆっくり休むべく、ひとり一階の自室に踏み入った。上階からはどんな起こし方をしたのやら、のんちゃんリョーロがドタバタと喧騒を繰り広げている。リョーロは恐ろしく寝起きが悪いから気をつけて欲しいのだが、のんちゃんはわかつてやつていてるだけに性質が悪い。

まあ、いい。とるものもとりあえず、僕はワンルームの片隅に寄せてある簡易ベッドに倒れ込んだのち、もそりと声を出した。

「ただいま」

気付くとすでに薄暗くなつており、時計を確認するとなんと午後六時。「やばいっ、寝過ぎた！」僕ははつと飛び起きて、大慌てで台所へ向かう。ワナビ荘では昼は各自自由にとつてくれる決まりになつていてるが、夜はきちんと担当が決まっており、今日はそれが僕だつたのだ。加えて、朝はすぐに眠り込んでしまつたので、朝食も抜かしてしまつた。大失態である。これではDＪにもみんなにも合わず顔が無い……。僕の額から嫌な汗が吹き出した。

「遅れてしまふません！　すぐに手伝います！」

食卓の扉を開いた僕は、次の瞬間には呆気にとられてぽかんと口を開くことになる。目の前には、すでに完成した美味そうな料理が出来上がつていたのだ。

「DＪ、これはどうい……」

「あら、もつちーくん、良く寝ていましたね。お早うござります、もとい、お遅うござります、かしら」

そう言いながらお盆を持つて食卓に入ってきたのは、白くて細い手足の、昨夜の女性……、みちるさんであった。鳩が豆鉄砲を食らつた顔というのは、その時の僕の顔のために先人が残してくれた言

葉である。

なんだ、あのときのまー君の提案つていうのは、そういうことか。「ああらみつちゃん、もつお味噌汁持つて行ってくれたの、助かるわー。働き者ねえ、うちのもつちーなんかとは大違い。いつもちー追い出してあんたがここに住む? ううん、もつちーなんて可愛く呼んでやる必要ないわ、モチ男で十分よ。それがあいつの本名なんだから」

「モチ男さん……ですか。変わつてるけど、なんだか素敵なお名前ですね」

「信じるな信じるな。その男の言つことは九割方嘘だから」とは言え、D君に迷惑をかけてしまったことには変わりが無い。僕は素直にD君に頭を下げる。

「すみません、D君。イゴキヨツケマス」

「ガツデム! 遅刻魔のお前に食わすメシなんかねえよ! このワナビ莊を出でいくかあたしにケツを突き出すか、どつちかにしな!」D君がドスの利いた声で凄む。少しだけ本気で怖いから困る。

結局、D君の存在が一番のホラーでした、というオチ。

「おっ、すごいご馳走ですね。D君レシピとみつちゃんの家庭料理、夢のコラボレートですか」

「おほっ、豪華な料理! おいしそーだわー。リア充を見せつけられてメシマズでりながら、メシがいつもよつうまことはこれいかに。なんちゃって」

リヨー口も新しい女性が入つてきて嬉しそうだ。

「ところでもつちー、あんた爆睡してて今朝のあたしの『J飯食べなかつたけど、アレギーゅーこと? ちゃんと説明してほしいんですけど~」

続々と住人が集まつてくる。食卓の人口密度が一気に上がつた。D君による叱責がその後つやむやになつてしまつたのはありがたかったが、リヨー口によるさらに厳しい追求には正直参つた。当然僕は姦しい女性たちと逞しい（言葉遣いだけ）女性らしい連中に追い

やられ、一番端っこの席で縮こまりながら料理をつづけめり。ついで食べもの娘みといつものは恐ろしい。ともあれ。

賑やかなワナビ荘が、またいつそう賑やかに、騒がしくなったことは間違いなれど、だつた。

第2話 腐女子よ、マコーハールドを抱け その1

「腐女子って生き物はね。最強なのよ」

りん、と風鈴が鳴る。

暑い暑い、夏のある日曜日の午後である。

リョーは、筋金入りの腐女子である。

おまけにブラコンもある。

弟大好き娘なのである。

「ユウジはねえ。あたしがいなーんもできないの。だから、あたしがなんでもやつてあげてるの。そう、それこそ日常の世話から一人じやべーしようもないことまで、なーんでも、ね」

リョーの弟、ユウジ君は重い病気で、ワナビ荘から徒歩で十分享どの病院に、ずっと入退院を繰り返している。将来的にも、元気にな一人で歩き回れるまでに治癒するかは怪しい、と医者から言われている。今も病院に短期入院中だ。

だからリョーは、一日のうちけつこうな時間を病院で過ごす。どんなに短い時間だろうと、毎日必ず弟の顔を見に行っているようだ。ワナビ荘に帰つてぐることなく、本当に夜までユウジ君のお見舞いに行つている日もあるくらいだ。

「どーしようもないことまでつて……とこりかリョー。お前、弟をそーゆー目で見てないだらうな」

「そーゆー目つて、どーゆー目?」

「腐女子的目線だよ。他の入院患者と脳内で絡ませるとか、そういうことはしないだらうな」

「あー、ダメダメ。全然そういう対象じゃないわ」
掌をひらひらと振つて否定するリョー。よかつた、さすがにそこまで腐つてはいなか……。

「入院患者はオッサンばっかりだからねー、あたしオッサンは対象外なの。でも聞いて、あのねえ、コウジには三回は必ずお見舞いに来てくれる男友だちがいるのよ~」

「ぐつちょぐちょじやん! うわあ、すっげえ嬉しそう! やめて！」

「その幸せそなとろんとした目をやめて!」

「一緒に庭先でキヤツチボールとかしてくれてるわー。一人仲良くなタマを扱い、サオを振る! もつその響きだけでお腹いつぱいじやわー! ふん! ふん!」

「もうただの痴女だこのひと!...」

「でもねえ、最近コウジったら、学校で仲よしの女ができたっぽいのよ! 異性の恋人なんてアブノーマルな趣味はこのあたしが許せねー。矯正してやる!」

「世界を自分中心に回してたタイプだこのひと!」

「あら、ずいぶん賑やかそうですね。何の話をしてるんですか」

食卓でくつろいでいた僕たちに声をかけたのは、キッチンから出てきたみちるさんであった。彼女は先日の一件より、まー君と共同執筆を行うためにこのワナビ荘に頻繁に出入りするようになつた。だが、さすがに泊まつていいくよつな、それこそ『不純異性交友』と間違われそうな行為は謹んで、夜はちゃんと帰る。その辺の貞操観念はしつかりしている女性である。

「誰かさんとは大違ひだ。

「猥談です。具体的にはもつちーが買った今月の新作AVの批評会を行つております」

「いつ僕がそんな話をした……」

「制服もの一本と〇ーもの一本かー。もつちーは高校時代に恋愛できなかつたことによる未練と社会人のおねーさんへの憧れが性欲に結びついていると結論付けられます。やーらしー」

「結論づけられますじゃねえ! 制服とスース姿のお姉さんは全世界共通の男のロマンなんだよー。あと何で僕の購買履歴知ってるの! ?」

「あ、それはそうとねもっちー、あたしは彼氏募集中で処女なんだよ」

「『』で突然の激白！？ ちょっと嬉しいけど！ セめてもうちょつと恥じらいながら言って！」

みちるさんはすっかり困った感じの苦笑いで立ち止まつたままである。

りん、と風鈴が鳴る。

僕は食卓で城島ダイヤの新刊小説を読んでいた。氏の作品は相変わらずものすごく面白いので、食い入るように活字を追っていたのだが、姦しいリヨーコが向かい側に座つてしまつてはその集中力も続くはずがなかつた。

近日、どうしても出たい同人イベントがあるとかで、リヨーコはテーブルの上で新刊の準備を行つていた。具体的には『青春バット』という野球漫画のオンラインイベントであり、今は同人誌のネームを切つているところだつた。今期流行したアニメの鉄板カツプリングのカラミ本がメインらしい。リヨーコ、絵は素晴らしく上手くて色っぽいのだが、残念ながらBL関係に僕の触手は動かないのだった。ちなみにリヨーコのサークル、その界限では相当な人気を誇る壁サークルらしい（壁サークルとは、壁を背にした大きめのブースを宛がつてもらえる、規模の大きなサークルのことである）、と聞いたことがある。

ちなみにワナビの中にこうした同人活動を行つている人は多い。同人から商業に移つた作家も多く、各種イベントはプロにとつてもアマにとつても格好の発表の場となつてゐる。正直、僕はゴミックマーケット以外はよくわからないんだけども。

「ふー、暑い暑い。今日は暑くてうんざりするわあ。このTシャツの下は何も着てないんだけど、思い切つて脱いじゃいたいくらいだねー」

「だねーじゃねえよ、シャツの胸元を引つぱつてちらつちらつとこつちに目配せをするな！ おっぱいを見せるな、男の弱点を突くな

つ！」

「あ、それはそつと私は男の人におっぱいを触られたことありますせん」

「だからもうちょっと恥じらつながら言ひて…」
カフカは湿気に弱いらしく、リビングのソファの上で舌を出したながら、だらしなく寝そべっていた。

暑い暑い、真夏の午後のことである。

「ほんじゃーあたしはコウジのところへ行つてくるからー」

「おー、気をつけてなー」

「気をつける暇もないくらい近いわよー、病院」

ひらひらと手を振つて立ち去るリョー。夏の陽炎がゅらゅらと地面から立ちのぼり、あつとこつ間に小さくなる彼女の姿をかき消した。

さて、と。僕も夜まで執筆でもするか、とワナビ荘へ戻ろうとしたとき、

「ちょっとお伺いしたいんですけど…」

元気の良い声が僕を呼び止めた。

振り返ると、そこには背の小さくて髪の短い、セーラー服を着た女の子、つまるところ、女子高生が立っていた。

「ローランの経営してるワナビ荘っていうアパートはどこですかー？」

「ワナビ荘？ それならここだけ？」

「ひょええ！ これが噂のワナビ荘… 想像していた以上にボロくて小さいんですね！」

「そりや悪かったな……」

自分の住み家をボロ呼ばわりされて喜ぶ人はいないだろう。そんなわけで僕はちょっとだけむつとして、女の子を無視して部屋に戻りうとした。

「あ、すみませんすみません！ ひょっとしてお兄さんワナビ荘の

住人さんでしたか、大変失礼しました！ いやー、よく見ると素敵

「無理してフォローしなくていい」というか、誰、あなた

「二ひは二ひは甲 い難いミ 一二 ト通つ二、二、二、前山の處無理して二、二、二、口 しなくていい……といふが誰 あんた

「これはこれは申し遅れました。不肖わたくし、名前を薬師寺ハルト吉こまちが夢です。この件は二つもお世

「話になつていません」

「ワナビになるのが夢つて……別にそんなの今この瞬間にでもなれるんじゃない……」

卷之三

玄関先で騒いでいた僕たちに気付いたのであらわ、顔を出したD君にハルが助走をつけて飛びついた。ボキッと音がして「ぐおお」とD君がわりと本気で苦しそうな表情をしたため、少しだけ心配になつたが、すぐに「いい」「ねえ」と笑つて頭を撫で始めたので僕もほつと胸を撫でおろした。眉がひくひくしてた氣もするけど。

「うるさいなー、一度おいでつて誘つてたのよ、アタシのアパートへねえ。可愛いでしょー、うちのクラブにたまにお友達と遊びに来るのよ。コウジくんを連れてきたこともあつたわね」

なんかやたら身近で聞く名前だけど。

「つこわつ ももこウジさんのお見舞いに行つてきたといひです。こ
こにコウジさんのお姉さんが住んでいたしゃると聞きました。リコ
一 ハセんとこう方なんですが」

「ああ……」

だとすると、この子がリラーニの声だった「弟と仲良くなれる許
まじき女の子」なのかな……。

顔合わせなくて良かつた……。絶妙なタイミング。できるならこ

「私もワナビになつてみたいんです。ぜひここに住ませて下さー。」
のまま一生会わないでいてほしいものだなあ。

「ああん！？」

思ったそばからとんでもない問題発言を耳にして、勢いよくハルを一度見する僕。

「あーーー、嬉しごーーーと言つてくれるじゃないのー。でもねえ、今このワナビ荘はいっぴいなのよ、残念ながら。ここじゃなくてもワナビはやれるから、自分のおうちで頑張りなさい」

というか普通そうだと思つが。

しかし、ハルは何を思ったか僕の方をじっと見上げてきた。な、なんだよ。やる気か。僕は思わず頭二つ低いハル相手にファイティングポーズである。

ハルは口に向き直ると、にかつと笑つて悪びれることなく「いつ言った。

「それじゃあ、このお兄さんと同じ部屋に住みますー。」

第2話 腐女子よ、マニー・ホールドを抱け その2

「……つーか、お前、あれなの。コウジ君とは恋人とかそういう感じなの。それだつたらつちのリョーコに殺されると思うんだけど」「恋人とかそーゆーのはないです。ただのオタ友というやつです。たまたま好きな漫画が一緒でして、病弱なコウジさんのためにグッズとかを代わりに買ひに行つてあげてるんです」

あつけらかんと言うハルの雰囲気からは恋愛感情は読み取れない。本当にそういう対象ではないのだろう。

僕はふたたびワナビ荘のダイニングに戻り、今度はロッヒと共にハルと対面していた。みつちゃんが麦茶を運んでくると「ありがとうございます」とペーくんと頭を下げるハル。一応の礼節は弁えているみたいだ。

リョーコが帰つてきたらなんて言つか、非常にハラハラするけど。「なんでお前なの？ 男友だちに頼んでもいいんじやん。あるいはリョーコとか」

「つかのクラス、非オタクが多いんです。メイトとかゲマズにうかつに一般人を行かせられませんから。お姉さんは自分をそっち方向に染めようとしてくるので極力オタ話は振らなこようにしてるとか」「ああ、納得……」

「おひ、コウジさんの写真。ダイニングにまで飾つてあるなんて、本当にお姉さんに愛されてるんですねー」

ハルは共用テレビの上に置かれた写真立てに手を伸ばす。そこには病院のベンチに座り、両手でサインを作ったコウジ君と、その肩に手を乗せているリョーコが写っていた。コウジ君の膝には、古びたグローブが乗せられている。

「コウジさん、野球が大好きだつて言つてました。小学生のころは少年団に入つていて、それなりに活躍できたのに、どんどん体調が悪くなつて、今ではキャッチボールもままならないつて残念がつて

ます

「ああ、それは聞いたことがあるな。このダブルバインは試合に勝つたときに友だちと必ずやつた『勝利の儀式』とか。つてことは、今でも一緒にキャッチボールをしてくれている友だちはその頃のチームメイトか。切ないな」

「ただ、お姉さんがその様子を涎を垂らしながら毎回見に来るのが気になると言つていました」

「嫌な姉だ……」

「私たちが好きな漫画つていうのも、実は『青春バット』つていう名前の野球ものなんですね。主人公が病弱な少年だけど甲子園を目指すつていう内容で、コウジさんと重なるところがあります」

「あ、さつきリョーノちゃんが描いてたどぎついBL同人誌もその漫画だつたみたいよ」

「そういやそうだつたな……」

せっかくのいい話をいちいちぶち壊す姉である。

「うーん、うちに住みたいて言つてくれるのは嬉しいし、もつちーに遠慮することなく部屋を使ってくれてもアタシとしては全然構わないんだけど」

「いや、少しばかり構つてくれよ……」

「問題は、リョーノちゃんがいいつて言つつかどうか……。ほら、あの口度を越したブラコンじゃない。たとえ恋人じゃない、ただの友達だって知つても、あなたがここに居つくなといい顔をしないと思うのよね。そんな居心地の悪い環境で過ごすことは、お互いのためによくないと思うの」

DJは諭すように言つ。こういうあたりは年の功というか、なかなかに説得力のある口ぶりだった。確かに、僕も修羅場を見たくはないな。

かたや弟、かたやオタ友。恋人でも何でもない男を取りあう女たち。

それはそれで漫画みたいで萌えるけど。うん。

「うーん、わかりました。それじゃあもっちはーさんの部屋にずっと隠れて過ごします」

「いやだから僕の人権は……」

「ひょっとして、何か家に帰りたくない理由もあるの？」

「えつ……」

DJの思わず切込みに、思わず黙り込んでしまうハル。どうやら団星だつたようだ。年頃の娘の家出先に、たまたま仲のいいDJのアパートを選んだというところか。

「そ、その……そんなんじゃなくて、私は……」

そのまま声が小さくなり、俯いたまま言葉を紡げなくなつたハル。「ま、いいわ。しばらくここにいていいわよ。ただしお夜には帰るけど、いいわね？」そう言ってDJは奥へ引っ込んだ。ハルは僕と一緒にきりになつてもまだ俯き続けている。「なあ、もう顔上げろよ。これ以上突つ込んで聞くことはしないからね、なあ？」僕が声をかけると、ハルはようやくぼそりと呟いた。

「……なんです」

「は？」

「私のお母さんが、『青春バット』の邪道カッズプリング好きなんです！ 私はキヤツチャーネ主人公×ピッチャーネの親友が好きなのに、お母さんはレフトのキャラと組ませるんです！ だから、だから私、それで大ゲンカして、家を飛び出しちゃつたんです！」

「お前も腐女子だつたんかいっ！」

満を持しての僕の突つ込みは、はるか三件隣の家屋にまで響き渡つたという。

真夏の日曜日、午後のことである。

第2話 痴女子よ、マコーハールドを抱け その3

「それでー、そのときコウジが言うのよー。姉さんが作ってくれたものならなんでも美味しいよ、って。そんなあー、お世辞を言える歳になつたのねー、なんて思いながらも、本当にとつても美味しいに食べてくれるからついついあたしも嬉しくなつちゃつてしまつてえー」

その夜。病院から帰つてきたリョー口はダイニングにて食事中、弟ののろけ話を延々一時間は続けていた。おかげで夕飯のシチューがすっかり冷めてしまつているが気付いてすらいないようだ。

「でもお、あたしの前にお見舞いに来た子がいたらしくて、お花が置いてあつたのよ。男の友だちかな? って思つたら、ハルつていう例のコウジと最近仲いいつていう女らしくてさあ

手に持つていたリンクを「しゃつと握り潰すリョー口。「へへへえー」と返事をしながらも僕は背中に嫌な汗を一リットルくらい流れしていた。

「ま、コウジも年頃なんだから同年代の口に興味持つのはわかるんだけど、理屈では割り切れないといつていうか……もつと同性に口を向けるべきつていうか……ん

そこでリョー口は何かに気付いたようにハツと皿を見開き、鼻をすんすんさせ始めた。

「……女の匂いがする」

僕と口はぎくつと背筋を強張らせた。「あ、そろそろ洗い物終わらせなくちゃ」とそそくわと出てこくろつ。おー、ずるいぞオッサン。

「あ、わかりますか? 実は私、新しい香水を試してみてるところなんですよ。『学園セブン』のヒサヤくんの香りつていうのが出たば

つかりで……」

「あんたじやない」

一言のもとに切り捨てられて落ち込むのんちゃんである。元氣出

せ、僕はお前の味方だ。

「もつとこう、馴染みのない女の気配がするつていつか……嗅いだことない人間の匂いつていうか……」

「あ、それって私がもれません。ほら、最近来たばかりですから。ちょっと香りの強いシャンプー使ってますし」

みつちゃん、ナイスフォローである。

「ふうん……」

そう言いながらも依然疑わしそうにダイニングを見回すリョーロ。その日が、はたとテレビの上の写真立てを見たところで止まる。まさか。

「ユウジの写真、動いてる。斜め三十度くらい、私が出る前より傾いてる」

知るかそんなん！

「ほ、ほら、そういうえば昼に地震あつたし！ ちょっとだけそれで動いちゃつたんじゃないかな！ ね、ロッ！」

「そ、そうね！ けつこう大きい地震だつたわね！ ブホホホホ！」大声でこまかした後、アタシに振るな！ と中指を突き立てるロ。不動明王のような形相である。

「地震なんてなかつたと思うけど……」

「そ、そうだリョーロ、僕ちょっと絵の描き方教えてほしいんだけど！ 最近ちょっとBに興味持つてて、男と男のカラリミつてやつをぜひ！」

「ええつ本当ーー？」

ここでリョーロの目の色が思いつきり変わった。しまつた！ 地雷を踏んだ！

「そつかー、もつちーもついて田覗めたかー。いやーあたしはずつともつちーには素質あるつて思つてたんだよねー。よくぞ言つた、偉いぞもつちー！ ようし、それじゃあ今からあたしの部屋で徹夜の猛特訓だ！」

「ひ、ひいいいー？ 日が燃えてるー この人怖いいいー！」

両手を合わせて御愁傷さま、と咳く他の面々である。ああ、僕の貴い犠牲をどうか忘れないで……。襟を引きずられてリヨーノの部屋に連行される僕の悲鳴は、はるか三件隣の家屋にまで響き渡つたところ。

というか近隣の醸造場、じめんなぞ。ワナカヰ田もさへて、

さて、そんなこんなで夜。

ようやくリモートから解放されて、ぼうぼうのいで自室まで逃げ帰ってきた僕は、勢いよくベッドに倒れ込もうとして、そこにいた何者かが、

一
わ

と驚愕の叫びを上げるまでその存在に気付かず、結果的にその何者かの上に思いきり覆い被さる形になってしまった。

たのか！？ といつが叫び声を上げるな、他の奴らにバレる！」

「おうと、失礼しました。実はさっき一回帰ってきてお母さんと和解したのですが、別の作品のカッティングでまたしても揉めてしまいまして、今度は修復不可能なほど決裂を」

「うう……なんかもう頭痛が

ある意味、ワナビ莊にふさわしそうな奴である。

「それでもつちーさんがこの部屋に帰つてくるまで待つていたのですが、じつやらいじんな時間までつゝー「」さんの部屋でこちやんじりしていったよ。おかげでお腹がペーぺーです」

「紛らわしい言い方するなよ、何もやましいことはないぞ……。と言つか、ちゃんとご飯食べてこなかつたのか？　D」の「ご飯も人数分しか作らなかつたと思うけど」

「う～～、お腹減りました。何か食べないとおっぱいと背中がくつついてしまいます」

「仕方ないな。僕の部屋には何もないけど……、確かキッチンにいりこりお菓子があつたはずだ。取つてきてやるよ」

「あつ私も行きます。自分で選びたいです」

「お前自分の立場わかつてるとか!? 誰かに見つかつたら困るのは僕なんだぞ」

「それじゃ夜中まで待ちましょう」

そんなわけで僕たちは夜中になり、みんなが寝静まるまで待つた。その間、僕は意外な事実を知らされた。ハルが、リヨーとの漫画の大ファンだというのである。

「へえ、そうだつたのか。あいつの同人誌、そんなに有名なんだ」「有名なんてもんじやないですよ。行列ができます。ファンの間で奪い合いが起きて運営委員の指導が入つたなんて伝説もあります」「ふーん……。ファンと作家、なんというかこう、つまくわかりえないもんかねえ」

「私も、リヨー「ちゃんと仲良くなれねば」と考へてはいたのですが

……

そんな話をしているうちにとつぱり夜は更けて午前一時、いよいよ僕たちは『食べものを求めてキッチンを漁れ作戦』を決行した。というか付き合い良過ぎだろ、僕。

「そろそろ頃合いですねー」

「いいか、絶対に物音立てるなよ。僕が先頭に立つて行くから後ろからついて来い。できれば誰も起こさずに穩便に済ませたい

「がつてん承知！」

僕たちは電気をつけず、足音を殺しながら階段を下りてダイニングを通過し、キッチンへ移動する。幸い、誰も気付かないよつだ。お菓子の入っている棚を漁り、一通りのお菓子をゲット、そろそろ部屋に帰ろうか というそのとき、がちゃりと音がして二階の扉が開いた。リヨー「の部屋だ。

（くそつ、何て間の悪い……！　ここで僕が見つかったらまたB-L談義で長時間捕まるかもしれん。隠れよう）

（えつ、隠れるつてビックリ）

（ここしかない！）

僕はハルの手を引き、キッチンの扉の裏のすき間に一人で身を隠した。

（うおっ、近い！　なんだこのギャルゲーみたいな展開！）
（ギャルゲーじゃなくてB-L同人誌と書いてください！）
（どっちでもいいだろが！）

電気もつけないまま、のそのそと真っ暗なキッチンの中を歩き回るリョー・コの気配を感じる。リョー・コはシンクへ行って水道水をコップに注ぎ、ぐびぐびと飲んだ。そしてその後、さつさと部屋に帰つてくれるかと思いきや、どっかりとダイニングの椅子に座り、なにやらぼーっとしている。ダイニングを通らないと部屋へは戻れない。キッチンには他に出口はなく、大家であるローラの部屋へつながる扉があるばかりだ。僕はハラハラしながら彼女の様子を見守った。暗闇の中、二~三分もそうしていただろうか、リョー・コががばりと身を起こし、鼻をすんすんさせ始めた。やばい、これは。

「……女の匂いがする」

これはまずい。このままだとさすがにバレる。僕は扉の後ろからそおつと抜け出そうとする。一か八か自分が盾になつてハルを隠し、外に逃がそうか。いや、どんなに頑張つても確實に背後に入人がいたら見えるよな。どうすれば、どうすれば……。

そのとき、パチリとキッチンの明かりがついた。

「あら、もつちーじゃないの。アナタこんなとこひどくなになにやつてるの？　それもこんな時間に」

キッチンの奥からローラ登場である。なんてこつた、こんな時に……

…！　僕は「いやあ、小腹が空いちゃって、あはは」などと言い訳をしながら、後ろ手に必死に指示を出した。逃げろ、逃げろ！

その意味を解したのか、ハルが背を屈めて素早くキッチンを出て

いつたのが田の端で見えた。よし、あとはダイニングを抜ければ…

…！

「あらあら、ごめんなさいねえ、お夕食足りなかつた？ 今度からもつと作つた方がいいかしらね。量も愛情も一倍増し！」

「いやあ、ローリの愛情はもう足りてますよ。むしろこれ以上濃くしないで」

「いやん、お上手ねえ。そんなもつちーにローリと愛情二倍増し！」

その時、隣の暗いダイニングから、

「きや つ！」

「きや つ！？」

悲鳴が響いた。

「あ、あら！？ なになに、なんなの！？」

結局見つかりやがつて……、それも最悪の相手。僕は頭を抱えて溜め息をついた。

第2話 腐女子よ、マコーホールドを抱け その4

で。

結局ハルは自宅に電話させられて泣く泣く帰宅、夜までハルを部屋に入っていた僕はDJKにたっぷりと絞られ、一時は本気で強制退去させられそうになつた。

「若い娘っ子をこんな時間まで置いとくなんてなに考へてんだコラア！ おのれがなんかやらかす前に東京湾に沈めたろか、ああん！？」

「す、すすすすみません……」

正座をさせられた僕は半泣きになつてDJKに朝まで怒られ続けた。いや、本当に怖い、この人。さすが若い頃チームを仕切っていたと自称するだけはある（新情報）。

しかし……、DJKも恐いが、ハルの正体を知つたときのリヨーノの姿にも、怖ろしいものがあつた。

（この子がハル！？ なんでここにいるの！ それもこんな時間に！）

（出でつて……、出でつてよ！ 顔も見たくないっ！）

そこまで言わなくともいいのに……と仲裁に入ろうとしたが、結局責任が一番重い僕は、DJKにじろりと睨まれて黙るしかなかつた。一方的に怒鳴られながら、俯いてプルプルと肩を震わせていたハルの姿が忘れられない。

あれから三日間、せつかく昨日は熱心に漫画の書き方を教えてくれたリヨーノは、もはや僕に口も聞いてくれない。まあ、昨日のあれも演技だったとバレたわけだし、当然と言えば当然か。彼女の純粋な乙女心を踏みにじつたわけだしなあ（とプレイボーイっぽく言つてみる）。

カリカリカリカリ。リヨーノは今夜もダイニングでコピー本の準備である。僕の顔も見たくないなら部屋に帰つて描けばよさそうな

ものなのだが、残念ながら彼女の部屋はいわゆる汚部屋の類で、原稿を広げられるスペースが無いのであった。

「あ、あのさあ、リョーロ」と僕がおずおずと話しかけてみても、「ああん?」と言わんばかりの強烈な視線を返してくるのです。」すぐと引き返すしかない。弱い。弱いぞ僕。ビームでも情けない男である。

同じようにリビングで、一人で創作活動を行っていたまー君がちよこちよこと手招きして、「リョーロさんと何かあつたんですか?」と尋ねてきた。「ちよつとな……怒らせちまつたんだよ」と適当に話を合わす。あの夜あつたことについてにはロードリョーロ以外は知らないし、ロードはあれ以来は普通に接してくれているが、リョーロの態度だけはいつまでも軟化しないのだ。

あれじやあリョーロがいる限りハルはワナビ荘に出入りできる日は来ないな……。僕は少し残念に思う。なんとかリョーロとハルにはわかり合つてほしい、というか、もうちよつとハルの人格を知つてもらつて、一方的に恨むのをやめもらわないと……、なんだかハルにもコウジ君にも氣の毒だし、この先いろいろなことが問題になると思うのだ。

「なるほど。察するに、また弟さん絡みですね」

「そりなんだよ。仲直りのきっかけも見つからないし、このままじやいつになつたら口を聞いてもらえるのやら……」

そのとき、携帯の着信音（アニメの主題歌だった）が鳴り響いた。リョーロがポケットから携帯を取り出し、耳に当てる。そしてそのままのすじい猫なで声で「コウジー、待つてたよお~」とアーレボイスを垂れ流し始めた。

（あの変わり身には毎度感心するな……）

うん、へえ、そつ、などと相槌を打つリョーロ。なにやら大事な話が行われているようだ。そして、唐突に受話器から耳を話すと、おもむろに、

「あのやー、今度の日曜日一緒に『青春バット』のイベントに来ら

れる人いない？ ノウジが来たがってるんだけど、じゃんけん会とかあいさつ回りとか、席を外さないといけないことがあって。手伝つてほしいんだけど」

そんなことを言った。幸いその場にワナビ荘の全員がいたのだが、なぜか全員が「示し合わせたように」にやつと笑うと首を横に振った。

「あら残念、その日はうちのクラブでイベントがあるのよお」「私も声優学校の練習が忙しくて……。本当に」「めんなさい」「みつちゃん、僕たちも」

「え、ええ、そうね、ちょっと都合が悪いわ」

最後の一人はなんかいかにも嘘っぽい。だが、こうなると仕方がない。要は、僕に行けってことだ。

「あー、僕なら……。運悪くその日はなーんにもないんだ。なんなら一日中付き合ってやつてもいい」

「ちつ」

「あからさまに舌打ちされた！？」

だが、これが仲直りする最後のチャンスかもしれない。僕は腹をくくることにした。それに、『青春バット』のイベントならば、おそらく……。

そんなこんなで、僕はリヨーノの便利屋をやることになった。まあ、たつた一日のお手伝いでの日の恨みが解消されるなら、安いもんだ。

「いくらなんでもこれはこき使い過ぎだろあつ！」

そして当日。僕は朝からひいひい言つていた。

約四十キロする段ボールを丸三個、その搬入の全てを任されており、それだけでも充分にこき使われているのだが、実はこの前段階でも僕は漫画の手伝いやら編集作業やらで「こじ」一週間ほどまともに寝る間も「えられなかつたのだ。

「あーら、ここの間はBL漫画が描きたくて仕方がないつていつたでしょ？」

そんな脅し文句でリョー＝は僕のケツを引っぱたきつベタを塗らせ、トーンを貼らせ、印刷会社に連絡を取らせた。おかげですつかり漫画の技術がアップしたような気分になつてしまつ今日この頃である。

「まだまだ。今日はじんけんでコウジが欲しがつてる限定賞品が当たるイベントと、BL作家の直筆サイン色紙がもらえるイベントが重なつてるんだからね、そのときばかりはあんたの力を借りるわ。じんけんに勝てば主人公の使つてるミットがもらえるつてんで、ユウジの奴張り切つちゃつてねえ。はーあ、体がいくつあつても足りないわあ、同人作家はつらいわよ」

溜め息をついて肩をとんとんと叩きながらも、ビニカ楽しそうなリョー＝である。僕は荷物に押しつぶされそうになりながらも、よかつた、なんとかリョー＝に、少なくとも気持ちの面では許してもらえたかな、と安堵していた。

しかし、自分のブースに到着したとき、リョー＝は驚愕に顔を強張らせ、目を見開いた。そして呟く。

「なによ、これ……」

ぐるりと振り向き、つかつかと僕に歩み寄る。そしてリョー＝は、バシン、と僕の頬に平手を打つた。ざわざわしていた会場が一瞬静かになる。周囲が僕たちに注目している。

「なんで……、なんであの子連れてきたのよ。誰も頼んでないんだけど」

ブースには、僕が誘ったハルが、申し訳なさそうに座つていた。

「あいつも『青春バット』のファンなんだよ。お前の同人誌も好きなんだつてさ。あと、人数が足りなかつたからつてのもある。お前が弟と一緒にじんけんに行つて、もう一つのじんけんに僕が行つたら、誰が店番をするんだ?」 いつ見ても、気を利かせたつもりなんだけどな

「……余計な事すんな!」

リョー＝はハルの襟首を掴んで無理やり立たせる。「おいつ！」

僕はリョー「の腕を握つて静止しようとしたが、乱暴に振りほどかれて、尻もちをついてしまった。

「……来てくれてありがとう。あたしの同人誌好きっていうのにも、一応お礼を言っておくわ。だけど、ごめんね、あたしの作品に関わつてもらうわけにはいかない。あたし、そこまで人間でできないの。ブースからは、出でもらえるかしら」

「えつ、で、でも……」

「出でもらえるかしら」

静かに、しかしきつぱりと言つリョー「に、逆らうことはできないと判断したのであるう、ハルは「はい……」と消え入るように返事をして、そのまま「ごす」と背中を向けて姿を消してしまった。

「おい、リョー「、今のはいくらなんでも」

「……あのせ、もつちー。あたしつてさ、ガキだと思つ?」

「……いや……」

僕はそれ以上何も言えなかつた。またしてもしばらく氣まずい時間が続のくかと思ったが、いざイベントが始まるとそんなことは言つていられなくなつた。さつそくりヨー「のブース前には行列ができる、僕とリョー「は掛け声を掛け合いながら必死に同人誌を陳列しては売り続けた。

そんなこんなであつという間に午前が終わり、お昼過ぎ。リョー「が一時的にブースを抜け、ユウジ君を連れてきた。ユウジ君は車いすに乗つていた。少し調子が悪そうだったが、会場のあちこちで行われているゲームやさまざまな種類の同人誌、そして何より姉のサークルの人気の凄まじさに目を丸くし、言葉を失つていた。「すごい、すごい」という言葉を繰り返し発する彼を見て、楽しんでもらえたようだ、と僕もなんとなく嬉しくなつてしまつた。

そしてお待ちかねのじゃんけんイベントの時間がやつてきた。幸い、もう一つの方は時間が重ならないようにずらしたのか、まだ行われていないようだ。二人の姉弟は喜び勇んでじゃんけんに参加した。車椅子に手をかけながらじゃんけんするリョー「の後姿がブー

スからもよく見えた。

「よく来てくれたぜ、青春高校の生徒のみんな！ 今日はたっぷり商品を持ちかえってくれよ！」 よつしや、せつやく始めよつが、
「じゃーんけーん！」

登場キャラクターの真似なのか、スタッフがやたらと演技がかかつた声でMCをしている。ひょっとしたらアニメ版の声優なのかもしない。彼が『じゃんけんぽん』で手を出し、観客も全員手を出す。彼に勝った者は立つたまま残り、負ければその場にしゃがむ、というシンプルなゲームだ。僕はほつけたようにその様子を見ていた。いやはや、集まっている女性陣のはしゃぎようつたら、尋常ではないのだ。これが腐女子パワーといつやつか。僕は感嘆の溜め息を漏らした。ホント、スゴイ。

しかし、やがて僕はリョーゴがじゃんけんに夢中になつている手元で、コウジ君がなんだか苦しそうに身を屈めてこじりとに気が付く。震えてもいるようだ。そして、そのことにリョーゴは気付いていない。そうわかった僕は、思わずブースを飛び出し、イベントステージのところまで走り寄つた。

「おい、リョーゴ。何やつてんだ、コウジ君が苦しんでるぞ。大丈夫なのか？」

「は？ あつ、あんた、なんで勝手にブースを出てきてるのー。」「それどこのじゃないだろ！ コウジ君の様子を見ろ」「えつ……」

コウジ君は胸を押さえて、苦しそうに咳をしている。顔色が真っ青だ。「コウジっ……」彼の様子を見て、リョーゴも顔が青くなつた。

「あー、ガンガン行くぞー！ じゃーんけーん！」

そうしている間にも、じゃんけんイベントは容赦なく進行している。リョーゴは一瞬言葉もなく、困った顔で、コウジ君の顔と司会者の顔を見比べた。

……迷つた。

そう思つた瞬間、僕はまつたく反射的に、

「馬鹿野郎っ！」

彼女の頬に平手を打つていた。パンッ、という乾いた音は周囲の熱狂にかき消された。髪の毛が横を向いたリヨー子の額と頬に貼りついて、彼女の表情を隠していた。

「……じゃんけんなんかやつてる場合か。病院だ。さっさと行け。ここは、僕が引き受ける」

周囲の人々はじゃんけんに夢中で僕たちの様子に気付かない。リヨー子は目に涙を溜めて、「……これで、お相子だね」と言い残し、うなだれながら、それでも急ぎ足で、コウジ君の車いすを押しながら会場を後にした。

僕はすぐに携帯電話を取り出し、手早く最初からセットしてあつた番号にかける。「ハルは一回ですぐにつながつた。

そのとき、すぐ近くの別のイベントステージからもわっと歓声が上がつた。あちらもどうやら始まつたようだ。

「待たせたな。ようやく出番だぞ、ハル」

第2話 痴女子よ、マコーラールドを抱け その5

ハルは意外にもすぐそばにいた。というか、じょんけんイベントに参加していた。

「あれえ!? 出でていけって言われたから落ち込んで出でていったかと思つてたのに……、ちゃつかり楽しんでは。意外と図太いのな、お前」

「それはそれ、これはこれです。落ち込むのは後でもできますから後回しとして、とりあえず今やる」と力をいっぽいやる」との方が多いです」

「んで、その結果何に落ち込むべきだったかすら忘れてしまつ、と」「まあ、そんなところですね」

けろりと言い放つハル。うーん、こいつは僕が思つていた以上に大物かもしれない。

「まあいいや、それじゃお前は向こうのイベントに行つてB-L作家のサイン色紙をゲットしてくれ。リョーゴが欲しがつてたものなんだ。僕はユウジ君が欲しがつてるつていうミシットを手に入れる」

「あー、でもそのサイン色紙実は私も欲しいんですねー」

「そこであえて私利私欲を取るか!」

「じょーだんですよ、私は同人誌は好きですがサインにはあまり興味が無いです。しかし、じょんけんですから結局運の勝負ですね。出たところで勝算はあるんですか?」

「正直、無い。だけどあいつにあそこまで啖呵を切つちまつたんだ、それなりに健闘しない限り顔向けできないだろ」

「別にそうでもないと思いますが……。まあいいや、それじゃ私は向こうへ行つてきます」

飄々とした様子でじょんけんイベントに参加するハルの背中を見送りながら、うーん、女ってわからん、と首を捻る僕であった。で、そのじょんけん大会。

念願の、ミットが賞品のターン。

向こう側のゲームでは、作家のサインが賞品のターン。

なんと、僕もハルも、けっこいいところまで勝ち残っていた。こつちは残り十人、向こうは残り十五人、といったところか。負けた参加者は悔しそうにしながら次々としゃがんでゆく。僕は、自分がまだ立っていることが信じられないような気もちだった。普段は、じょんけんで連勝した記憶なんて殆どなかつたし。

しかしその緊迫したゲームの最中、携帯に電話がかかってきた。リヨーコからだ。他の人物からなら無視したかもしぬないが、こればかりは取らないわけにはいかない。僕は片手を高く上げながらもう一方の手で電話ボタンを押した。

「もしもし、リヨーコか？ どうした？」

「も、もつちー……。ユウジが、ユウジが、大変なお

なんと、リヨーコが泣いている。鼻をぐずぐず言わせ、息も絶え絶えに、かすれた声で僕に助けを求めている。そのあまりに意外な彼女の様子に、僕は思わずパーを出した。

「おおつとお！ ここで五名に絞られました！」

知らないうちに僕はベスト5に絞られていたが、今はリヨーコの話を確認する方が先決だった。「どうした？ 何があつた！」僕が尋ねると、リヨーコはしゃくりあげながら、

「ユウジの容体が急変して、いま、緊急治療してるけど、い、息がちゃんとできてないって、急に人が多い所に行つて、緊張したんだろうつて。あ、あたし、ユウジが苦しんでたのに、気付いてあげられなくて、じょんけんなんかに、夢中になつてて。イベントなんて、連れていかなければ、よかつたあ。あ、あたし、あたし、姉失格だ

よお……

そしてわっと大きな泣き声を上げた。参った、彼がそんな状況になつていたとは……。僕は心からの無念さを表現してグーを出した。「おおつ、ここでラスト二名だ！ まさかの一騎撃ちです、果たしてどっちが勝つのかー！」

「馬鹿野郎、お前がしつかりしなくてどうすんだ！」

僕は受話器に向かつて怒鳴った。これにはさすがに周りの参加者もしんとなり、となりのイベントでいつの間にかちやっかりベスト3に残っていたハルも振り向いた。

「楽しそうだつたじやねえか、ユウジ君。あんなに笑顔で喜んでたじやねえか！ 連れて来なれば良かつたなんて言つんじやねえよ！ それに、お前は姉失格なんかじやない」

しゃがんでいる参加者は皆、じやんけんしながら通話する僕をボカンと見上げている。僕は彼らの視線も気にせずに続ける。

「ちょっと失敗はしたかもしだいけど、毎日ユウジ君のお見舞いに行つて、ユウジ君のためにミットをゲットしようとしてあげて……、これが姉じやなくて何が姉だつてんだ。じやんけんなんかだあ？ そのじやんけんをユウジ君は楽しみにしてたんだろ、じやあいじやねえか。今から最後の勝負だ。さあ、何を出す。ユウジ君に聞いてみる」

「……うん。ごめん、そうだね」

二つの間にカリヨーノは泣きやんで、僕にはつきりとした声で返事ができるようになつていて。僕はにやつと笑う。「あ、あのう。勝負、始めてもOKですか？」司会者があずあずと尋ねる。僕は力強く頷いてやつた。

隣の会場では、ハルが僕と同じように一騎撃ちになつていて。彼女も僕を見ていたので、同じように頷いてやる。するとハルも不敵な笑顔で頷き返してきた。もとい、腐的な、と言つた方がいいか。

「ユウジに聞くまでもないよ。あの子なら絶対にあの手を出す。今までずっとそつだつたもん。……野球の試合で勝つたら必ずやつてた、勝利の、」

「それでは覚悟はいいですか！ じゃーんけーん！」

司会の声が重なる。僕は思い切り右手を振り上げて、その手を出した。

もちろん、ハルも、同じ手。

相子はなかつた。それで、一人の勝負は決つた。

拍手が起つた。ぱちぱちぱちぱち。何に対する拍手なのかわからぬけど、おそらくみんな、そこで「何か」が起きたことだけは察しているようだつた。

僕は、いつの間にか自分が息切れしていたことに気付いた。どうやら相当集中していたらしい。そこで僕は唐突に気付く、「はつ、そういえばサークルのブース……」しまつた！ 僕はすっかり放置してしまつっていたブースの方を振り向いた。

しかしそこには、思わぬ人物　まー君とみぢるさんとのんちやんと、それと　なんと口ノまでもが揃つて、僕たちに拍手を送つてくれていた。みんな、結局来てくれたのだ。

「よかつた……」

僕は全身の力が抜けて、その場にへたり込んでしまつた。

第2話 腐女子よ、マコーホールドを抱け その6

「……もつちー！ それに、みんな……」

イベントが終わり、僕たちが病院に駆けつけると、病院廊下の椅子でうなだれていたリョーノが立ち上がった。その顔は気疲れのせいかすっかり青ざめていた。

「コウジ君は？」

「うん、もう大丈夫。今は薬で寝てる……。わざは取り乱してごめんね、もつちー」

なんだか急にじょじょくなつてしまつたリョーノを前に、なんだか物足りない気もする僕である。「あ、ああ」と曖昧に返事をしておぐ。

「それにしても、コウジがあんなになるまで気付かないなんて、やつぱりあたしはダメな姉だよ。あれだけ普段から好きだのなんだの言つておきながら、イベントになるとほつたらかしだもん。きっと天罰だつたんだよ、あたしに対する」「そうでもねえぜ、ほらよ」

僕はカバンの中から今日の戦利品を差し出した。それは、真新しい、赤い色をしたキャッチャーミットだつた。

「これ、実はハルが手に入れてくれたんだ。じやんけんで勝ち残つてな。最後はもちろん参加者全員の前で勝利のダブルバサインさ。……なんか言つことがあるんじゃないのか、リョーノ」

「……うん」

ぽん、とミットを受け取り、リョーノはハルに「『めん』と頭を下げた。「や、そんな、頭を上げて下さい。私もいろいろと悪かったです」と慌てるハル。どうやらこれで一段落のようだ。その場にほつとしたような、和やかな空気が流れた。

「……あ」

ミットをじっと見つめていたリョーノがハツと顔を上げ、思い出

したように言ひ。

「そういえば、作家さんのサイン……」

「あー、あれなー。僕がそつちのじゃんけんやつてたんだけど、最後の最後で負けちました」

「……もつちー」

リョーの顔は冷静だが、頭に思いつきり（怒）マークが浮かぶのを誰もが見た。あーあ、いつものリョーに戻つて嬉しいやら悲しいやら。

「あとであたしの部屋に来なさい。今日のお礼に、朝までみつちりしじこでやるから」

「ひ、ひいい！？ い、いくらなんでももう体ボロボロです！」

それだけは許してつ！

「ダメ、許さん！」のチャンスを逃したら向ひの一年は手に入らないレア物なんだぞおお！」

早速がやがやと暴れて「病院では騒がないでください！」と看護師さんにたしなめられる僕たちであった。そんな中、まー君はこぎやかな輪から離れて、一人ぼそと呟く。

「自分の手柄をさらつと人に譲つて、どつち女の子の高感度も上げるとか……、もつちーさん、マジでイケメンです」

その三日後。

僕はふたたび病院を訪れた。ユウジ君がすでに元気になつているとかで、様子を見に、である。一応プレゼントの渡し主として、ユウジ君の喜ぶ顔を見ておきたかったし。

昼間の病院内は入院患者や見舞客でごつた返していた。受付で部屋番号を尋ね、僕はユウジ君の病室へ向かつた。が、残念ながらそこに彼の姿はなかつた。

病室には、「ユウジへ」とリョー独特の丸文字で書かれたカードの挿してある、籠入りの花束が置かれていた。お見舞いだろうか。僕は籠を持ち上げて匂いをかいでみた。

この花は何といったか、鮮やかなレモン色の、小ぶりな花弁を眺めながら僕は思い出す。そう、確か、「マリー・ゴーランド」と言つたつけ。

なぜこんな花を？

そもそもリヨー・コは大して花好きではなかつた氣もするが……。なんとなくそのあたり、引っかかりつつも、僕は籠をその場に置いた。とりあえず、あいつらを見つけないと。

仕方なく僕は軽く彼の姿を搜索することにした。心当たりはトイレか、あるいは 中庭。僕は二階の廊下から日の差す中庭を見下ろし、そこで意外な光景を目の当たりにする。

中庭では三人の若者がキャッチボールをしていた。一人は車椅子に乗つて赤いキャッチチャーミットをつけたユウジ君、一人はリヨー・コ、そしてもう一人は ハルであつた。

リヨー・コはハルに屈託のない笑顔を向け、ハルはリヨー・コに同じように笑顔を向け、そこには完全に互いを許し合つた二人の姿があつた。僕はこれ以上自分のすることはないな、と感じ、そのまま何も言わず病院を後にした。

その夜、リヨー・コはハルと一緒に帰つてきた。DJも、もちろん僕たちも彼女を歓迎した。リヨー・コと一緒に食事を楽しむハル、テレビを見るハル、くだらない話で笑い合つハル。そうした光景を見ているだけで胸がすくような思いだつた。

リヨー・コとおっぱいを触り合つハル、リヨー・コとポッキーゲームをするハル、リヨー・コと一緒にお風呂に入るハル……。

……ん？

「おいおい、ちょっと仲良すぎじゃあ……」

「あ、もっちはー！ 聞いて聞いて」

ハルにパジャマを着せて自分の部屋に連れ込もうとしていたリヨー・コががつと僕の手を握つた。つていうかあんたら、同じベッドで寝るつもりじゃないだろうな。

「あたし、今まで自分の視野が狭かつたことに気付いたの……。ハ

ルに出会つてようやく気付いたわ。あたし一人じゃ知ることのできなかつた世界。とても素晴らしい世界がこの世にはあつたのよ
「や、それつてまさか……」

「そう、百合の世界！　B-Lもいけど、これから時代、ガールズ・ラブよ！　早速次回のイベントに参加するわっ！」

「や、やつぱり……」

こんな感じのわかりやすいオチも、なかなか珍でいいものだ。
あれ以来結局ほとんど落ち込む暇もなく、リヨー子は執筆に没頭
しているし。

ハルもリヨー子に教えられて、見よう見ま似的の漫画製作などを始めた模様。休日なんかはワナビ荘のダイニングは姦しき女の仕事場と化すようになった。

まさしく、「何に落ち込むべきだったのか忘れてしまった状態」なのだな。まったくたいしたものである。

僕がそれを言つと、彼女たちは決まってこいつ返すのだ。

「腐女子つて生き物はね。最強なのよ」

僕も見習つべきかね。

追伸。

後で調べてみたところ、リヨー子がユウジ君に送つた花、「マリーゴールド」の花言葉は、「嫉妬」「可憐な愛情」そして「健康」だつたそうな。

果たして、彼女がどうこうつもりで、どの花言葉を意識してこの花を彼に送つたかは、永遠の謎である。

案外、全部かもね。

やつぱり、女つて、怖い。

かもしない（ちゃんちゃん）。

第3話 我が名はシメキリ・クイーン その1

「この辺で少し、僕の書いている小説についても触れた方がいいだ
う」と思つ。

前述したように、僕は「城島ダイヤ」という名前の作家に憧れて
小説を書き始めた。

ダイヤ氏は各ジャンルにおいて、いずれも素晴らしい作品を残し
ているが、特に氏の作品の中でも強烈に指示を集めているのが、「
ライトミスティ」であった。

ダイヤ氏の描くトリック、ストーリー、そして人間ドラマは読む
者を夢中にさせずにはおかないと、氏の作品に影響されて、創作を始
めたという人も多いことだろう。

そして僕もそんな中の一人。現在書いているのはその「ライトミス
ティ」というジャンルである。正直言うと僕にはそれほどミスティの
素養がないのだが、だからといってミスティを書いてはいけない、
ということにはならない。というわけで、なんとか「それっぽく」
書こうと努力をしている。実現可能そうなトリックと派手な展開が
売りである。

僕は、実のところ、かなりの遅筆だ。何ヶ月も前から書いている
はずなのに、なかなか規定枚数に達することができない。というか、
一日に何時間もパソコンの前に座つていられない。集中力が根本的
に足りていないのである。

「もつちーは、頭はいいんだけど、落ち着きがないのよねえ」

小学生の息子を見る母親のように、DJは僕のことをそう評して
溜め息をつてくれるのだが、できないものはできないのだから仕
方がない。アイデアはそれなりにあるし書いている時は楽しいのだ
が、一度詰まると一週間くらい執筆を中断するときもある。

「なーにもつちー、またスランプ？」

リヨー「はそんな僕の様子を見てけらけらと笑う。けつ、笑いた

ければ笑うがいい。スランプなんかじゃない、頭の中で文章を組み立てて推敲しているところなんだ。全ての行程が終われば、あとはその出来上がった文章を原稿といつも白いキャンバスに描き出すだけだ。

「何をえぐり出すんですか？」

「うわあっ！ ハル、いたのか！？」

ワナビ荘の中をちょこまかと動き周り、僕の行く手に突然現れては驚かしてくる薬師寺ハルである。どうやら、僕は知らないうちに自分の心の中の声を口に出していたらしい。

「ちょうどヨーロッパんに漫画のコマ割のコツを教えてもらつていたところです。漫画つて奥が深いですねー、私、ワナビになつて本当に良かったです！」

「あ、そ……」

「あれ？ どうしました？ 『機嫌が悪そうですねえ。ひょっとして冷蔵庫に入つていたプリンを勝手に食べられたりしたんですねか？』『なんだそのベタな展開は……。ひょっとしてそれもリヨーロの影響か』

「ええ。プリンを食べてしまい喧嘩になつた男同事事が、仕方なく残つた一つのプリンを口移しで食べさせあうという物語です」

「なんでそうなるんだよー、食べちゃつた奴が普通にプリンをあげればいいだけの話だろ！」

「まったく、野暮な事言ひなさんな兄さん。そこそこ愛があれば過程なんて関係ねえんだイ」

「変なしゃべり方まで教えやがつて、あいつは完全に悪影響だな……」

「あーどけどけ、僕は今作品のことで悩んでるのだ。お子様と遊んでる暇はない」

「作品のこと、ですか」

「そ。僕が今書いてるのはライトミステリなんかだけね、トリックがどうしても。まったく、読者はいいよなー、何も考えずに読んで、あとからこのトリックはいまいちだの実行不可能だと難癖つくれ

ばいいんだからさ。作り手の苦労を少しは慮れつづーの

「もつちーさん。私はそれは違つと思います」

「ん? 何が?」

僕は気のない返事を返したが、意外に真剣なハルのまなざしに気が付き、内心ちょっとだけ動搖した。

「筆者が読者に、創作の苦労をわかつてほしいなんて書くべきではないと思います。読者の方は、何も考えずに楽しんでくれればそれでいいのです」

「な、何だよ急に……」

「少なくとも私はそうです」

ハルは自分の手をじっと見た。その手には何と数日でついた漫画用インクやトーンカスの他に、ペンだこ、トーンの切り貼りのときにでもできたであろう切り傷がいくつもできていた。どれだけ仲良くなしていようと、漫画にかけてのリョーノのじりきは半端なものではない。それは僕がよく知っていた。

「私、ここへきてまだまだ日が浅いんですけど、漫画だつてリョーノさんに教えてもらつて、描き始めたのはホントにつこないだすけど……。だけど、思うんです。リョーノのトーンは大変だつただろうなとか、線の引き方が上手いとか下手とか、そういうことを思われたくないな、つて。そうじゃなくて、このキャラはこんな気持ちなんだらうな、とか、うわつこれからどうなるんだろうとか、もつと作品の世界に入つてほしつて言つたか……。夢とか、楽しみとか、そういうものを見せる仕事じゃないですか。作家つて」

「あ、ああ……」

「いつになく必死なまなざしで語るハル。言葉は拙いが、言いたいことははつきりと伝わつてくる。

「そこに、作者の苦労だとか、辛さだとか、そういうのを入れ込ませようとすると、なんだか凄く興冷めな気がするんです。確かに苦労はしてるとは思うんですけど、それを感じさせない、というか、そういうことに頭を回す隙も『えないうような、とつても素敵な世界

を描いて、読者を魅了してあげるのが作家の仕事なんじゃないか…

：「って、そう思つんです」

「なるほど。ワンダフルです、ハルさん」

パチパチパチ、と拍手をしながら、芝居がかつた動作で階段をゆっくりと降りてくるまー君。実際にキザなじぐさである。足をひっかけてやりたい。

「そうですね、作家は夢を『』える仕事。そこに苦労だの辛さだの、たとえほんのかけらだとしても、見せてはいけないのかもしれません」

「だからってなあ、お前……」

「ホラー小説だって、『書いている途中に勝手にお茶碗が割れました』とかなら怖いエピソードになつてハクがつきますけど、『書いている途中ぎつくり腰になりました』だと台無しです。一瞬にギャグ小説になつてしまします」

「まあ言つてることはわかるけどな……」

全國のぎつくり腰に悩む方々にとつては笑い」とはあるまい。「センター・テイナーは底を見せてはいけないのです。いつでも余裕で笑つてないと。じつちの苦労も理解してほしいなんて言つていいのは、よちよち歩きの子どもだけなのです」

「なるほどねえ、厳しいお言葉だなあ」

僕は少しだけ自分が恥ずかしくなる。こんなに若くて何も考へてなさそうに見えるハルでも、きちんとした作家としての気構えがある。多いに見習つべき部分はあるといつことか。

そこまで言つと、ハルはぺろりと舌を出して頭を下げた。

「すいません、これ実は全部母の受け売りなんです。母は出版社で漫画の編集者をやっておりまして

「母？ つてあの、例の腐女子の」

「はい、そうです。母は趣味嗜好に関してはかなりフリー・ダムな人ですが、仕事に関してはとてもシビアです。そんな母が口ぐせのように言つてゐるんです。最近は、特に若い人に軟弱な作家が多いと」

「ははあ、そういうの……」

ハルはもとはとと言えど、母親とケンカをし、衝動的に家出をしたこと、が原因でここに居ついている。今でも遅くなるまであまり家に帰りたがらない。

「……昔から漫画が好きで、編集者である母によく見せていました。母は忙しい人で、なかなか家にはいてくれなくて、そのせいで学校の友達みたいに母の手料理が食べられなかつたり、一緒に旅行に行けなかつたり、寂しいつて思うことも多くて……でも、私が描いた漫画はいつだつてちゃんと見てくれました。私が小さい頃は、どんなに下手くそでも褒めてくれていたんです。だけど成長するにつれ、アドバイスらしきものをしてくれるようになりました。それは良かつたんですが、どんどん指摘が厳しくなつていき、最近は『あなたにはプロになるだけの才能はない』とはつきり言つようになりました」

ハルはぐつと握りこぶしを作る。

「……だから、私は、漫画で母を見返してやりたいんです。ここにナビ荘で、皆さんと一緒に腕を磨いて。母に、ぎやふんと言わせるような漫画を描いてみたいんです」

「そつか。本気でプロになりたいの、あんた

突然、新しい声が割り込んできた。振り返ると、すぐそこにリョーゴが歩み寄つてきていた。今までの話もちやつかり聞いていたらしい。

「あなたのお母さんの指摘、間違つてはいないよ。あんたは確かにあの日以来、あたしの教えた通りにしつかり努力したし、それだけ手にマメも切り傷も作つた」

言われてハルは自分の手をじつと見る。すっかり汚れた、漫画描きの手だ。

「……だけどね、残念ながらあんたに絵の才能はない。あたしが保証してあげる。その上達速度では、プロとしては通用しない」

はつきり言られて、目に見えて落ち込むハル。ずうーんと雁首を

地面に着きそうなほど垂れる。セミプロと書いていいほどの腕を持つリヨーノに言われたのだから、余計に堪えたのだろう。

「ただ、その一方で、あたし、気付いたの」

リヨーノはにっこり笑つて付け加える。

「あんた、原作の才能はすうごくある。お話し作り、とつてもつまいもん。展開のアップダウンとか、間の取り方とか、基本がよくできてる。今まで何冊ぐらい漫画を読んできた?」

「え、……つと、母の仕事の関係で家には少女漫画が千冊近くありましたから……。それと、自分で描くようになつてからは他のジャンルのものも色々……」

それだつ、リヨーノはぱちんと指を鳴らした。

「それだけの漫画読書量があれだけ綺麗なネームを切らせていたのね。いーわ、それじゃハル、あんたあたしと組みなさい!」

「えつ……」

ハルは絶句していた。突然のユニットへのお誘いに呆然とする様子である。しかし、リヨーノは構わず高らかに宣言する。

「ここに奇跡の作家カップル、『ハル リヨーノ』誕生よ! はつは!」

まー君はそんなリヨーノを呆れて見てている。ハルも言葉が出ない様子だつたが、やがてすつと立ち上がり、がつしとばかりにリヨーノの手を掴み、意外なほどのハイテンションでまくしたてた。

「や、やります! 私、リヨーノさんと、『ハル リヨーノ』やらせていただきます! とつてもステキです、そのアイデア! わつと、名前負けないとつてもステキな作品を仕上げて見せます!」

「お、おいおい……」

すつかり舞い上がつてしまつてゐる一人であつた。

かくして、百合百合腐女子漫画家ユニットの(なんつう響きだ)、『ハル リヨーノ』は結成された。そしてその日から、彼女たちは猛烈な創作活動に没頭することになる。

夜中までいやんだのうふんだの実に楽しそうな声が一人の部屋か

ら聞こえてくる。まつたく、一体何をやつてるんだか。

ともかく、最初はあれだけ険悪だった二人が手を取り合つて創作
だなんて、嬉しいやら呆れるやらで、何とも複雑な心境である。

やはり腐女子同士は通じ合うものがあるのかもしれない。

第3話 我が名はシメキリ・クイーン その2

「なるほどー。で、そのお母さんっていうのはどんな人なの？」

「光玄社の薬師寺トモエさんって人らしいよ。社内でも有名なカリスマ編集者、別名『赤鬼』。どんな新人の原稿にも容赦なく赤を入れまくることで怖れられているんだってわ」

僕はのんちゃんの通う声優の専門学校に来ていた。今は休憩時間で、廊下でジュースを飲みながら話しあっている途中である。

ちなみに僕はのんちゃんの学校へはよく来るし、ときにはお昼を一緒に食べる。彼女は気真面目で頑張り屋なので、時間を延長して練習していることが多い。そうした場面をよく目にする。

のんちゃんは、僕が見ている間だけでも、かなり上達したと思う。もつとも、僕が彼女を気に入り過ぎて、ひいきもあるのかもしれないけど。

がらりと目の前の扉が開き、別のクラスの生徒たちがぞろぞろと出てきた。みんな上下のジャージ姿で、びっしょりと汗をかいている。声のトレーニングでは肺活を鍛えるとかで運動をするとは聞いていたが、想像以上にきつそうだ。

「あー、その人なら今ちょうどこの学校に来てるよ。つていうか、わりとちょくちょく来てる」

「え、マジ？ この声優学校に……？ どうこうつながりがあるの？」

「光玄社さんはアニメ化とかドラマ化とかいろいろ企画をやってるから、そのスカウトにね……。ちょうど高校野球の練習場にグラサンをかけたスカウトマンがやってくるかのよう」

「なるほど。それじゃのんちゃんアピールするチャンスじやん」

「も、もちろん精一杯やつてるよ！ だけど、まだ……」

「しゅんとするのんちゃん。声をかけてもらひに至っていない、といふところか。

「大丈夫だよ、これからだよのんちゃんは。きっと芽が出るって

「ほ、ホントかな……？」

「僕はお世辞は言えない」

そのとき、ちょうど先ほどの部屋から誰かが出てくるのが見えた。

のんちゃんはハツとした表情になり、慌てて耳打ちしてくる。

「あ、あの人ガ尊の薬師寺トモエさんだよ！ ちよつと今日も来てたんだ、凄い偶然！」

「あの人ガ……」

コツリ、コツリと靴音を立てながら近づいてくる、中年ながらもきりりと背筋の通った女性。三十代くらいに見える。のんちゃんの言うとおり、スカウトマンらしくサングラスをかけていたため目は見えない。が、口元がどこかハルに似ているような気もする。

彼女はまっすぐ僕に近づいてきた。僕はゴクリと唾を呑みこむ。

「あなたたち、ハルの出入りしている『ワナビ荘』の人よね

「は、はい。その通りです」

先方は、僕たちの顔を知っているらしい。ハルが教えたのか、どこから聞きつけたのか……。いずれにせよ、ひどく緊張させられた瞬間であった。

「うちのハルがお世話になつてるわ。あの子、『迷惑をおかけしていいからしら』

「い、いえいえ、迷惑なんてそんな！ 」しつこい、大したおもてなしもできずに

「もてなしなんてしなくて結構よ。あの子、本当に自分勝手なんだから、自分ひとりの力じゃ何にもできないクセに……。勝手に家を飛び出して、勝手にあなたがたのところに居つっちゃって。まだまだ自分が子どもだってことが自覚できないのね」

トモエさんは不愉快そうに言つ。僕は彼女の言葉に少しだけむつとして、

「お言葉ですが、ハルさんはもつ子どもではないと思います。今だつて、必死に努力して漫画を描いていますし」

「努力ならサルだってできます。世の中、結果を出さないと意味が

ない。結果が出ない限り、私はあの子を認める」とはできませんし、

またそうすべきではないと思つています」

「と、こ'り」とは、逆に言えば結果を出せば認めるところ'り」とです

か」

「それはもううん」

はつきりとトモエさんは頷いた。

「私は別にあの子を認めたくないわけじゃありませんので」

「それじゃ、見ててあげて下さい。あいつを」

僕は言つ。こちらを見据えてくるトモエさんの目を、しつかりと見据え返しながら。

「ハルはいすれきっと結果を出します。その時、しつかり褒めてあげて下さい、認めてあげて下さい。僕からのお願いです」

「言われるまでもありません。……今後もご迷惑をおかけするかも知れませんが、どうかご容赦ください。何かありましたらすぐにご連絡を。無理にでも連れ帰りますので」

そう言つて僕に名刺を手渡すと、相変わらず服の中に定規でも入つてゐるのではないかといつくりにシャキッと伸びた背筋のまま、スタッタと廊下を後にするトモエさんである。

「なんというか、凄い人だね……。ハルちゃんからは想像できないくらい厳しそうな人……」

「だからこそ、反りが合わないってことなんだろうな」

僕は呟いた。帰つたらハルにこのことを話してやるべきか、話さないべきか……。少し考えた末、やめることにした。これはあくまで親子の問題、僕が口を出すべきではないだろう。放つておいて、勝手に彼女たちに解決させればいい問題だらう。僕はそう結論付けた。

しかし、意外な事に当事者自身はせつは思つていなかつたのである。

「も、もつちー先輩、一緒にお母さんのところに来てくれませんか

っ！？」

僕がトモエさんに会つた一週間後のことである。ハルが鬼気迫つた表情で僕にお願いしてきましたのである。

「お母さんのところ？ なに、僕と結婚したいの？ 悪いけど僕にはのんちゅんがいるんだけど」

「さらつとすごいこと言いますね」

まあどうせ本人は聞いてないしな。

「実は、リョーノとの合作漫画が完成したのでお母さんのところに持つて行こうと思つてるんです。編集者としてのお母さんに、見てほしくて。だけど、その、一人じゃ怖くて、腰が引けちゃって……」

「もう完成したの？ はやつ！」

まあ、リョーノのペンの速さは今に始まつたことではないが……。ハルも初心者だといのに、相当な速さでネームを上げたということになる。僕は少なからず焦りを感じた。顔には出さなかつたけれど。

「それならリョーノにお願いすりやいいじゃん。あいつあちこちの編集者と顔見知りだし、そういう場にも慣れてるんじゃねの」

「そ、それはそなんですけど……」

「……ああ」

そういうことか。確かに圧倒的に実力も経験もあるリョーノが一緒だと、母親と一対一で向き合つことにはならないかも知れないな。たとえ黙つていてもらつても、どこかでリョーノに甘える気持ちが出てきてしまう。あくまで、自分の力で母親と決着をつけたい、といつことなのだろう。

「もつちー先輩なら私が困つても助けてくれなさうだし、お母さんに簡単に黙らせられそうなので私一人の力でお母さんに立ち向かうには最適だと思いまして」

「お前もさらつと失礼な事を言つくな」

まあ親子のギスギスした所を見せつけられるなんて、正直迷惑な

話ではあつたが、お願ひされたら断れないもつちーさんである。それに、ここで僕が行かないとそこでどんな会話が交わされたのか皆さんにお伝えすることができない（誰に言つているのかはわからない）。

そんなわけでハルのかように失礼なお願いにも、僕は一つ返事で承諾した。

第3話 我が名はシメキリ・クイーン その3

さて、翌日。

光玄社を訪れた僕たちは面談スペースに通され、お茶などじ馳走になっていた。窓の無い小奇麗な部屋で、壁は絵もポスターもかかっておらず、一面の白。その眩しさが嫌が応にも僕を緊張させた。

「お待たせしました」

十分ほど待たされたのち、部屋にトモエさんが現れた。相変わらず背筋が恐ろしく綺麗に伸びて、凛々しいばかりの表情である。

「お、お母さん」

待ちかねたように身を乗り出して呼びかけるハルを、トモエさんはじりりと睨みつける。

「ここではその呼び方はやめてください。あくまで私たちは、担当編集者と作家という関係です」

ぴしゃりと言い切る。トモエさんは公私をきっちり分けるタイプの人ようだ。ハルは出鼻をくじかれたように、ぐつと次の言葉を呑みこんで、視線を下に向けてしまった。「と、……トモエさん」そう苦しげに呼びながら、がさがさとカバンから原稿を取り出す。

「あなたは『ワナビ荘』の望月さんでしたね。わざわざ」「苦労様です」

「い、いえ」

トモエさんは一応僕にも労いの言葉をかけてくれたが、もうその頃の僕はがちがちに緊張していたのでろくな返事もできなかつた。実に情けない。結局ハルの読みは間違つていなかつたことになる。「」、これ、私と江ノ島リヨー子さんで描いた漫画です。見て下さ

い！」

ハルはトモエさんに向かつて勢いよく原稿を差し出す。ざつと見て四十枚はある。いや、あの短い期間で本当によく描いたものだ。僕は心の中であらためてリヨー子に賞賛を送った。

「拝見します」

そう言つてトモエさんは原稿を受け取ると、さくさくと読み進め始めた。よく「編集者は原稿を読むのが早い」というが、実際にトモエさんはかなりのスピードでページをめくつた。目が実に真剣である。思わずこつちが申し訳なくなるくらいに（何に対してかはわからない。僕は何しに来たのだろう）。

トモエさんが一通り読み終わるまでに五分とかからなかつただろう。とん、とんと原稿をまとめ、トモエさんはふうつと一つ溜め息をついた。

僕たちはさながら裁判長の判決を待つ被告人の心境だった（と、ハルの気持ちも代弁してみた）。もつとも、僕の作品ではないので別に何を言われたところで僕が気にする必要はないわけで、そう考えると今この瞬間も僕はどんな顔をしていいべきなのかさっぱりわからなくなり、眉をひそめているようなゆつたりとした笑みを浮かべているような、それでいて頬のピクピク引きつっているという何とも間の抜けた表情をしていたことだろうと思つ。本当に僕は何しに来たのだろう。死にたくなつてきた。

「絵は、大変綺麗ですね」

開口一番。ハルはうつ、と声にならないうめき声を出す。「絵は」。当然、絵を描いたのはリヨーコであり、ハルがメインで担当した部分ではない。

「さて、ストーリー、コマ割り、セリフ等に関してですが、もう少し漫画について勉強してから描かれた方がいいのではないかと思います」

「は、はい」

淡々と告げるトモエさんと、かちかちになつてひたすらに頷くハル。とても親の子の会話とは思えなかつた。

「まず一ページ目から説明セリフが多すぎますね。これでは読者はいきなりこの作品を飛ばしてしまいます。序盤にはもう少しインパクトのある画を。それと、短編にしてはキャラクターが多すぎます。

誰が重要キャラで誰がそうでないか見分けがつかない。それなりに重要なキャラの名前が十ページを超えてから明かされるのも不親切な設計です

「す、すみません」

「謝る必要はありません。あと、構成ももう少し練る必要があります。そもそも存在意義自体に疑問を感じるシーンがいくつか。恋愛ものなら、たとえば『この料理のシーン、ここを削って心理描写にもう少しページを割くべきでは？ 結末も意外性がほとんどないため、この物語が何を伝えたかったのか、テーマがぼやけてしまっています。ただのそれっぽい『物語』では、読者はついて来ません』

「は、はい。すみません」

「謝らなくていいと言っています」

その後も厳しい批評が続いた。部分的に褒めてくれることもあるが、ほんの申し訳程度であり、総合して見ると「まだまだ全然ダメ」と言われていることは僕でもはつきり理解できた。

「以上です。今回の原稿は一応弊社の漫画賞へ応募することは可能ですが、私個人としてはお薦めしません。いかがいたしますか？」

「い、いい、です……」

面会が終わる頃にはハルは涙目になっていた。まあ、こういう言い方をされるとさすがに「出します」とは言えないだらう。それでも、少しばかり言い方がきつすぎる気もした。

「それでは、次回の作品に期待しております。原稿が上がりましたら、ぜひ弊社まで。光玄社漫画大賞の応募締め切りは今月末日までとなっていますので、よろしければ併せてお考えください」

「あ、ありがとうございました」

かなりへこんでいるであろうハル。僕も合わせて頭を下げるハル。僕も合わせて頭を下げる。田の前のトモエさんが、初めて会つたときより一周りくらいは背が高く見えた。

「トモエさん」

僕は部屋を出たといひで、彼女を背後からそつと呼び止めた。ハ

ルが聞いていないことを確認しながら、小さな声で尋ねてみる。

「不躾な質問で申し訳ないんですけど……、先ほどの対応、あれは自

分の娘だからこそのですか、それとも作家さんにはみんなああ

なんでしょうか。少しばかり言い方がきつすぎた気も……」

「あのくらいできついと感じるならば、あの子もあなたも作家には向いていないでしょうね」

トモエさんはバッサリと切り捨てる。やはりこの人は、手強い。僕は思わずたじろいでしまう。

「……しかし、私も人間です。完全に私情を排す、ということは実質不可能なことは申し上げなくともご理解いただけるかと思います。もちろん、できるだけそう努めているつもりですが」

そこで、トモエさんはようやく笑顔を見せた。

「次はあなたの作品も読んでみたいですね。完成したらぜひ弊社にお寄せ下さい。若い方々の挑戦を、私たちはいつでも受け付けていますよ」

「いやあ、はは、お恥ずかしい……」

もしこち込むにしても、できればこの人以外が担当ならいいなあ、と思う僕であった。

第3話 我が名はシメキリ・クイーン その4

「ああ、それならわかつてたよ」

その夜、ワナビ荘に戻ったハルは（僕の）部屋にこもってしまい、鍵をかけて入れてくれなくなつた。仕方なく僕はリビングでジュークスを飲みながらリヨー・コと今日のことについて話をしていた、そのときのこと。リヨー・コは事もなげに、僕が思わず皿を向くようなセリフを吐いたのである。

「あたしはある子の思つままにネームを切らせた。結果できたのは、勢いはあるけど、まだまだ未熟な作品とも呼べない作品。ハルのお母さんの指摘は鋭くて、さすがプロだと思つけど、でもその半分くらいならあたしがネームを見た段階でも言えたこと

「……そうなのか？」

僕は驚いてソファから立ち上がつた。カフカは驚いてキッキンの方へと逃げていく（「カフカ？ ちょっとあっち行つてなさい、今お料理作つてるんだから……、あっち行けつつてんだろうがあ！」）とロッが切れる声がきこえた）。

「そーね、あたしも伊達に漫畫描きやつてないからねー。多少は見る目を養つてきたつもりよ」

「それなら……、それなら、どうしてちゃんとそれを教えてやらなかつたんだ？ お前が手を加えるだけでも、今よりもっといい作品になつただろうに。コマ割とか、セリフの言い回しとか……」

「あのねえ」

リヨー・コは読んでいたB・L小説をパタンと閉じた。

「あたしはあくまで絵を描くだけ。話を考えるのはあの子の仕事なの。だいたい、そんなことしたら八割方あたしの作品になつちゃうじゃない」

「うーん、そりゃあ、まあ……」

「アドバイスを『えるのは編集の、もつと言えばあの子のお母さん

の仕事。大体、あの子は自分の力でお母さんに挑みたかったんだしよ？ あたしはそれに手を貸すだけの存在よ」

ということは、ある意味で作品の出来を度外視して、ハルの戦いに協力してくれたということか。あれだけの原稿を描いてまで、ハルを作家として育てるために、あえて不完全なままトモエさんにぶつけさせた。

「優しいんだな、リョー」

「べ、別にあの子のためを思つてやつたんじゃないんだからねー。勘違いしないでよねー」

なげやりなツンデレである。

しかし、その結果ずいぶんとへこませられたハルが今後どうなつていくかは気になるところである。今も（僕の）部屋にこもつたままだし……。もしこのまま再起することなく、落ち込んで今後作品が描けないとなれば、せっかくのリョーの気遣いも無駄に終わるというものだ。

「それならハルがそれまでの子だつたつてことねー。これしきで作品を作れなくなるようなら、ワナビ失格、つてところ。あたしもいい絵の練習になつた、くらいに思つて諦めるよ」

私、ワナビになりたいんです、か。アイワナビーワナビー。このワナビ荘に初めてやつってきた日にハルが言つていたセリフである。確かに、「ワナビになる」ということ自体が実はそれなりに変なようだ。何しろ、何があらうと書き続け、あるいは書き続けないといけない。どれだけへこもつと、どれだけ辛かろうと、どれだけ没にされようと、だ。

それから数日が経過すると、ハルはさすがに表面上は元気を取り戻し、以前のように僕やのんちゃんとはしゃぐようになつて行った。が、あまりペンを執つている場面は見かけなくなつた。リョーもあえて何も言わないようだつた。そんな風に、なんとなくあの日のことはうやむやになり、没になつた原稿も、触れていいのか悪いのかよくわからない位置に、まるで賞味期限切れのお菓子のようにぼ

つねんと置かれたまま、いくつか平和な月日が過ぎていった。
そしてそんな折、八月も最後の週に差し掛かつたことである。思わぬニュースがワナビ荘を席巻した。

まー君とみちるさん。
が、ホラー小説賞をとった。

「」「」「」
「」「」「」

「マジマジ、もう発表になつてたのー? やつたじやん!」

一発表はまだです。ついさっき編集社から電話
けど、賞金十万円と、公式に出版、って……」「

「や、やったね、まー君……」

まー君の手はぶるぶると震えており、みぢるさんはまろぼろと涙を流していた。僕は頭の中がかあつと熱くなるような、いつものダインシングの景色がぐにゃぐにゃと揺れるよつた、そんな錯覚を覚えていた。

「あらー、凄いじゃない、やつたわね！　おめでとう、あなたたち！　今夜は祝杯ね！」

「お一人とも、尊敬しちゃいますー。」そんなにち
ら笑ふなんぞ。本当に始めでどうぞ、二番目二

「うーん、嫉妬で今夜はメシマズ！ でも本当！」

「本当に凄いです。おめでとうござます、おーす、みかねねこ」

みちるさんは、よほど嬉しかったのだろう、床に蹲つたままずつと嗚咽を漏らしていた。すごいすごい、おめでとうとハル、D、リョーロ、のんちゃんの四人は一人をはやし立てた。みんなが笑顔で、心から一人を祝福していた。

僕だけが、何も言えずにその光景をただぼんやりと見ていた。何か言おうとしても、言葉が出て来なかつた。

……僕は、みちるさんとまー君が寝る間も惜しんで作品を書いている間、書いている書いているとは言いながら、本当にちょびつ

とずつしか作品を書き進めていなかつた。今日は気が進まないとか、調子が悪いとか、忙しいとか、自分にいろいろと言い訳をして、まともに自分の作品と向き合う時間をとつてこなかつた。

リョー「やハルの頑張りも、リアルタイムで見ていたはずなのに。どこかで僕はそれらを、見てみないふりをしていた。

その結果、これだけの差がついてしまつた。その現実を突如、目の前に突きつけられたのだ。

ショックだつた。

見えないところで（実際はけつこう見えてたけど）必死に努力を重ねていた二人が。何も見えていなかつた自分が。そして今、こうして受賞した一人を、素直に祝福してあげることのできない自分が。そう、僕は、ひょっとしたら、いやおそらく、彼らが落選することを心のどこかで願つていた。

いつまでも自分と同じレベルにいてくれることを、ひそかに願つていた。

そんな僕だつたから、とてもじやないけど心から「おめでとう」なんて言つことはできない。僕はよろよろと震える足でま一君に近づき、一言「よかつたね、お疲れさま」と声をかけ、「ちょっとトイレに行つてくるよ」と何でもない風を装つてこつそりと外へ出た。綺麗な月が出ていた。僕は、住宅街の中伸びる道を、あてもなく歩き出した。最初はゆつくりと、徐々に早足に。車の通る広めの道路へ辿り着く頃には、僕はすでに殆ど駆け足になつていた。ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう……。

何に対しても悪態をついているのかもわからず、そうぶつぶつと繰り返しながら、僕はやがて全速力で走り出す。国道を逸れ、月の照らす堤防へ達したとき、僕は誰を憚ることなく大粒の涙を流した。

「う……、う、うああああ」

僕は草の上にバタンと倒れ込み、上着の袖で涙と鼻水でぐしゃぐしゃになつた顔をぬぐつた。草と涙の混じつた、しょっぱくて、どこか懐かしい味とにおいが鼻の奥から伝わつてきた。

「あああああっ！」

僕は大声をあげた。それは都会の夜空をほんの一瞬震わせたように思えたが、すぐに行き交う車の音と川の流れの音にかき消されてしまった。

……思い切り泣くと、気持ちが良いんだな。

そんな当たり前のことを今さら我が身をもって実感する。しばらく僕はそのままの姿勢で夜空を見上げていた。ぽつかりと、丸い月が浮かんでいた。草の香りと、どこからともなく漂ってくる何か焦げたようなにおい、川と車の音、生ぬるい風、軽い疲労感……。そんな何気ないあれやこれやに包まれて、しばらくぼーっとしていた。

「……何してるんです？」

そのまま三十分も過ぎたころだろうか、遠慮がちに僕に話しかけてくる人影があった。ハルだった。

「お前こそ、なにやつてんの、こんなとこで」

「……別に、です」

ハルは堤防をそろそろと降りてきて、僕の横で腰をおろした。残暑のぬるい空気の中、芝生は微かに湿つており、座ると生地がぐつしょり濡れちまうぞ、と注意しようかと思つたが、ハルはそんなこと一向に構わない様子だった。

「あーあ、もう」

ハルは空を見上げて溜め息をつきながら、けだるそうな声を上げた。都会の空にはなかなか星は見えない。一番星も流れ星も、人間からその身を隠しているから、願い事をどうに向かってかけたらいかわからない。それが東京の空だ。

「逃げてきちゃいました。なんだか涙が出そうになつて、慌ててそれを隠そうとして……、大急ぎでみんなの輪を離れました。結局とつても目立つちゃいましたね。こうこうときこづまくまかせないのが私です」

「涙……」

「ダメですねえ。私、悔しい。あの一人が、うらめしいです

「…………」

僕は少なからずその言葉には驚いた。あれだけ喜んでいたように見えたハルが、そんな風を感じていたとは。

「物心ついたときから漫画家になつてやるんだー、つて意気込みながら、彼らみたいにちゃんとした結果も出せずにここまで来ちゃつて……。そんな自分が、悔しい。嫉妬してるのは自分が、なんだかイヤです。私、素直にあの一人の受賞を祝つてあげられなくて……本当にイヤな奴です……」

膝を丸めて顔を隠すハル。彼女の心情吐露はまともりがなく、思いついたことをそのまま口に出している感じだつたが、それゆえよく彼女が胸に抱いているもやもやが理解できた。なぜならそれは、僕も今この瞬間に、彼女と同時に抱えているものだったからだ。

僕は自分と同じものを抱えているハルに、どう声をかけていいかわからず、……気付くと口をついて出るに任せていた。それは僕自身も思つてもみないセリフであった。

「……いいじゃん、嫉妬しても」

「え？」

「受賞者に嫉妬、けつこうじやねえか。羨ましいっていう想いはそのままモチベーションにつながるもんだる。大いに嫉妬しろよ。それに……、お前には協力者がいるじゃねえか。ハル リョー ハはどうなつたんだ？」

「あ……」

思い出したようにハルは顔を赤くした。そう、彼女は作家としてリョー ハと組むと約束したのだ。もはやハルの作品は、ハル一人のものではないはずだ。そのことを今までつかり忘れていたことを恥じるようすに、ハルはぐっと顔を上げた。

「八月の漫画賞！」

「は？」

僕は一瞬なんのことかわからなかつた。

漫画賞……、ああ、そういえば。僕は光玄社での記憶を手繕る。

トモエさんが言っていた、八月締め切りの漫画賞……。ちなみに今は八月下旬。締め切りまで一週間もない。

「応募します！」

「……え？」

「今から描いて、応募します！」

「おいおい、ちょっと待て、そりゃあいくらなんでも

「よつしゃー！」

背後から元気のいい声が響いた。僕たちは同時に振り向く。そこには、腕組みをして仁王立ちになり僕たちを見下ろすリョーの姿があつた。チエシャ猫のごとく満面の笑みを浮かべている。

「よーやくやる気になつたね、ハル。その言葉を待つてたよ。あたしの方はスタンバイOKだよ、いつでもどんと来い！ 残り約一週間、本気のあたしたちを見せてやるうぜー！」

「は、はい！ よろしくお願ひします！」

リョーに向かつて深々とお辞儀をするハル。その田にまもづ迷いはないように思われた。ハルはその場でおもむろに携帯電話を取り出すと、短縮ダイヤルで誰かにかけた。川から少し強い風が吹き、ハルとリョーの髪を揺らした。

「わ、私、薬師寺ハルです。光玄社の薬師寺トモエさんでしょか。あ、あの、わ、私……」

ほんの少しだけ言いよどんだのち、ハルは吹つ切れたようだ。

「私、八月の漫画賞に応募します！ これまでにトモエさんが見たこともない傑作を引っさげて行くから、今から首を洗つて待つてろッ！」

僕とリョーは思わず目を丸くした。受話器の向こうからは沈黙が流れてくる。やわら、と一陣の風が通り過ぎると、遠く車の行き交う音以外は沈黙が夜の堤防を支配した。じぐり、とハルが唾を呑む音が聞こえた気がした。

「あつはつはつはつはつはー！」

沈黙を破ったのは、受話器の向こうのトモエさんだつた。普段の

様子からは想像もできないような明るい笑い声が、少し距離を置いた僕たちにも聞こえた。僕は思わずリヨーノと顔を見合わせる。

「いいね、そういうのを待つてた！」「ないだのあんたはちょっと元気がなさすぎて張り合いかなかつたところなんだ。いいよ、遠慮なくどんどん来い！　来るものは拒まず、去るものは追わず。あんたの力作、期待してるよ」

それはすでに親子の会話だった。ああ、と僕は思った。ようやく、この薬師寺親子の本当の姿を見た気がした。一人は作家と編集者でもあり、同じ趣味を持つ友人同士でもあり、また時にはいがみ合い、時には寄り添い合つ、どこにでもいる、普通の親子だったのだ。

「それじゃあね。今から早速原稿やらないといけないから、電話なんかしてる暇ないんだ。光玄社で会いましょう！」

「ああ、待つてるわ。しつかりやりなさい。そつそつ、当然ながら締め切りは厳守ね。三十一日の夜十二時までに届かなかつたらアウェトだから。それじゃ、あたしも仕事が忙しいの。長電話なんかしてる暇ないのよ。またね」

そんな風にして電話は切れた。僕とリヨーノは呆気にとられてハルを見つめていたが、僕らの戸惑いなどお構いなしに、ハルはくるりと振り返るといきなり僕の手を取つてこう言つのだった。

「もつちー先輩、もう一回手伝つてください！　一週間で完成させるにはアシスタントが必要です！　一緒に頑張りましょう！」

「やっぱり僕も巻き込むんかい！」

僕の絶叫を最後に、ようやくその夜の堤防に静寂は戻つたという。その日から早速、僕たちにとつて本当に熱い「夏」が始まったことは言うまでもない。

せつかく湧きあがってきた僕のやる気がほぼ全てハルの漫画の製作に費やされたことも言つまでもなかつた。

第3話 我が名はシメキリ・クイーン その6

腐女子だつていいじゃない！

B.L好きでもいいじゃない！

おかげで青春取り逃がし 恋愛も知らず黙々ペンを動かす

イエイイエーイ！ 腐女子バンザイ！

ワナビだつていいじゃない！

叩かれたつていいじゃない！

だつて今私輝いてるし インクヒトーンにまみれても

好きな事を全力でやるつてステキ！

イエイイエーイ！ ワナビバンザイ！

「あんたたち、何時までやつとるつもりじゃクラア！ „近所迷惑だから大声で歌うんじゃねえつつてんだろが！ おん出すぞ腐れワナビども！」

D.J.が鬼の形相で入つてくるまで気付かずに大声で歌いながら作業をしていた僕、リヨーノ、ハルの三人である。もちろん作業場は僕の部屋。おそろしいほどの急ピッチでの原稿だつたので、全員ありえないテンションになつていたのだ。

インクが僕にこぼれたりペン先が僕に突き刺さつたり、むしゃくしゃした二人が僕をとりあえず引っぱいたりと（これはさすがに理不尽だと思った）ハプニングも続出、部屋には一生かかつても抜けないくらいにインクの匂いが染み付いてしまつた。

さらに、前回とは打つて変わつてリヨーノのハルに対する態度が厳しくなつた。

「こんな演出で読者がびっくりすると思つてんのあんたは！ 読者なめんな！ 十年古いのよあんたの頭の中は…」

「短編でキャラを崩壊させない！ キャラ崩壊は長編でファンがつ

いてこそおいしい企画であつて、読みきりでやられても読者がとまどうだけ！ もつと読み手を意識しな！」

「構図が単純すぎて四コマ漫画みたいになつてる！ いいえ、今日び四コマでももつと挑戦的な構図を使ってくるわ、新人が安定目指してどうするの！ 攻めよ、攻めあるのみ！ どああーつ！」

途中からよくわからない精神論になつていたが、僕は女性一人が怖ろしい勢いで上げてくる原稿にベタを塗つたりトーンを貼るだけで精一杯だつた。漫画を描くというのはおそらく精神が削られる作業であつた。漫画家はみんなこんなことを毎日やつているのか、と思うと気が遠くなりそうだつた。僕なら絶対途中で死んでるぞ。そうして僕らが命を削つて原稿を上げている間にも、日は昇り、沈み、昇り、沈み……、アレから何日が経過したかよくわからない。もはや時間の感覚も日にちの感覚も、腹がいっぱいなのか減つてゐるのか、眠いのか眠くないのかもよくわからない（こうして文字にすると非常にやばいことがわかる）状態に僕はなつていた。はつ、と僕が気付いたのは何日目かの夜のこと、氣を失う前は確かに窓から光が差していたから、どれくらい寝たのか 、朦朧とした頭で僕が携帯電話の日時表示を見たとき、思わず声にならない悲鳴をあげてしまつた。

「ひょええええーつ！ も、もう八月三十日の午後八時であります隊長！ 明日には原稿を提出しないといけません！ しかしまだ十枚くらい原稿が上がつてきてませんよ！ ほら、ハル隊員も白目向いて泡吹いてるし！ こんなのとでもじやないけど間に合いかねます、お先に離脱しますどうかご無事で」

「慌てるな望月隊員！ 状況は切迫してはいるが、絶望ではない！ 途中で舟を降りることは許さぬぞ！」

そのときの僕たちはワナビ号に乗船した宇宙警備隊という設定だつたので（つまりそういうテンションだったのである）このような口調だが、実際締め切り前日に白紙の原稿があるという状況がどうくらいまづいのかは、原稿やつた人ならわかつていただけると思う。

つまり、そのくらいヤバいのだ！

「嫌だ嫌だ死にたくない！ もうこんな生活やめてやるー故郷に帰ります！ 真夏の夜に腐女子一人と狭い部屋の中で汗を流したのも今は良き思い出、あんなやんちゃしてたころもあつたなあつて会社帰りにしみじみと思い出すそんな普通の生活に帰つてやるんだい！

さらばつ隊長あなたのことは忘れません！」

「ふざけるな、途中下車は許されないと言つておろうが！ 待てつ、おいら窓から逃げようとするな、ココは一階だ！」

「構いません！ こんな生活が続くんなら死んだ方がマシだアつ。うわああん、死ぬ前に女の子のおっぱい触つてみたかつたよオ」

「ええい、かくなる上は死なばもろともだあッ、一緒に飛び降りるぞ望月隊員！ 私だつて死にたくなる時はあるんだ、うわああん、死ぬ前にイケメンの彼氏とイチャイチャしてみたかつたよお！ ふえええ～ん」

「うわあああ～～～ん！」

感極まって大の大人二人が月に向かつて絶叫、号泣の図である。つまりこのくらいヤバいのだ！

「わ、私だつて死ぬ前にお母さんに一泡吹かせてみたかつたんですけど！ うわあーん、締め切りなんて死ねばいいのに！ 締め切りなんて死ねばいいのに！ ひいいいいん」

いつの間にか気絶していたはずのハルも参加していった。こうなるともう手をつけられない、三人揃つて夜の住宅街に向かつて大合唱である。

「てめえら何度言つたらわかるんじゃボケエ！ 一度とお天道様見れないところにぶち込むぞ若造共！」

DJが部屋に乱入してさらにつるわくなる。明日から「近所さまには顔向けてきないかもしれない。

と……、そこで僕はようやく気付いた。部屋の中にはDJだけではなく、のんちゃん、まー君、みちるさんまでもが来ていた。全員、ペンやカッター、トーンなど思い思いの画材を手に持つていて。

「あたしらが手伝つてやるからもう騒ぐんぢやない！ ほら、ビニ
やればいいの！？ さつさと原稿出しなさいハルちゃん」

「僕たちも拙い腕だけどアシストさせていただきますよ、ハルさん。
あなたの戦い、最後まで見守らせていただきます」

「まったく、仲間なのに水臭いです！ みんなで最初からやつてれ
ばもつと早く終わつたかもしねないのに。もおつ」

「み、みなさん……」

疲労がピークに達していたせいもあるだろう、ハルは感極まつて
ボロボロと泣き出してしまつた。しかし、そこにすかさずリロー
ガ、

「かあつ！」

氣合を入れながらバシン、とハルの背中を叩く。おえつ、とハル
がえづいた。ゴホゴホと咳をする。鼻水と涙で顔はぐしゃぐしゃだ。
「泣いてる場合ぢやないでしょー。いい？ ワナビの涙つてもんは、
原稿が完成してお母さんの元へ届けて、さらにそれが認められて賞
を受賞して連載が決定して、そのくらいまでとつておきなさい
！ 今は一刻も泣いてる暇なんてないの。前進あるのみ！ さあ、
みんなが手伝つてくれるんだからその分早くペン入れを終わらせな
いと！ ここから完成までノンストップだよ！」

かくして、リビングで全員が黙々と原稿に向かうこととあいなつ
て、ワナビ荘の眠らない夜は更けてゆくのである。その日のワナビ
荘は爆発的なやかましさの後、今度は気持ち悪いほど静かになり、
ただひたすら複数のカリカリというペン入れの音だけが夜の道に響
き渡つていたという。のちのちまで語られるワナビ荘近辺の伝説で
ある。外まで響くペンの音なんて、信じていただけるだろうか。

「妖怪Gペン女」なんてのもいていいかもしねない。「一枚、二
枚……原稿が足りない」と言つて締め切りが過ぎたとも知らずに
原稿を描き続ける妖怪である。近所を通る人がいたらアシスタント
として引きずり込み、ベタ塗りの永久地獄へといざなうことであろ
う。あなたも、カリカリ、カリカリというペンの音が誰もいない夜

道に響き渡っていた、いわば心である。

第3話 我が名はシメキリ・クイーン セの7

で。

直前の段落で描写了と全く同じ光景が僕の目の前に広がっているわけだが。

全員がワナビ荘のリビングで、黙々と、一言もしゃべらずに原稿に向かつて作業をしている。トーンを貼つている者もいればベタを塗つている者もいる。全員、席の移動すらしていない。トイレと水分補給のときに少しだけ席を外す程度で、あとはひたすら作業に没頭している。外は暗く、どれくらい時間が経過したのか傍目にはよくわからないであろう。（変わらぬのはソファで寝そべっているカフカくら）である。お前も手伝え。）

だが！

実は、本当のことを語つと、実際のところが、なんと、あれから一度日が昇り、沈んだのである…

信じられるだらうか！

つまり今は八月三十一日の夜であり 締め切りの夜なのである。もう郵便局も閉まっている。本当にこれ、間に合うの？ とみんなが心中では思いつつも、口に出せず、作業を行つてゐるところが実のところであった。

どうなるんだ？

タイムアップになつたら、結局ハルは「間に合いませんでした」で済ませられるのか？

そんな言葉が 、あれほどどの啖呵を切つたハルに言えるだらうか。

それで本当に乗り越えられるのか？ あの、トモエさんを。

否。

「終わったあああああ…」

リヨー「の叫びである。つこに全てのページのペン入れ、および

ベタ塗りが終了したのだ。

「DＪ、そつちはどう！？」

「あと数分でトーン終了よ。のんちゃんは？」

「ばつちりだおー…背景完璧！　ただ細かい修正に三十分は欲しいトロロ」

「ありがとう。まー君は車出す準備しといて」

「ラジャーです！」

「お、おいおい。車つて、まさか……」

「そのまさかよ。光玄社まで直接乗り込む！　ハル、最後の一枚はあんたが仕上げなさい。お母さんに見せて恥ずかしくない出来にね！　一番大切なシーンなんだから！」

「もちろんです！　任せて下さい！」

さながら統率の取れた軍隊のように意即妙な受け答えであった。間違いなく、ワナビ荘の全員の心が一つになっていた瞬間だとされるだろう。僕は手を動かしながらも、よくわからない感動に包まれていた。

そして、予定よりも大幅に遅れて、八月三十一日、午後十一時。

ようやくその瞬間は訪れる。

「でえーきたあああーーーー！」

ハルが高々と原稿をかざす。パチパチパチ、とまばらな拍手。のんちゃんどみちるさんはすでにぐつたりしていた。

「よし、乗りこめ！」

ハルはできたばかりの原稿を胸に抱えると、まー君のゴーストタクシーの助手席に乗つた。運転席ではすでにまー君が発進準備体勢である。

「よつしゃ、行つて来なさい！　リヨーコ、もつちー、まー君、そしてハル。無事を祈つてるわ！」

DＪが僕のお尻を引っ張たく。くそつ、後で見てろよ。僕はDＪをぎりりと一睨みすると、リヨーコと共にゴーストタクシーに乗りこむ。その瞬間にまー君は急発進。夜の街を、ひときわ目立つゴー

ストタクシーが疾走する。

「スピード出し過ぎて捕まんないでよお、まー君」「気をつけますが保証はできません。それよりしっかりつかまっていてください！」

ギュオオオ、と普段は耳にしないような怖ろしい音を上げてカーブを切るゴーストタクシー。首都高へと入り、ネオン煌めく繁華街、そして青白いオフィス街へと進んでゆく。ワナビ荘から光玄社までは、普通車で移動しても、一時間で到着するかどうかは怪しい距離であった。

「……ああっ、アレ見て、もっちー！」

リョー「ゴが何かに気付いてフロントガラスの向こうへと指をさす。なんということだ！ 僕は首都高の曲がった先の道、目の前に広がる光景に思わず頭を抱えた。渋滞である。それも、かなり大規模な。

「まずい、これじゃあ間に合わない……」

あつという間に渋滞に巻き込まれ、数メートルも動けなくなるゴーストタクシー。締め切りの夜十一時まで、すでに三十分を切っていた。

「……もっちーさん」

顔面蒼白、と言つてもいいほど青白い顔をしたハルがこちらを振り向いた。ガタガタと震えている。ここまで、ここまで来て、もう間に合わないという現実を目の前に突きつけられたのだ。震えもしょう。

どうするか。事情を話せば、トモヒさんもわかつてくれるか。この時間まで精一杯頑張つたんだと。誠意をもつて謝れば、ほんの少し遅れても許してくれるんじやないか。僕たちはここまでよくやつた、努力だけでも認めてもらえば、それでいいじやないか。……そんな考えが僕の頭をよぎった。

だが、しかし、僕は。

「……諦めんのはまだ早い！」

バターン！

僕はゴーストタクシーの扉を開く。渋滞の高速道路のど真ん中である。途端に、周りの車両から抗議のクラクションが一斉に鳴らされるが、もはや気にしている暇も惜しい。僕はハルの座る助手席の扉を開き、手を伸ばす。

「ハル、降りろ！ 走るぞ！」

「は……、はい！」

一瞬躊躇したものの、心を決めて僕の手を掴んだ。じんわりと汗をかいていた。僕はその手を離すまいと懸命に握りしめながら、車体の間をぬつて走り始めた。

「ち、ちょっと君たち！ なにやつてんの！ 危ない、止まりなさい！」

背後から静止の声がかかるが、僕たちは止まれない。締め切りは絶対だ。

これは、漫画の締め切りであると同時に、ハルとトモエさんの戦いの締め切り、なのだ。時間内に届けてはじめて、ハルはトモエさんと戦う資格を得ることができるのだ。ここで間に合わなければ、ハルは負けだ。誰がなんと言おうと負けなのだ。

「負けさせない……、負けにはしないぞ、ハル！」

そして、僕たちは走った。

夜の街を。光玄社のある方向へ向かつて、一目散に。何度も呼び止められたが、振り返らなかつた。僕たちは、疲れた体で、もう何日も寝不足のふらふらの頭で、無我夢中で、締め切りへ向かつて、走つた、走つた、走つた。

そして、もうすっかり息をするのも忘れたころ、僕たちは辿り着いた。

光玄社のオフィスビル。まだ半分くらいのフロアからは煌々と明かりが漏れ出ていた。エントランスにもちらほらと人影が見える。

そして、一人で玄関前に立つて外を眺めているスーツ姿の一人の女性がいた。しきりに腕時計を気にしていた。僕は彼女の姿を認め

るなり、最後の力を振り絞つてハルをぐいっと引っぱり、彼女の前にどんと押し出した。完全に息が切れて伸びていたハルは、それでも落とさずに必死に持ち運んでいた原稿を両手で彼女に差し出すと、「じゃ、じゃまあみやがれ……」と言い残してその場にバタンと倒れた。

……渡つた。

彼女の手に、原稿が。

ついに、渡つたのだ。

僕は思い出したように腕時計を見る。長い針はちょうど数字のゼロを指した状態だった。僕たちは間に合つたのか、それとも……。「お疲れ様、ハル リヨー」さん。光玄社漫画賞の応募原稿、確かに受け取りました。応募作品につきましては、弊社にて厳正なる審査を行わせていただきます」

彼女のはつきりと通る声。その言葉を聞いて、ようやく僕も足の力が抜けた。ようやくとその場にくずおれる。よかつた、間に合つたんだ……。

そう思つた途端、怒涛のように眠気と疲れと体の痛みが押し寄せ、僕は泡を吹いて気を失つたのであつた。

「よくやつたね、ハル。見直したよ」

そんな声が聞こえた気がしたのは、夢だったのか、はたまた現実か。

今となつては確かめるすべはない。

その後のことを少しだけ書いておこうと思つ。

僕はとりあえずよく寝た。ハルもよく寝た。

あの後、実に迷惑な事にエントランスで眠りこけてしまつた僕たちを、後から追いついたまー君とリョーゴが引き取つてくれた（らしい）。そして僕たちはワナビ荘で丸一日眠りこけた。全員が全員疲れていたから、起こしてくれるものは誰もいなかつた。その日一日、珍しくワナビ荘はずつと静かだつたことになる。どるものもどりあえず、僕たちはリビングで、自室で、ソファの上で、思い思いの場所でつかの間の休息をとつた。

そして僕が目を覚ましたとき、すでに世界は一変していた　　というわけもなく、またいつも通りの日常が帰つてきた。大学へ行き、夜は当番がご飯を作り、みんなでワイワイ食べて、夜は眠りにつく。皆、各自自分の作品を描いたり書いたりしながら、それぞれの夢を追いかける。そんないつものワナビ荘が、帰つてきたのだ。

ハルはというと、あの後一度だけ光玄社へ行つた。今度は一人である。おそらくトモエさんと、作品について、今度こそ一対一の決戦を行つたのだろう。もつとも、その内容に関してはいちいち書き記すのも無粹だし、そもそも僕は行つていないのでから彼女たちが一体どんな言葉を交わしたのかも知らない。ただ、その日光玄社から帰つてきたハルは、とてもすつきりした、いい顔をしていたことは確かだ。

「母親つてさー、特に恨みとか憎しみの原因があるわけじゃないんだけど、ケリをつけるつていうかー、しつかりどこかで勝負しないといけないときつてあるよね」

ある日のこと、いつかのようリビングで一人でくつろいでいるときには、リョーゴがぼそりと言つた。

「そういうもん？　エディップスコンプレックスか何かに近いんじゃ

ないのかね。まあ、僕も親に意味もなく反抗したことの一度や二度はあるけど……。リョーノにも親との確執とかあるのかね」

「あたしも『漫画家になる』って言ったときはねー、親に大反対されたもんよ。まあ、気持ちはわかるつづーか、あたしが親でも不安だけどね。子どもがそう言い出したら。ま、見返すチャンスを『えられてるだけありがたって言えるけどね』

テレビはさつきからずつと、日曜の夕方に定番のアニメを流している。ずっと変わらず、多くの人々に愛され、親から子へと受け継がれてゆく漫画。時代の流行に流されず、自分のスタイルを確立した作品。

「なんて言われたか気にならないの？ あの作品。ハルとリョーノの合作なわけだから、リョーノの漫画家生命にも関わってくるんじゃない」

「ん……。そりゃあ、まあ」

リョーノはコーヒーを一口クリと飲み干し、ぼうっと溜め息をつくと、……バンッ！ と机を勢いよく叩いた。

「気にならないわけないでしょおお！ 今までせんざん応募してきて、大量に没を食らったあたしだよ！ 特に今回の作品にかけた情熱はすごいの！ もー、気になつて気になつて夜も眠れないッ！」

「な、なら一緒にリョーノもトモエさんのところへ行けばよかつたんじゃ……」

「それはできないっ！ そこはハルのために譲らないといけない一線！ なにとぞカンニンフ！」

顔を隠して悶えるリョーノである。……まったく、大したセンセイがいたものである。だが、まあ、彼女のハルに対する優しさには頭が下がる思いである。一人のためにも、今回の作品が、いい結果になればいいと思った。

不思議な感覚であった。まー君たちが受賞したときはあれほど嫉妬し、身を焦がすような悔しさに包まれたといつに、今はまー君たちの受賞も素直に祝福できるし、ハルとリョーノにも結果を残し

てほしいと心から思つてゐる。これが、本当に頑張つた者の心境なのか、と僕は一人ごちたりした。

「リョー」さん、もつちー先輩！ アイス買つてきました。一緒に食べましょー」

窓からひょいと顔を出したのは相変わらず元気なハルである。両手にガリガリ君を携えていた。外ではそろそろ盛りを終える蝉が、有終の美と言わんばかりに力いっぱい鳴いてゐる。もう夏が終わる、と僕は感じた。

部屋にひょこっと入つてくるハル。彼女は今でもリョーと仲良く漫画を描いてゐる。さすがにあの夜のような悪夢が繰り返されることはあれ以来ないが、今回の原稿がダメだった時に備え、早くも次の作品の製作に取り掛かつてゐるようだ。まったく、つくづく大したものである。いや、ワナビは普通こうあるべきなのか。

やっぱり、ワナビってのは大変な生き物である。僕も見習わねばならない。アイスをガリガリかじりつつ、リョーとハルがアイスを使ってポッキーゲームのようなことをしてゐるのを横目で見ながら僕は思つた。

二人の作品が光玄社漫画賞の特別賞を受賞したという知らせを聞くのは、それから一ヶ月後のことになる。

第4話 うらぶれ案山子は月夜に吠える その1

のんちゃんといつ人物について紹介しよう。

本名、北原乃梨恵。十八歳。四月二十五日生まれ。血液型A型。声優志望。声優専門学校に在籍一年目。出演歴なし。

住所・都内某所、ワナビ荘201号室。

アルバイト、コンビニ店員。時給八五〇円。転職を考え中。

特徴、アニメ声、おかっぱ頭、メガネ。

好きなもの、アニメ、ハリウッド映画、ゲーム（特にファンタジーアクション）、落語、音楽鑑賞。

苦手なもの、いじめ、集団行動、噂話、その他自分を不安にするものすべて。

自分を脅かす存在、すべて。

さて、今回の話についてはあえてのんちゃんの視点を交えて描かせてもらいつとしよう。実際に物語の観測者はこれまで通り「僕」と望月であるし、そうである以上彼女の心情については想像や後から聞いて辻褄を合わせた部分が多くあるため、完全に正確とは言えない。だが、今回に限っては完全に彼女が主役であるし、彼女の視点で語ることでしか出ない臨場感というものもある。こうした理由から、僕は強いてこの物語の一登場人物としての立ち位置を守りつつ、進行を勤めさせていただこうと思う。

そもそも読者諸兄も僕一人の語り口に飽きてしまわないかと心配であった頃合いであるし、そういう意味でもちよつと良いタイミングである。

案山子、と書いて何と読むかご存じだらうか。

そう、「かかし」である。

そもそもかかしという言葉は「嗅がし」から来ているのだという。

その昔、作物を狙う鳥や獸を追い払うために、髪の毛や魚を焦がして串に刺して畠に立て、その悪臭を利用したのだという。

私は、この案山子に似ている、と自負している。

もちろん、私から悪臭がするというわけではない（と思う）。お風呂には毎日欠かさず入るし、人と会う前にはエチケットスプレーは欠かさない。そういうところには氣を使う北原乃梨恵である。そうではなくて、人を寄せつけない、追い払ってしまう、そうしたところに私と案山子の共通点がある。

言うなれば、存在自体が悪臭、なのである。

加えて、人形のようなもの、という点も一致している。どうも私は人形程度にしか認識されていない、一個人として見られていない、そう気付いたのは中学校に入学して間もない頃だった。

表立つていじめられたわけではない。たとえば校舎の裏に呼び出されて殴る蹴るの暴行を受けただとか、昼休みごとにパシリをさせられたとか、そういう目に見える何かをされたという事実はない。

ただ。

なんとなくみんなから無視されて、なんとなく周りに人を寄せつけず、なんとなく孤立したままの人生を過ごす。それが私だった。

小学生くらいの頃は友だちもいたのだが、中学、高校と、自分も周りも精神年齢がそれなりに上がつてくるにつれ、私がそういうタイプの、言うなれば一人になりやすい人間であるということはよりはつきりとわかつてきた。そこでそうした自分のあり方に不満を抱き、努力して友だちを作るようならばまだ良かつたというものだが、残念ながら私にはその気力もモチベーションもなかつた。

苦手意識を克服し、身を削る努力をしてまで友だちを作ることに、魅力を見出せなかつたのである。

そしてそうした状態は、私が専門学校にいる今も全く変わらない。学内には顔見知りはそれなりの数いるし、会話をしたり、一緒に訓

練をしているときなどに特別な扱いを受けていたわけではない。ただ、彼らと友達と呼べる距離にいるかというと、否定せざるを得ないのである。

そんな風にして私は一年を過ごした。それで別段困ることもなかつたし、気にすることもなかつた。こんな風にして、誰とも深くかかわらずに、自分は一生過ごしてゆくんだろう。心のどこかでそう思つていた。

では、どうして私は声優になろうと思ったのか　　これは、笑われてしまつかもしれないが、かなり単純な理由である。

「アイルビーバック」と最後に言う、あの映画　　あの映画の主人公に、……特にその声に、恋をしてしまつたからである。

幼い日の私は、もう、あの格好いいオジサマに夢中になり、自分が夢の世界の中で、何度も彼と冒険をする少年になりきつていたつけ……。もうあれば、本当に、恋と言つていい感情だったと思う。そんなこんなで、私の将来の夢は、いつの間にか「声優」となつていた。もう、なれるなれないの問題ではない、なる、と決めていたのだ。あの「アイルビーバック」の超人気声優様と共演したいだとか、さすがにそこまでは思つていなければ。

さて、私は年度の変わり日に引越しをした。それまでは実家暮らしだったので、それまでずっと一人暮らしをしてみたかったのと、ちょうど安く入居できる物件を見つけたことがきっかけだ。もちろんそれまで通りの実家暮らしで特に問題があつたわけではないし、両親との仲も悪いわけではないのだが　　要はタイミングである。世の中には、不思議な縁というものがある。そんな風に、ある意味気まぐれで入つた先のアパートが、ちょっと特別な集団生活の場で、そこではこれまでの人生ではとても測れないような、まったく思わぬ出会いが待つていたのだから。

春から私が入居したアパートの名は、「ワナビ荘」。

第4話 うらぶれ案山子は月夜に吠える その2

「のんちゃん、見て見て！ あなたに朗報があるのよ、これを見てじりんなさい。ほら、あなたにぴったりじゃないかしり」

「うわっ、Dっがテンション高い。こいつときほろくなことがないよねえ」

「なーに行ってるの、のんちゃんがメジャーデビューするチャンスなのよ、そりゃあハイテンションにもなるわよ。うふふふ」「な、なんです……？」

Dっが手に持っていたのは、「声優の卵集まれ！ プロのスカウトもやってくる 新スター・マル秘オーディション」という企画のチラシであった。

「今度そこイベント会場でやるそしよ。こいで優勝すれば、来年放映のアニメの主役が約束されるって話よー。ねえ、ぜひのんちゃんに見せてみるべきじゃない？」

「ああ……、その話は専門学校の方で出回ってるから、もう知つてました。あまり私には関係ない話だと思つていますけど」

「あらら」

「えーっ、千載一遇のチャンスなのよ、もつたいないわよー。ぜひ出るべきよ、いえ、出ないとダメよー。自分の可能性を試すために出るべー！」

「…」

「Dっの方がのんちゃん本人より熱くなつてますねえ……」

田を丸くしているハルさんである。

ちなみに漫画家ユニット「ハル リヨーノ」は先日の光玄社での受賞以降、雑誌の増刊号に読み切り作品が掲載されることになり、現在原稿の書き直しに大忙しなのである。まー君とみちるさんの方も出版に向けて打ち合わせ中だ。一組の作家がいよいよメジャーデビューと云ふことで、ここのDっはやたらと張り切つているのである。「ここの調子で、ウチの子全員を業界入りさせるわよー」と

啖呵を切つた。いや、その前に自分の作品を書いた方がいいと思つただけだ……。

「うーん、でも私、コンテストみたいに大勢の前で話すの苦手ですしそう。その、まだうまくやれる自信が無いっていつか……」

「こやつはなぜ声優になろうと思つたのか、理解に苦しむ……」

頭を抱えているリヨーノである。

「あーっ！ とか言つてゐ間にまたあたしのカステラ食べられてる！ 許すまじ、ハルちゃん。食べもの恨みは怖ろしいんですよ！」
「きやーっ、私じゃないですもっちー先輩がいいつて言つたんですね！ 文句ならもっちー先輩に入つてください、それはそつとおいしかつたです！ カステラ」

「あつちやあ、あれつてのんちゃんのだつたのかー。ひつ毛りロリのかと思つてみんなで食つちゃつたよ。ごめんな」

「ちよつと待ちなさい、なんであたしのだつたら平氣でみんなで食べる流れなのよ？ 食いものの恨みの恐ろしさをその体にわからせてあげなきやいけないかしら？」

「ひえーっ、DＪが言つとシャレにきこえないねえー。あつはつはリビングでお菓子を食べながら談笑する私、ハルさん、リヨーノさん、もっちー、そしてDＪである。

今でこそこんな風に、見事にやかましい（失礼）集団に溶け込んでいる私だけど、ちよつと前までは、私は談笑の輪に馴染むようなキャラではなかつたのだ。私は、ワナビ荘に引っ越して間もないころのことを今でも思ひ出す。

私は、何かを言い出そつとして、すぐにどもるよつな人間だつた。伏し目がちで、猫背。何をやらせても不器用で、よく食器を壊したり料理に失敗したりしてDＪの手を焼かせた。何かをしてもらつたときのお礼や謝罪の言葉すら出でこない。ずっと友だちとおしゃべりなんかしていない、それどころか友だちらしい友だちも作らずにここまでてしまつた、ともつちーやDＪに告白したときも、ああ、

確かにそんなん違うなあ、と簡単に納得されてしまったほどだ。

そんなことでよく声優なんか曰指しているなあ、と思わず言われたとき、「想像の世界の中では私は流暢にしゃべれるんです。声優はどちらかと言えば『あちら側』の世界に声を吹き込む仕事ですから」と、わかるようなわからないような返答を返してしまったことを今でも覚えている。

でも、それを聞いたからといつてもつちーやDーが、私の日常生活に支障がないように会話の訓練をしてくれたり、友達づくりに手を貸してくれたりしたかというと、そんなことはなかつた。たまに誤解されるのだが、Dーという人は、自ら向上心を持つて努力するような若者にとつてはとても心強い頼れる味方だが、自分の可能性に見切りをつけ、独力で問題を解決したり、道を切り開こうとしなくなつた者には大変冷たいのである。そのため、変わることに消極的だつた頃の私にも、強いて何か手を貸そとはしなかつた。

「もちろん、頼まれば何でもやるわよ。あなただつてワナビ荘の住人、あたしのかわいい妹分のひとりだものね。だけど、あたしは決して『おせつかい』ではないのよ」

……今まで私の周りにいた人々と比べれば、十分おせつかいで甘いDーだが、そういうところの線引きはきちんとしていた。一方のもつちーは、歳も近いせいもあって、私のことを妹か何かのようになかわいがつてくれるようになつた。しかしそこには「友だちになつてあげよう」だとか、「会話の相手になつてあげよう」などという（誤解を恐れずに言うなら）高慢な態度はなく、ただ、もつちーにとつても私が話しやすく、また気の合つタイプだつたというだけのことだ。たぶん。

ある夜、私はもつちーに連れられてDーの経営するクラブを訪れた。

私がDーが本当にDーをやつしているシーンを見たのは、この日が初めてであった。普段はただのヒゲのオジさんだが（失礼）、ステージ上で皿を回している時のDーはやたらかっこいい。名物の超早

ディスクジョッキー

口MCは聞く者を痺れさせるし、たまに見させてくれるステージ上のブレイクダンス、あれは絶品だ。若い女の子たちもキャーキャー言つて見ている。今度のダンスはいつやるんですか、また見せて下さいなんて問い合わせがワナビ荘までかかるくらいだ。それくらい、クラブでのDJはアツい。

クラブの雰囲気に最初はとまどつていた私だが、DJのパフォーマンスを見た途端に、自分でもびっくりするくらい、別人のようにはしゃぎ始めたのだ。あの田のことは今でも昨日のことのように思い出せる。それまでは伏し田がちで腰も曲がっていた自分が、腕を振り上げて、DJの名前を大声で呼んでリズムを取つてゐる。もつちーも、ちょっと田を疑う光景だつた、と言つていた。

「DJ！ マジカッコいい、ステキー！ ジッち向いて！ おおっ、ブレイクダンスもすつごー！ いやほーうー！」

突然私が叫び出した異様なテンションに、……今思つともつちーはドン引きしてしまつたことだろ。だが、それでもよかつた。どうやる、自分は元気も好きなものもちゃんとある、普通の女の子らしこじが確認できたのだ。そつ、それに。

「あれだけ絶叫して声が枯れないような、声優としての素質もあるようだしね……」

ところはもつちーの言である。わゝかけところのは実にわざいなものだ。その田から、私はワナビ荘内においては、自分を解放することができるようになったのである。

好きなアニメ、好きな漫画、好きな映画、好きな音楽……、私、ワナビ荘のみんなとの話は死きなかつた。私は田をキラキラさせながら途切れなく趣味について語るみんなの姿に、特にもつちーの姿に、私は惹かれていた。ちょうどリリー・コさんガワナビ荘に入ってきたのもそのころだつた。

今でこそハルさんがいるが、当時のリリー・コさんもつちーは本当にいいコンビだつた。一緒に同人誌を作つたり、人気声優のことについて夜を徹して語り合つたり……。青春してるなあ、と見てい

て微笑ましかつたものだ。……というのはちょっとびり噓。本当は、それだけ仲の良い二人に、けつこう嫉妬したりしていたものだつた。ずきずき。

まあ、そんなこんなで、それまでの自分とがらりと変わつて楽しい生活を送れている私 の姿を目の当たりにしていたため、もつちーは、「これからんちゃんは外でも、つまり専門学校においてものんちゃんは変わつていくのだろう、もう友だちのいないひとりぼっちではない、普通の明るい生徒として、楽しくやつしていくに違いない」、そう確信してくれるようになつた。もう、これで自分たちの役割は終わりだ、と。

それまで私の保護者になつてくれてたもつちーが私から離れてしまつじとは、それは少し、ほんの少しだけ、寂しい気もするのだった。

だけど事実、私は専門学校でも少しずつ友だちができ始めた。もつちーたち以外とも笑顔で話すことができるようになつたし、人づきあいということも、できるようになつていった。そうやって笑顔が増えて演技にも熱が入つたためか、スカウトの方が目をつけてよく話しかけてくれるようにもなつた。私の道は順風満帆に思えた。これから私はきっと声優になつて成功をおさめ、だんだんと人気者になつていくこともできるかもしれない、と夢想したりもした。実におめでたいというか、ある意味夢見る小学生のような、思考停止状態であつたと今では思えるが……、それはある意味で、とても幸せな時間でもあつた。

一通り騒いだのち、私はチラシをじっと見つめながら、ぐっと拳を固めて、こう言った。

「D-J、私、やつぱりやってみます。D-Jの声とおり、自分の可能性を試さないって、思い直しました。私、……私、本気で夢を叶えに行くつもりで、このコンクールに出てみます」

「あら、すごいじゃない！ よく言つたわのんちゃん、またひとつ大人の階段を昇ったわね！ やるからには応援するわ！」

「僕たちももちろん応援するぞ。頑張れよ、会場には見に行くぜ。本番でどもつて恥かかないようにな」

「私も行きます！ のんちゃん先輩の晴れ姿、楽しみにしますー！」

「僕も楽しみですね。のんちゃんは自分では気付かないようですがベリーキュートでチャーミングな女の子です。自分を解放すれば、その魅力が表に出てくるものですよ」

「み、みんな大げさだな、どうせ予選落ちだつて、えへへへ……」

そう言しながらもまんざらでもない気分の私であった。私が頑張ることで、これだけたくさん、大切な仲間たちが、心から応援してくれる。そのことが、こんなにも、嬉しい。ほんの一年前の私なら考えられないことだった。

自分が変われるかもしれない。こんなチャンスを逃したくない。私の前には、光しか見えていなかつた。自分を変えるという欲求は、これほどまでに人を突き動かすのか。それは、私自身にとつても、新鮮な感覚であった。

もつちーたちの期待に応えたい。その思いが、確実に、私を変えていったのだ。

私が声優学校での異変に気付いたのは、その日の昼休みが終わっ

て、午後のトレーニングに向かおうと、下駄箱を覗き込んだときだつた。

声優の専門学校では、一般的に、发声練習などの他に走りこみや柔軟体操といったスポーツトレーニングがある。全身を使って演技をするという点では、役者も声優も変わりはない。はじめの頃は日ごろの運動不足が響き、長時間のトレーニングについていけない私だったが、最近はようやく体ができてきて、トレーニングを完遂してもバテないようになってきた。

その日も私は下駄箱を覗いてトレーニングシユーズに履き替えようとしていた。だが、「ありや?」と私は気付く。自分のトレーニングシユーズが、無いのである。

どこかに置いてきたか……、私は自分の記憶をたぐりよせて思い出すとする。昨日のトレーニングのときにちゃんとここへ戻したが、いや……、ここに戻さないとしたらどこに置くというのだ。他の場所に移す必然性がない。しかし……、そこで、ふと思いついて、玄関脇のゴミ箱に私は視線を移した。まさか。いや、本当にまさかとは思うが、一応、確認すべきことではある。この学校では依然も「そういう」事態が何度もあったと聞く。もちろん、この学校でなくとも、人間が集まる場所では、何かしらそれに類似した事態というものは起こるものだが……、しかし、私は冷静な思考とは裏腹に、自分の膝がガクガクと震え始めているのを感じていた。

かくして、そこに私のトレーニングシユーズは捨てられていた。
「丁寧に、カッターで縦に横にといくつもの切り傷を作られて……。
私ははつと口元を抑えた。ひゅうひゅう、と体の中を空気が巡っている音が聞こえる。額にじんわりと汗が吹き出してきた。

これほど、これほど明確に他人から悪意を向けられたのは、実は初めての経験であった。これまでクラスからなんとなく無視され、なんとなくつまはじきにされ、なんとなく一人ぼっちになり、そうして実につまらない学校生活を過ごしてきた私である。
しかし、このようにはっきりと「いじめ」と呼ばれる行為を、言つ

なれば積極的に受けたことは、生まれて初めてだつたのである。

これが 、人間の「悪意」。

子どもじみた、実にくだらない嫌がらせである。これをやつた人間は精神年齢が著しく低い。スポーツシユーズはもつたいたいが、今度からは常に持ち歩くようにすればいい、いちいちこんなくだらないことをする人間を相手に、傷ついてなどやる必要はない 、理屈ではそうわかっていても、私は胸の激しい動悸を抑えることができなかつた。

心当たりならいくつかある、そしてこんなことをされる理由として思い当たることもいくつか 、ある。もともとネクラだつた自分が急に明るくなり、友達も何人かでき、さらにスカウトの方にもよく話しかけられるようになつた。それもすべてワナビ荘のみんなのおかげ。最近はもつちーもよく専門学校に彼女の様子を見に来てくれるようになつた。ひょっとしたら、彼氏か何かと勘違いされかもしぬれない、と淡い不安のような 同時に期待でもあるような妙な気持ちを抱きつつ、私は毎回もつちーを出迎える。

でも、それだけで周りから見れば、「嫉妬」には十分すぎる理由になるではないか。あるいは「憎悪」。私自身、他人に対しかつて何度も抱いてきた感情である。

他人の目をきちんと意識して行動せず、「調子に乗つた」 、
これは自分のミスだ。

私はがくんと膝をついた。そつか、自分がしたのは悪いことだつたのか、他人から見ると「むかつく」行為だつたのか。私は妙なところで納得してしまつた。そしてそれに今の今まで気付かなかつた自分自身に腹が立つた。

どうしよう 、これではとてもトレーニングには出られない。こんなボロボロの靴を履いて行つたところで、まともにトレーニングに参加できるはずもないし、ここは小中学校ではないのだから、講師や事務員に被害を訴えたところで、まともに犯人探しや叱責を行つてくれるとは思えない。その日、私は結局何もできずに、早退

する」とした。これまで一度も休まず律儀に出席してきたトレーニングをサボつて、である。

「あー、こんなに早い時間に帰つてきて、どうしたの。熱でもあるのかしり?」

「べ、べつにそういうわけではないです……」

心配して話しかける口につけまく答えられず、その日私は部屋で

ぼんやりして過いした。

しかし、翌日からも似たような状況は続いた。突然発声練習用のテキストが力バンから無くなったり、聞えよがしに自分の悪口をいう集団がいたり……。その過程から、だいたい誰が自分に対する嫌がらせを行っているか、大体は把握できた。リーダー格は、ずっとアイドル声優を目指してトレーニングを続けてきたが、新人に次々に抜かされ、未だに日の目を見ることができずにすでに二十三歳になっている、柳田さんという女性の先輩らしいこと。そしてその取り巻き一人がこれまでの嫌がらせの実行犯であるうこと。漫画やドラマの中だけかと思っていたのに、こんなことが現実にあるんだなあ、と新鮮な驚きを感じるとともに、なんだか気の滅入ってしまう私であった。

最近、のんちゃんの元気が無くなつた、ということでもつちー、Dーはもちろん、リョー、コやまー君もしきりに私のことを心配してくれた。しかし、彼らを面倒に巻き込みたくなかった私は、絶対に事情を話そうとはしなかった。私を本当の家族のように可愛がつてくれている彼らのことだ、もし本当のことを知れば、学校に武器を持つて乗り込んでくるくらいのことはしかねない。「最近、疲れがたまっちゃつて……」と曖昧に笑い、重い頭を抱えながら眠りにつく。そんな日々が続いた。だから、本当に毎日まるで雪だるまのように疲れが溜まつていったし、それが声優としてのトレーニングに影響が出ないはずがなかつた。

「ちよつと、何やつてるの北原さん。全然腹から声が出てない！」

「あ、は、はい」

どこか上の空で演技をしていた私は講師に容赦なく叱られた。注意を受けたのちは、表面上は力を入れて熱演をして見せるのだが、声に魂が入っていないことは誰の耳にも明らかであった。

「あなたどうしちゃたの？ 恋の悩みでもできた？ 昼間つからぼ

んやりとしちゃって、意識が別のところに行つてたら演技なんてできっこないわよ。顔洗つて出直して来なさい

ぴしゃりと言われ、しゅんとしょげながら化粧室へ向かう私。そんな私をくすくすと嘲笑う声は、きっと嫌がらせをしてきた連中のものだ。私はもはや怒りも憎しみも抱くことができず、ただただ悲しくなつて背筋をぐにゃりと曲げてしまつた。猫背ののんちゃんの復活、である。

最近はスカウトの人も、あまり積極的に話しかけてくれなくなつた。以前は「素質がある」「磨けば光る原石だ」と、彼女のことを探してくれた人なのだが……、素質があつても身を入れて演技しないと使いものにならないということか。私は鏡に映る青白くなつてしまつた自分の顔を見ながら、なんだか泣きたいような気持ちに襲われた。ああ、このまま死んじゃおうかな……。ぼんやりとそんなことを思つたとき、トイレのドアが開いて入つてきた人影があつた。「あんた、最近調子悪そつじやん。ちょっと前までアゲアゲだつたくせに。何かあつたの?」声優オーディション、出むんじやなかつたの?「

けらけらと笑う派手な髪をした女性は、いじめの主犯と思われる柳田さんであつた。何といつも口々しさだひつ。私は思わず顔を伏せてしまつ。

「ちょっと、なんとか言つたらどうなのよ……。心配して声をかけてあげてんのに」

「え、えと……、その」

柳田さんはうまく言葉を紡げない私をどん、と強く押す。よろめいた私はその場に倒れてしまつ。そんな弱つている私の髪の毛を柳田さんは掴みあげて、無理やり立たせようとした。

「いい、あんたが悪いのよ。ネクラで『ミコ障の能なしのクセして、あんな風に調子に乗つたりするから……。あたしたちがあんたに身の程つてものを教えてあげてるの。だつて、ああでもしなきや、あんたあの後いくらでも増長してたでしょ。そしたら、きつともつ

と酷いいじめをあたしたち以外から受けたわよ。いい、この世界はね、出る杭は打たれるものなの。覚えときな。あたしたちは、みんなの不満がどうしようもなくなる前にあんたを打つておいてあげたわけなんだから、むしろ感謝されるべき立場なのよ。ほら、礼を言いなさいよ、あんたに世の中の厳しさを教えてあげたあたしに……、何よ、その目は！」

いつしか柳田さんを強く睨みつけていた私は、直後、腹に強い衝撃を感じた。膝で蹴りを入れられたのである。私は息ができないなり、咳をしながらその場にうずくまる。

「ふん、バスのくせに、二コ一コ笑って媚びやがって……。いい、声優コンクールにも出るんじやないよ、あんた。あんたみみたいな下手くそが出たつて、恥をかくだけなんだから、最初から出ない方が傷口は小さくて済むよ。警告してあげてんの、あたしは。ねえ、なんとか言つたらどう？ 今ここで言いなさいよ、コンクールに出るのはやめる、って。ねえ、言いなさいよ、言いなさいよ！」

またしても腹を蹴られる。しかし私は痛みにも耐え、ひたすら耐え、何も言わずにただただ耐え。その後、柳田さんによる暴力は数十分続いた。それも、外からは見えないような部分ばかりを狙つて。

……力の無い私は、反撃もできず、ただ柳田さんを強い視線で睨み返すことしかできなかつた。

悪いことというのには重なるものだ。その夜、私がコンビニでアルバイトしていたときのこと、陳列する商品を運ぼうとしていた私は、昼に打たれた傷が痛んだせいで、棚に並べるべき商品を床にぶちまけてしまつたのである。

「あーもう、何やつてんだよ！ ほんやりしてんじやねえよー。」「す、すみません……」

すぐに片付けようとする私だったが、傷の痛みが増してうまく立ち上がりがれない。それでも無理して立ちあがろうとした結果、もう一

度その場に転倒してしまい、実に間抜けなことに、床に散らばった商品の上にその体を預けてしまつて、こいつの商品をぺちゃんこにしてしまつたのである。

「お前、ふざけんなよ！ ドジとかじや済ませねえんだぞ、これじゃ売り物にならないじゃねか」

「す、すみません、べ、弁償します、今すぐに片付けてから、そ の……」

「あー、もういい。お前はもう帰れ」

「えつ……」

「明日から、もう来なくていいから」

もともとお世辞にも優秀とは言い難い仕事つぱりの私であつたが、これが決定打となつて、契約打ち切り決定であつた。世にいうクビである。こう言われてしまつては、私はもう、何も言えなくなつてしまつた。それでも一応片づけだけはきちんと済ませてから帰つてきた私は、なんだかとても馬鹿正直といつか、損ばかりしているような、とても馬鹿馬鹿しい気持ちに気持ちになつてしまつた。

ワナビ荘に帰つてきてから、私は何も言わずに部屋に引きこもつたままだつた。さすがに何かがあつたと察したワナビ荘のみんなは、いろいろと想像して気を揉んでくれたが、のんちゃんとてもう大人、自分から相談してくるまではそつとしておいつと そういう結論に落ち着いた、ようだつた。

そして住人たちが寝静まつた深夜二時頃、私はのつそりと部屋から起き出し、暗いリビングでテレビをつけてぼんやりとしていた。膝もとにカフカがするりと滑り込んでワンと鳴く。私は、久々に自分以外の生き物の体温、温かさを感じられたような気がして、やつと少しだけ表情をほころばせた。ふかふかの頭を優しく撫でてやると、カフカは気持ちよさそうに目を細めた。

「ねえカフカ……、私、どうしてこんなことになっちゃったのかな」「私はカフカを撫で続けながら、小さな声で話しかける。

「ただ、普通の生活が、私にも友だちとか、仲間とか、そういうものが手に入ったと思ったのに。どうして、こんな風に、恨まれたり、憎まれたり、怒られたり、何もかもがうまくいかなくなつちゃつたんだろ？」

言いながら、じんわりと涙が浮かんでくるのを感じていた。誰も聞いていないとと思うから、カフカしか相談できる相手がないから、だからこんな風に正直に話せるんだろう、と私は思った。

「だけどきっと、全部私が悪いんだよね、不器用だつたり、空氣読めてなかつたり、バカだつたり、周りに迷惑ばっかりかけてる私が、だから、嫌われて当然なんだ。あーあ、いろいろとやつちやつたなあ。これじゃ、声優オーディションなんか出たらもうといじめられるだけだよ、もうチャレンジなんて、やめた方がいいよね。柳田さんの言つとおり……。どうせ叩かれるだけなら、……また前みたいに、大人しく一人で黙々とやつてたころの私に戻れるかなあ」

言いながら、ぽろり、と一筋の涙が私の頬を伝つた。熱い涙だつた。

「だけど、戻りたくないなあ、もつちーたちと会つ前の自分には、どうせなら、学校では嫌われてもいいから、ワナビ荘では、明るい

自分でいたい、みんなとワイワイやれる、元気のいい自分でいたい
、そつ思つよ。……あはは、だったら最初からそつすればよかつたのにね、どうして学校でまで調子に乗っちゃったんだろ。……

バカだ、私……

「そいつは違うな」

私ははつとした。今、カフカ以外の声がした、それもすぐ近くから。すっかり聞き慣れた、あの声が。……私はすぐに状況を理解し、思わず耳たぶがかーと熱くなるのを感じながらも、ゆっくり振り向いた。

果たしてそこには、Tシャツに短パン姿のもつちーが立っていた。「乗れる調子があるなら、ぜひとも乗つてみるべきだ。そもそもの調子が出ない奴なんて世の中にはいっぱいいる。だから、もし今までにない流れができたならそこには乗るべきなんだ、のんちゃん。そこでたとえ失敗したとしても、その経験は決して無駄にはならない」

「も、もつちー……」

「……バイト、クビになつたのか

無言でこくりと頷く私。その目にはいっぱいに涙が溢れていた。きつと何か嫌な事があつたのだろう、ともつちーは察してくれたよううなようだつた。

「なら、ちょっと僕から提案があるんだ。実は、のんちゃんにぴつたりのアルバイトがある。ぜひやってみないか。きつとのんちゃんのためになると思つし」

「え……」

思わぬ言葉に呆然とする私。新しいバイト……。何だらう。話の流れから言つて、またコンビニのような業種とは考えにくいけれど……。

「学校でも、何があつたかは知らないけど……、その、僕はのんちゃんは悪くないと思う。今までちょっと人づきあいが少なかつたから、経験不足から失敗しちゃつただけで……、そんなのは誰にでも

ある話だろう、って。むしろ、その程度の失敗を笑つて許してやれない周りが悪い」

「や、そうかな」

「そうだよ。人間の器が知れるつてもんぞ。あとは……、もしのんちゃんが助けを求めてくれるならば、僕が直接学校に乗り込んで解決してやる。何が何でも、だ。のんちゃんには僕たちがいるんだから。僕だけじゃなくて、ロッキー、まー君も、リュー・コモ。ハルも、みちるさんも、みーんなのんちゃんの味方なんだ。それを忘れないで」

「う、うん……」

「あとで、……声優コンクールの出場、やめるなよ

「え……」

「みんな、楽しみにしてるんだ。のんちゃんの晴れの舞台をな。もちろん、ワナビ荘のみんなのために出場しきとは言わないし、どうしても嫌なら無理にとは言わないけど……、本当は出たいんだ。それなら、その気持ちを曲げるべきではない」

「……ん……」

私は頷いて目を閉じた。もつちーの言葉がしつかりと私の心に染み渡ったような気がして、じんわりと嬉しくなった。ずずつ、と私は音を立てて鼻をすする。もつちーは「汚いぞ」と言つてティッシュ箱を手渡してくれた。盛大に音を立てて鼻を噛むの私。ああ、やつぱりこうこう、格好つかないあたり、私は私なんだなあ、と妙なところに安心したりする。

「あ、あとのんちゃん」

「ん……なに」

「カフカが死にそう」

気付くと、私の腕の中でカフカが泡を吹いてぴくぴくしていた。どうやらいつの間にか強く抱きしめていたらしい。私は慌てて手を離す。その場に倒れてぴくぴくと震えているカフカ。うん、ちゃんと生きているようだ。ほっと安心して「「めんね」とカフカに

謝った。

その温かい体温が体を離れると、少しだけ寂しい気もしたが、すぐにもつちーが隣に座つたので、その寂しい気持ちは長続きしなかつた。何も言わず、そつともつちーによりかかる私。テレビは音も立てずに、退屈な風景の写真と天気予報を映している。私はそのまま、すっかり安心してしまい、すやすやと気持ちのよい寝息を立て始めた。

さて、その次の日。

「ここからの語り部はふたたび僕へと移る。

僕がのんちゃんを連れて行つたのは、ある学習塾であった。

「じ、塾？」

明らかにたじろいでしまつてゐるのんちゃんに僕は言つ。

「ここは受験対策をバリバリやるつていうタイプの塾ではなくて、いわゆる補修塾だね。学校の授業についていけなくなつて、より簡単なところからやり直すつていうタイプの。集団授業だから、大勢の前でわかりやすく話をしないといけない」

「お、大勢の前でつて」

「のんちゃんには、ここで講師のアルバイトをしてもらひつ

「えええつ！」

のんちゃんは目を丸くした。まつたくもつて信じられない、という顔である。

「僕の友達から頼まれたんだよ、ちょうど講師に欠員が出ちやつたらしくて、誰かを紹介してくれないか、ってね。いいか、のんちゃんに足りないのは人前で堂々と話す度胸だ。いくら演技ばかりがうまくても、この先のんちゃんが世の中を渡つていくためには能力として足りないんだ。具体的には、のんちゃんに必要なのは、話術だ」

「話術……」

「そう。のんちゃんは人にきちんと話をして、自分の考えをわかつてもううづく、自分の想いを理解してもらつといつことできるようにならないといけない。凄く極端な言い方をすると、のんちゃんが自分の気持ちをきちんと言葉にできていれば、あんなにのんちゃんが思い悩むまでに事態が悪化しなかつたかもしれないし、バイトもくビにならなかつたかもしれない。それに、講師は声を使う仕事だ。

アドリブ力も試される

「そ、それはそうだけど……」

「そんじゃ、頑張つて」

「頑張つてつて……」

背中をどんと押されて、その場に取り残されるのんちゃん。そりやあ、次のバイト先を斡旋してくれたのは嬉しいんだけど、経験もないのにいきなりやらされても困るというか……、これでは、まるで押しつけられたような状態ではないか。

のんちゃんにはあつ、と溜め息をついた。塾の校長先生が「一緒に頑張りましょうね」と二三二二しながら手を差し出してくる。年配の女の先生だ。「松野」とこづねームプレートを掲げている。「よろしくお願ひします……」のんちゃんもまた、しょぼくれた顔をしつつも手を差し出し、握手に応じた。

「よし、ちゃんと最初の挨拶はできたようだな

「ねえねえ、なんであんた帰るふりしてあの子のちやつかり様子見てんのよ。ちよつと過保護じゃない?」

「そうこうりょー！」と

「……」

おせつかいな一人である。

「しつかし、けつこうな荒療治というか、強引なやり方するわねもつちーも。本当にこれまでのんちゃんの悩みは解決すんの? ただのいじめなんでしょう、あんたかっこあたりが乗り込んで犯人をぶつ飛ばせばそれでいい話じゃん

「まあ、変わるきつかけつてことね。のんちゃんがいつまでもこのままでいていいとも思えないし、あいつはああ見えてけつこう子ども好きだ。性に合つんじやないかと思つてな

「本当におせつかいね……」

ほどなくして、のんちゃんの模擬授業が始まった。

観客は校長先生、事務の女性一人、他に先生が一人。僕たちは教室の外からそつと見守っていた(ひょつとしたらとっくにばれていた

たかもしれない）。小学生の算数の授業だったのだが、これが見てられないほどにひどいものであった。

まず、足し算をするために黒板にリングゴやみかんの図を描くのだが、ものすごく下手である。リングゴもみかんも見分けがつかない上に、描く場所も滅茶苦茶。一生懸命足し引き算の概念を教えようとするのだが、図がわかりにくい上説明もしどろもどろなので、子どもはおろか大人にもきちんと意図が伝わるか危うい。

「こ、これはヒドイ……」

「あ、校長先生が頭を抱えてる」

「よくあれで声優になりたいなんて言えたものねー、それもすでに一年以上専門学校に通つてあれでしょ…………？」

「まあ、基本的なスキルはあるから、慣れればすぐに上達するんじゃないかとは思うけど…………」

そう願わないわけにはいかない。

のんちゃんの授業は翌週から始まった。学年は小学五年生、生徒は五人。どの子も、学校の授業についていけなくなったり、不登校になつたため学校ですべき学習ができない子など、補修を必要とする生徒ばかりだった。

のんちゃんは不器用な絵や図で必死に算数を教えようとする。だが子どもたちは正直だ。彼女の授業がわかりづらければ聞かないし、図や字が下手くそなればノートもとらない。彼女がどれだけ頑張つても、いやむしろ無理に頑張れば頑張るほど、子どもたちはしらけ、授業に対する興味を失つていく。

「ねえねえ、さすがにかわいそつじゃない？ やっぱり向いてなかつたんだよ、あの子には。ほら、完全に眠っちゃってる子までいるし……」

「確かにこの教室の状況はひどいな。だけど、これを何とかするのがのんちゃんの仕事だ。向いてる向いてないじゃ、ない

「きびしー」

なんだかんだでまたのんちゃんの様子を見に来ている僕たちである。リヨーノなどは原稿が押してて忙しいだろ? さながら本当の姉であるかのような心配ぶりであった。

僕がもう一度教室を覗いたとき、ふと、ある子どもの姿が目についた。髪の長い女の子である。彼女は特に面白くもなさそうな無表情のまま、じっと、のんちゃんのことを見つめていた。なんとか光を感じない、暗い目だ。

「あの子、唯一のんちゃんの授業をちゃんと聞いてるね」「リヨー

「だけど、手はろくに動いてないし、のんちゃんに当たられても無反応よ。本当に理解してんのかな? 大人の前では『良い子』を演じちゃうタイプじゃないの?」

「彼女は、学校でいじめられて不登校になつたリカちゃんとこいつ子です」

突然第三者の声がして、「ひいっ」と驚いて振り返る僕とリヨーノ。そこには、塾の校長である松野さんが穏やかな表情で立つっていた。

「学校ではいつもあんな風に、真面目にじっと先生の話を聞いていて、特に問題も無い、普通の子だつたといいます。だけど、突然よく理由の分からないいじめの標的にされて。彼女は一度も親御さんや先生、あるいは自分をいじめるクラスメイトの前で泣いたり怒ったり、感情を見せることはしなかったそうです。腕にできた痣にお母さんが気付くまで、いじめの事実についても一言も相談していなかつた」

「そりなんですか……。それは、お母さんたちに心配をかけまいとして?」

「かもしれません。とにかく、お母さんに追及されて、彼女はいじめられている事実を白状しました。そしてその日から、もう学校へは行きたくない、またいじめられるから、と 不登校児になつてしまつたのです。今から四ヶ月前のことです」「なるほど……」

僕は頷きながら、のんちゃんとりかちゃんといふ生徒の境遇を重ね合わせていた。いじめられ、誰にも相談できずに一人で思い悩んで……。ひょっとしたらこの一人は似た者同士なのでは……。

そういっていふちに、授業終了の鐘がなる。キーン「ーンカーン」。のんちゃんは溜め息をつきながら、最後の挨拶をして授業を終えた。結局またうまくやれなかつた、そんな疲労感が表情から見てとれた。

僕たちは慌てて物影に隠れる といつても、すでにのんちゃんにはバレているだろうが。のんちゃんはがらりと扉を開けて教室から出でくると、また一つ大きなため息をついた。

その様子を見ていると、僕はなんだか彼女にとても悪いことをしてしまつたような気がした。ひょっとしたら、僕のしたことは間違つていただろうか？

「先生」

そのとき、とても小さな、か細い声で、そう呼ぶ声がした。のんちゃんははじめ自分が呼ばれたと気付かない様子で、教室を去ろうとしたが、再び「先生」とやや強い声で呼び止められ、ようやく振り向いた。

そこには、さきほどじつとのんちゃんを見つめていた、リカちゃんが立っていた。手には、つこさつきの授業で使用したテキストがしつかりと握られている。

「ど、どうしたの……？ な、何か……」

質問だろうか。だけど、子どもと一対一になつて指導した経験はない。これが初めてになるのだろうか。ドキドキ……。のんちゃんは緊張した様子で、次の言葉を待つた。

「先生は……、どうしてそんなに寂しそうなの？」

「えつ……」

一瞬何を言われたのかよくわからなかつたようだ。寂しそう……

？ 不慣れでしどろもどろな授業の出来に文句を言われるのならば、無理もないとは思つたのだが……。寂しそうと思われる授業を、自分

はしただろうか？ のんちゃんは迷つてこりゆづだ。

「私と、同じような顔をしてる」

「……」

のんちゃんはリ力ちゃんを見つめあつた。その目の中に、お互に、何かを探しているかのような時間が過ぎ去つた。

「……生徒との対話が始まるわね。行きましょう」

「えつ？」

松野校長が小声で言つた言葉の意味がわからず、僕は思わず聞き返した。

「生徒との信頼を築く方法は、個人的なコミュニケーションをとることよ。彼女はリ力ちゃんと、どこか似た目をしている。だから、今、心を許そうとしている。今までなかなか他の先生方に心を開こうとしなかつた、あの子が。……これは、北原先生にとつてもとても大切な経験になるはずよ。今は一人きりにしてあげましょう、彼女たちが何か、助けを求めてくるようなら、そのときに手を差し伸べればいい」

「……そうですね」

二人は早くも親密な空気を作り、何やら話し込んでいた。確かに、外野たる僕らがここにいても無粋なだけだ。僕とリヨーコは目を合わせてそつと頷き、学習塾を後にした。

第4話 うらぶれ案山子は月夜に咲える その7

のんちゃんは学習塾でのアルバイトに少しずつ慣れてきて、僕は小説を少しずつ書き進めた結果ようやく終わりが見えてきて、ハルリヨー口は漫画の掲載がとうとう一週間後に迫り、D口は相変わらず口がなスピリチュアルなものと会話しつつ夜はクラブでブイブイ言わせており、そんな日常が流れても中のある田のこと、僕たちは突然、思いもよらぬ報告を受けた。

まー君とみちるさんが、ワナビ荘を出て行くというのである。

「ありやー、作家になる夢が叶ったからって、もうワナビ荘とはさよならってわけ？ くーっ、薄情者だねえ！ リア充爆発しきつ！」

「そうじやありませんよ、僕たち、本格的に付き合つていいか、同棲することにしたんです。で、そうなるといつでももう住めないから……」

「なんてこつた！ リア充すぎで目眩がするぜ……」

その場にぶつ倒れるリヨー口。つぐづぐ面白い反応をする奴だ。

「しかしまた、ずいぶんと急なのね。お別れ会くらい盛大に開きたかったけど

「まあ、そう遠くへいくわけじゃありませんし。これからは駆けだし作家として、毎日一人で切磋琢磨です。なつてからが厳しいといわれるこの業界ですから、死ぬ気で頑張りますよ」

みちるさんが眩しい笑顔でD口に応じる。

「あ、でもそれじゃあタクシードライバーの仕事は、僕が尋ねると、

「もちろん、続けますよ。彼女のために作ったゴーストタクシーですからね。彼女専門の運転士を、これから何十年でも続けて行くつもりです」

「かっこいいー！」

そんな会話をしている中、のんちゃんだけが黙つている。「どう

したんです？」とまー君が話しかけると、のんちゃんはふるふると肩を震わせはじめ、そしてわざとばかりに泣きだしてしまった。

「ま、まー君、みちるさん……。ぜ、絶対また遊びに来てください、ね、こ、こつでも、楽しみにしますから……。わ、私たちのこ、忘れないとくださいね」

「のんちゃん……」

みちるさんは泣きじゃくるのんちゃんをギュッと抱きしめた。思えば、のんちゃんはこのワナビ荘に来てからようやく友だらしこ友だちができたわけで、そういう意味ではまー君やみちるさんとの別れは、友だちとの別れのほどんど初体験になるわけか。そういうばまー君ともいろいろあつたなあ……。と、ついガラにもなくじーんと来てしまう僕なのであつた。

「いつか、また晴れの舞台で会いましょう。私たちはホラー作家、のんちゃんは人気声優、ハルリヨー！さんは人気漫画家、ロヒともつちーさんは人気小説家になつて……。みんなで記者会見で顔を合わせたり。ふふ、そのときが本当に楽しみです」

「み、みちるさん……」

こんな感じで涙、涙のお別れを経て、ワナビ荘を去つていったまー君とみちるさんだが、この一週間後の週末には普通にワナビ荘に遊びに来て夕食を「ちそつになつて、あまつさえ勝手に泊まつていつた。まったく、のんちゃんの感涙はいたづらになつにけり、である。

しかし、これを契機にワナビ荘の環境自体が少しずつ変わりつつあることも事実のようだつた。まー君の入つていた部屋は入居者の募集広告が出され、料理や掃除、その他のアパート内での当番もがらりと変わつた。一人の人間がいなくなるといつのは、そういうことなのだ。

「あたしたちも、その「か」を出していくことになるのかなー……」

ふつつと、タバコの煙を吐き出しながら、遠い目をして呟くリヨー。「。今のはなんとなく、のんちゃんには聞かせたくないセリフだ

な、と僕は思った。

のんちゃんは、昼は声優学校で訓練、夜は学習塾で講師をする一重生活をそれからしばらく続けていた。声優学校では相変わらず嫌がらせを受けていたらしいが、のんちゃんはそれらを全て無視するようになってしまったし、回避できるものは徹底して回避した。荷物はすべて常に自分で持ち歩くようになってしまったし、トイレや校舎裏などで一人になることが無いよう気を配った。聞えよがしな悪口などもイヤフォンをして発音の練習をすることでシャットダウン。ただただ、自分を高めるだけに専念した。

柳田たちとしては、その様子が余計に面白くなかったらしく、執拗にあの手この手でのんちゃんを攻めようとした。一度、多くの人がいる場所で、のんちゃんの手を引っ張って人気のないところへ連れて行こうとする、という暴挙に出たそうだが、講師が見とがめたため失敗に終わった。柳田たちも、かなり鬱憤が溜まっているということか。僕はこの件がどうしても不安だったが、のんちゃんは「まだ大丈夫、まだやれる」と意外に強気であった。

塾の方では、のんちゃんはあまり飲みこみのよくない子たちを相手に熱心に勉強を教え続けた。特にリカちゃんに対してはいろいろ親身になり、まるで我が子のように可愛がりながら勉強を教えていられるらしい。このアルバイトを始めてからというもの、のんちゃんは前にも増して楽しそうに、生き生きとしてきたように見えたので、僕としてもやはり紹介して良かったと溜飲を下げていたのだが、一回だけ、のんちゃんが顔を真っ赤にして涙をいっぱいに溜めながらバイトから帰ってきたことがあった。

「ど、どうしたののんちゃん？ 何かあった？」

「……私、もう、塾の先生やめる！」

そう言い出したときにはさすがに僕も慌てた。彼女も少々ヒステリックになっていたようで、よく落ちつかせてから詳しい事情を聞くと、リカちゃんと大ゲンカになつたのだそうである。

「私が何を言つても答えてくれなくなつて……。私と田を合わせようとしてないし、ずっと不機嫌そうな顔してゐるし。で、のんちゃんといつちを見なさいつて怒つたら、ものすごく不満そうな顔をしてきたから。それで、それで」

「あー……。反抗されたわけか」

「もつどつしていいかわからない……。子どもつて何考へてるかわからない。やめたい……」

頭を抱えてうずくまるのんちゃん。僕はその様子が不思議に思えて、思わず尋ねてみる。

「何考へてるかわからない? それホント?」

「……えつ」

「だつて、リカちゃんは学校でいじめられたり、不登校になつたりしてゐんぢょ。そして、先生に不機嫌な顔を見せたり、反抗したりしてゐる。そういう子の気持ちつて、のんちゃんにわからないとは思えないんだけど」

「……」

のんちゃんはしげし考へる。こじめられつ子、いろんな人から無視されて、意地を張るようになつて……、確かに自分とよく似ている、と思つ。だつたら、時々そつやつて他人に嫌な面を見せてしまう子の気持ちも、確かに……。

「と、いうか、のんちゃんが理解してあげないとダメだよ、その子の気持ち。ある意味でリカちゃんはのんちゃんに甘えてるんだよ。厳しく接することも大切だけど、でも、反抗されたからつて見離しちゃダメ。リカちゃんにはのんちゃんしかいないんだから」

「私しか、いない……」

「そう、のんちゃんしか」

のんちゃんはそれきり黙つてしまつた。だけど、僕の言いたいことはしつかり伝わつたと思う。その翌日も、のんちゃんはいつも通り、泣き言なんて一つも言わずに、あるバイトに出かけて行つたからだ。

のんちゃんを見守る僕の脇に、ローラのテカニ団体が並ぶ。「ここ」と何やら嬉しそうだ。

「あの子、成長したわよねー……」

「ああ、大人になった」

「あんたもいい仕事したわね。あの子が変われたの、あんたのおかげって部分も大きいわよ」

「いやあ、全くもってその通り。もっと褒めろ」

「肝心のあんたはイマイチ成長してないみたいだけね。あんた今アルバイトしてたつて。今月の家賃、まだ受け取っていない気がするんだけど」

「う……」

さすがローラ、突っ込みは容赦ない。

「や、それより、のんちゃんの声優コンクールもうすぐじゃないか？ な、みんなで応援しに行く準備しようぜ。なんならのんちゃんガンバレって横断幕でも作って、親衛隊っぽい格好をしていけば、すでにファンがついてるーってなって評価が上がるかも……」

「そうね……」

心ここにあらずといった感じでぽつりとローラが返してきた。普段のローラにはこういうことがあまりないので、僕はつい気になつてローラの顔をまじまじと見てしまつた。

「無事にいけば、いいんだけどね」

ローラの顔はいつの間にか曇り模様だった。本当に、人のいいおつさんだ。今週中にはちゃんと家賃を納めてあげよう、と心に決める僕であった。

第4話 うらぶれ案山子は月夜に吠える その8

「なあー、聞いてんのか、ああーん？」

……まったくもって、うかつだつた。

あれだけ気をつけていたはずなのに……、今日はどこか浮かれていたから、こんなところで捕まつてしまつたんだろう。

いよいよ声優コンクールという日の、その前日のことである。

「調子乗るんじゃねえって、何度も言つたらわかるんだよ！ せつかあたしらが何度も警告してやつてんのに無視しやがつて、このつ！」

もつちーから助言を受けた後の私は、リカちゃんにもう一度向き合つことを決め、とことん、何も言わない彼女に付き合つた。リカちゃんが私に対し、言葉を発してくれるまでの根競べ。……そんな状況が一時間も、続いたのち、リカちゃんはついに折れて、それまでの親への不満や学校への不満、塾への不満、そして私自身への不満も含め、思い切り自分の想いをぶちまけてくれた。

嬉しかつた、単純に。

彼女が私に全ての思いのたけを、今まで溜めこんできたことをぶつけてくれたことが嬉しかつた。ようやく彼女に、信頼できる相手だ、と言つてもらえた気がした。

それから、勉強と関係の無い部分での相談ごとにに乗つてあげられるようになつた。なんだか、昔の自分を見ていよいよ、どこか悲しく、だけど嬉しい気持ちになつた。一日でも早く、リカちゃんが笑顔で勉強できるように、たとえ学校へ行けなくても、楽しい場を作つてあげられるように、私は頑張ろうと心に決めていた。

そんな風にリカちゃんのことを考えていたせいであろう、私の顔は明るかつたと思うし、それが柳田さんたちの神経を逆撫であるものであることも重々承知していながら、私は柳田さんたちのよく使う（というかたむろしている）、人通りの少ないトイレの近くを通

つてしまつたのだ。

「いいか、今すぐ声優コンクールも事態しろよ。お前なんかに出る資格はないんだからな。……聞いてたら返事くらいしりよー。黙つてちやわかんねえじやねえかよ！」

当然私は連れ込まれて、これまでにないくらいのレベルでの暴力を受けた。

お腹を蹴られ、足を蹴られ、胸を蹴られ……、またしても外からは目立たないところばかりを狙われた。両腕は抑えられているから逃れられない。私は必死に膝を丸めて胴体を守ろうとするが、うまくいかない。口からしょっぱい液体が流れた。

「泣くんじやねえよ、会話になんねえだろが……、ほら、あたしらに謝れよ、ごめんなさいって頭を下げるんだよ、なあ！」

ぐいっと頭を掴まれて、無理やり上向かされる私。この頃には、もういろんなことがどうでもよくなつていた。ああ、結局こうなるのか……、色々頑張つたけど、無駄だったかのかなあ、私、もつちーやDJや、いろんな人に支えられてここまで来たけど、やつぱり間違つてたのかなあ……。柳田の言葉攻めに遭い、どこか本気でそんな風に弱気になつてしまつていた、そのときだつた。

「のんちゃん！」

聞き慣れた声がトイレに響いた。えつ、この声は……、そんなばかな。どうしてここに。

「ちつ……んだよ、てめえの彼氏かよ。ぞけやがつて」

トイレの入り口に立つていたのは、もつちーだった。驚いたような目でこちらを見つめている。悪態をつきながらも、人に咎められるのはまずいのだろう、早々にトイレから撤退していく柳田さんたちである。「ぞけよ！」柳田さんはもつちーの体を強く押すと、どたどたと廊下を走り去つてしまつた。まつたく、退散だけは一流な人々である。

「のんちゃん、大丈夫か。今のが柳田？」
「もつちー……、来てくれたんだね」

私は、こんなところでももつちーの顔が見られたことが、もつちーが助けに来てくれたことが嬉しくて嬉しくて、それまでとは違つ温かい涙を流していた。

「ロッが、ひょっとしたらとこつことがあるから、コンクールまで面倒を見てやれつて言つたから、念のため様子を見に来たんだけど……。ごめんね、遅かったみたいだ。もつと早くこんな状態に気付いてあげられたら……。ひどい、こんなに赤くなつてるじゃないか。すぐ医療室に行こう。あと、きちんと学校側にも報告しないと。これは立派な暴行だ」

「で、でも……。明日がコンクールの日なのに、あまり大ごとにするのは……」

「馬鹿野郎！ そんなこと言つてる場合かよ……。コンクールなんて関係ない、今、のんちゃんが困つてるんだから、ちゃんと助けてくれつて、声を出さないとダメだ。手を伸ばさないとダメなんだ。助けを求めるのを我慢する理由なんてどこにもない」

「だけど……」

「だけどもヘチマもあるか！」

そう怒鳴つて人を呼びに行こうとするもつちーの、その腕を、私はがしつと掴また。

「のんちゃん……、気持ちはわかるけど」

「お願ひ！」

思つた以上に大きな声が出た。私は内心でハラハラしながらも、懸命に続けた。しゃべるたびに腹に痛みが走つた。

「明日まで……、明日まで待つて。明日のコンクールだけは、無事に終わらせたいの。何事もなく、問題なく、平和なままで……、みんなに心配かけずに。それが終わつたら、助けを、ちゃんと求めるから

「だけどのんちゃん……、そんな体で、そんな声でコンクールなんて、実際、私は行きも絶え絶えといった疲弊度であった。腹へのダメージが大きいので、声を出すだけでかなりしんどい。だけど……、

「明日は、頑張る。本氣で、頑張るから
「のんちゃん……」

もつちーは何も言わなくなり、力なくうなだれてしまつた。ごめんね、もつちー。心配してくれているのに、こんなことを言つちやつて……。

だけど、大丈夫。もつちーの優しさは私にもう十分伝わつていて、これからは、辛い時は絶対にちゃんと抵抗する。もつちーにも相談するし、学校側にも抗議するくらいの度胸はついている。私は、ちゃんと、助けを求める。

だけど、今日は 、今日だけは。

「わかつたよ。頑張るわ、のんちゃん」

もつちーはよつやく、笑顔を見させてくれた。

第4話 うらぶれ案山子は月夜に吠える その9

その日の夜のことである。

明日のコンクールに向けての壮行会も済ませ、のんちゃん応援グッズ（ハチマキ、タスキ、横断幕、メガホンなど）。のんちゃんは予想以上に本格的に作られたそれらを見て引きつった顔をしていた（も無事製作を終了し、ワナビ荘の面々が寝静まつた、日付の変わるべきの時刻。空には丸い月がぽっかりと浮かんだ、明るい夜だった。

どうにも緊張と興奮から眠れずにいた僕は、キッチンに水を飲みに向かつた。すると、開け放した窓の外から、微かに、誰かが歌う細い声が聞こえてくるのだった。

（こんな夜中に、一体誰が、……？）

びっくりするくらいに綺麗な声だ。まるで、テレビか何かでしか見たことがない、ソプラノ歌手のような……。僕は窓からそっと顔を出して覗き込む。洗濯物の干してある、さして広くもないワナビ荘の中庭。そこには果たして、夜空に向かつて美しい歌声を惜しげもなく響かせる、寝巻姿ののんちゃんの姿があつた。月の光を浴びて、彼女の姿は、まるで彫像のように青白く輝き、その光景は、別世界の出来事であるかのようだ、現実離れした美しさを湛えていた。僕は息を呑んで彼女を見つめた。

今力カシの願い事が 叶うならば翼が欲しい
この背中に鳥のように 白い翼つけて下さい
この大空に翼を広げ 飛んで行きたいよ
悲しみの無い自由な空へ 翼はためかせ行きたい

パチパチパチパチ……。

歌がやみ、月夜にはただ一つの拍手が鳴り渡った。のんちゃんは

ハツと振り返り、僕の姿を認めるか、一気にかあっと頬を紅潮させた。

「いい歌だね。かかしの歌？」

「も、もつちーの……、バカ」

「キッチンにまで聞こえる声で歌つてたのはそつちじやないか……。

まあ、でも、おかげで安心した」

僕はサンダルを履いて中庭に降り立つた。足下の土の感触が心地よい。

「こんなに、綺麗な声で歌えるんだもんね……。のんちやんの声だつてわからなかつたよ。考えてみれば、僕はのんちやんが演技をしているのは聞いていても、歌のトレーニングしているところをちやんと見たことがなかつた。そういう点で、僕はのんちやんが声優としてどのくらい通用するのか、本当はちょっとだけ不安だつたんだけど……、この実力なら十分すぎるくらいだよ、のんちやん。今日のことも、全然影響ないみたいだね。自信持つて行きなよ」「で、でも……」

僕に話しかけられて、のんちやんからは先ほどまでの異様なオーラは消失し、すっかりいつもおどおどしたのんちやんに戻つてしまつた。だけど、僕はそんな恥ずかしがるのんちやんの様子に、どこか安心している自分にも気付いていた。

明日の声優コンクールには、課題演技の部と自由演技の部がある。課題演技の部では課題として出された台本を読み上げ、自由演技では三分間という時間の中で、何でもいいから「好きなように、声を使つたパフォーマンスをせよ」ということである。おそらくのんちゃんは、その自由演技で今の歌を歌うつもりなのだろう。なぜ、カカシなのかはわからないけど……。まあ、そこはさきつとのんちやんななりの理由があるのだろう。

「もつちー……」

のんちやんは僕のシャツの胸のあたりをはつしと掴んで、体を預けてきた。僕はドキリとして、どうしていいかわからなくなり、

その場に棒立ちになるしかなかった。「び、どうしたの」僕は震える声で尋ねる。するとんちゃんは、「ううん」と小さな声を出し、ふるふるとかぶりをふった。のんちゃんの分厚いメガネが僕の胸に当たり、「じつじつという感触がした。

「ありがとう。もつちーのおかげで、頑張れる」

「あ、ああ。今日のこと? いや、結局僕には何もできなかつたし……。そんな、お礼を言われることじや」

「ううん、今日だけのことじやなくて。これまでのこと、全部」
そして背中に手を回し、ぎゅっと抱きしめてくるのんちゃん。僕は、頭にかあつと血が昇り、どうしていいかわからなかつた僕は、そのまま、何がなんだかよくわからないまま、彼女の肩に手をかけた。こういうときつて、どうすればいいの、どうすればいいの……。やわらかいのんちゃんの感触が伝わる。僕は、情けないくらいに震える自分の手を、どうにか元にかか、のんちゃんの背中まで回すことができた。

（う……うわあ、あの一人、大人の階段昇つてますねえ……。い、いけないとこ見ちやつてるみたい……、ドキドキします）

（馬鹿つ、声を出さない！ 聞こえちやうでしょー！）

「えつ？」

聞き慣れた声が頭上から流れてきたので、僕は上を振り仰いだ。そこには、庭で抱きあうというこつ恥ずかしい姿をしている僕たちを、しっかりと観察している一人の女の姿が！ 言つまでもなく、それはハルとリョーコであった。

「ああつ……み、見られたつ」

「撤退！ ハル隊員撤退です！ お邪魔してすみませんでした、どうぞごめんください！」

勝手に騒いでぴしゃりと窓の中へと退散する一人。と同時にハル、リョーコの部屋に泊まつたのかよ……。

僕たちはなんとなくバツが悪くなつて、体を少し離したまま目を逸らしてしまつた。まだ腕が少し触れ合つているところがさらに気

まず力を増幅させた。

「……ふふっ」

だけど、少しの沈黙のち、意外にもんちゃんは嬉しそうに笑つたのだった。僕も釣られて笑つてしまつ。そして僕たちは再び目を合わせる。彼女の目には、幸せの光が宿つていた。

「もう遅い。明日に備えて寝よう」

「うん、そうだね……。ねえ、もつちー」

「うん?」

僕たちはワナビ荘に引き返しながら、リョーロたちの部屋までは聞こえないように気をつけつつ、小声で会話。

「私、明日のコンクール、もしダメでも……、いいかなって、思つてる。ここまで色々な事があつて、そして、いろんなつらいことを乗り越えて来られたから……。もう、昔の私じゃなくなつたから。だから、もし明日結果が残せなくとも、それでいいかな、つて」

「ん……。そうか」

僕は頷いた。それでいいんだろう、と思う。誰も彼もが一番にされるわけじゃないけど、努力の過程で本人が変われたなら、その事実の方が、大変なんじゃないか。のんちゃんの姿を見ていると、そんな風にも思えてくるのだった。

その夜、僕たちはリビングのソファで寄り添つように眠つた。もう、僕たちを冷やかそうとする誰かは現れなかつた。僕たちはただ、お互の体温を心地よく感じながら、これまでにないほどの深く安らかな眠りに落ちていつた。

「おい、応援グッズは後ろのトランクに乗せろって言つてんだろ！
これじゃ後部座席をグッズが占領してて誰も座れないじゃねえか
！」

「み、みなさん押し合へし合へしないでください。ドアが外れま
す」

「D-Jは体が大きいから助手席に乗つてよーー 暑苦しくて会場まで持たないじゃないのー！」

「あーもう、あんたたちつるたこから全員降りなさい！ どうせ会場そんなに遠くないんだからみんな電車で行けるでしょうー まつたくもーー！」

「私は体が小さいからD-Jでもすき間に入つて乗つて行けますよー」「み、皆さん落ちついてください。もともと詰めれば六人は余裕で乗れる車ですから…… そつだよね、まー君」

誰がどのセリフの主かお分かりだらうか（と言つて聞こよつとする方はいらっしゃらないと思うのでさつさと先に進めようと思つ）。僕たちはのんちゃんの声優コンクール会場へ向かうためにまー君のゴーストタクシーを召喚したわけであるが、結局全員乗り切らなかつたので、すつたもんだの一悶着しているわけである。

そういうえば、関係ないけどすつたもんだつていう言葉の響き、凄くH口くない？（本当に関係がない。話を盛り上げる気があるのか）ちなみにのんちゃんはとつくなに会場入りしている。本番まであと一時間、きっと今頃彼女は緊張の頂点にいるに違いない。こんな時こそそばにいてあげたい気もするが、今ののんちゃんなら一人での試練を乗り越えられるのでは、という気もするのである。

「さて、全員乗りましたか……。出発しますよ、みなさん……」

まだ少しも運転していないのでせいぜいと肩で息をしていまー君である。無理やり全員を車内に押し込むのに相当の体力を使った

ようだ。まつたくもつて損な役回りである（ペー」と）。

「あ、ちょ、ちょっと待つて！」

「まだ何か……？」

リョー「」の呼びかけに、さすがに疲れた顔でまー君が振り向く。そこにはぎゅうぎゅうと折り重なった四人の姿が。あまり長く振り返つていたい光景ではない。

「あと一人だけ、連れていきたい子がいるのー。ちょっと寄り道、お願ひできる?」

「は……?」

じきじき。

すでに本番まで一十分を切っている。今回のコンクールの出場者は全部で六十人いるということだ。そして、そのうち、私の順番はちょうど十人目であった。全体の数を考えて、かなり前の方である。具体的には九人目より後で、十一人目より前だ（こういう意味のないことを考えてしまうあたり、いかに私が緊張しているかがリアルに伝わるのではないかと思われる）。

しかし……、私はステージ脇からそっと会場を盗み見る。審査員の先生方の他、おそらく出演者の関係者なのだろう、多くの観客が会場を埋め尽くしていた。中にはアマチュアながらに親衛隊がいるらしい子もいるようだ。いいな……、と思いつつ、自分にもワナビ荘のみんながいることを思い出し、ついつい笑顔になってしまう私である。

だが、今はそのワナビ荘のみんなが見当たらない。どうしたんだろ?、もつちーの話によると、全員でまー君のゴーストタクシーに乗つてくると言つていたけど……、ひょっとして渋滞にでも捕まっているのだろうか。それとも、事故にでも遭つたか。すぐにマイナス思考をしてしまう点、私はまだまだ変わっていない、と反省することしきりである。

（だけど……、本当にもうすぐだ）

「じきじき。胸の鼓動は時間が近づくごとに高くなつていけばかり。本番三十分前に比べ、二十分前になるとおよそ一倍大きな音で心臓が鳴っている。この比率でいけば、十 分前にはさらに一倍で最初の四倍、本番のときはさらに一倍で最初の八倍の大きさの鼓動となり、あまりの負担に心臓が止まつてしまいそうだ（こんなことを考えられるあたり、まだ余裕があるので、という見方もできるにはできる。自分を客観的に見る視点は大切だ）

会場が、わつと賑やかになる。ついに一人目の候補の子が、演技を始めたのだ。課題演技のセリフを、よどみなく、美しい声で、すらすらと紡ぎ出す一人目の参加者……。私は「クリと唾を飲んだ。思つた以上にレベルが高い。この戦いを、私はぐぐり抜けていかないといけないのだ。

さて、そんな風に緊張していると、どうしてもトイレが近くなつてしまつ。私は、本番前にもう一度 と思い、ステージ裏をそつと離れて女子トイレへと向かつた。

そして、深呼吸をしながら用を足し、洗面台で顔を洗つて、気合を入れるためにパン、と顔を叩いて、よし、と鏡の自分に向かつて握りこぶしを作つてみたりして 、そこで、私の表情は凍りついた。

「よお、楽しそうにしてんじやん」

柳田さん。

やめて。

お願い、今日だけは。

鏡には、私の背後の個室に隠れていたのだろうか、意地悪い表情で私を睨みつけている柳田さんがはつきりと映りこんでいた。私は、自分の足が、手が、震え始めるのを感じていた。やめて、やめて……、こんな、大事な時に。

今だけは、やめて。

「あたしもアンタが楽しそうにしていると嬉しいよ。ねえ、今日はどんなことして遊ぼうか」

「や、やめ、て……」

「あん？ 遊んであげよ、って言つてるだけじゃん。嫌がることなんて何もないよ。それともー、アンタは、あたしと遊ぶの嫌い……」

「や、やめて……やめて……」

そのとき、私の中で何かが吹っ切れた。

「やめてー！ もう、私に構わないで！」

突然大声を出した私に、面食らつた表情をする柳田さん。私はそのまま、頭の中がうまく整理できないままに、だけばはつきりと、言葉を発し続けた。

「私、もう、あなたに構われたくない！ これが、これがあなたの遊びだつていうのなら、私、あなたと遊ぶのが嫌い！ あなたの遊びに付き合つのが嫌い！ 嫌い、嫌い、大嫌い！ だから、もう私は構わないで、私で遊ばないで！ 私のことは、もう放つておいて！ 私も、柳田さんのことは、もう一度と、構わないからっ！」

「ん……だと、こらア」

柳田さんの表情が鬼のようになってしまった。私はすでに、目に涙をこぼしに溜めていたが、後悔はなかつた。私は、言いたいことを言つたのだ。なにも、悔やむところなんてない。むしろ清々しいくらいの気持ちだ。私は、柳田さんの顔から目を逸らさなかつた。

「てめえ……、黙つて聞いてりや好き勝手言いやがつて。今まで可愛がつて来た恩を忘れたのか、オイ！ こりやあ、まだまだ可愛がり方が足りなかつたみてえだな、おおー？」

柳田さんが私を殴つうと拳を振り上げた。私はギュウッと目を閉じる。後悔はない。ここで殴られても、私は、自分の言いたいことを言つた、自分の主張をまつとうした。誇りを持つて、殴られよ。

しかし、拳は振り下ろされなかつた。

「ああら、アナタ、うちの可愛いのんちゃんを可愛がつてくれたのねん。それじゃあ、あたしからもたつぱりお返しに可愛がつてあげなくちゃねえ」

「だねー。DＪの猫つ可愛がりは半端じやないから覚悟した方がいいよー、いじめっ子さん」

「なつ……、ど、どうして」

柳田さんの拳は中空で、DＪの太い腕にがつしりと掴まれていた。彼の背後には、ハルさんとリョー「さんの姿も。

「み、みなさん……」

また、助けに来てくれたんだ。

私はじわりと暖かい涙が溢れてくるのを感じた。

「お、おめえ、男じやねーか！　ここは女子トイレだぞ！　男が入ってくるんじやねえ、セクハラで訴えるぞ」

「あら、イヤねえ。あたしは男でもあり女でもあるのよ。私のような人間にとつて、性別なんて些細な問題なのオ。イケズなことを言うんじゃないのー！」

そういう問題だらうか。私はいつもの調子のDＪに、思わず吹き出してしまった。

「のんちゃん先輩、もうすぐ先輩の出番です。こっちから行きましょ、急いで！」

ハルさんが誘導してくれた。「うんー」私は溢れる涙をぬぐいながら、伸ばしてくれた彼女の腕をしっかりと握った。温かい、ハルさんの体温が伝わってきた。

「さて、次はエントリーナンバー10、北原乃梨恵さん十八歳の登場です！　声優学校でもなかなかの好成績を収めていると評判の彼女、今回はどうんなパフォーマンスを見せてくれるのか！」

ハルさんに引かれ、私は、私は一気に、舞台の上へと躍り出た。そこで、私はあらためて、自分の置かれた状況に思い至る。

眼下には審査員の先生方の厳しい視線。会場いっぱいには、知らない人々の顔、顔、顔、それらが一斉に私のことを見つめているのだ。それもただ見ているのではなく、私がどんなパフォーマンスを見せてくれるのか、どんな声を出すのか、期待している目、あるいは好奇の目を寄せているのだ。

もし失敗すれば、私は彼らと一緒に失望せることになる。
そのフレッシュヤーが、さつきのトイレの中以上に、私の足を震えさせた。

「どう、どうしよう。

声が出て来ない。何かをしようとしても、体が動こうとしない。
あれほど練習したのに、頭の中でシマコーレーシヨンも繰り返しした
のに。マイクスタンドの元へ歩み寄ることもできない。このままでは、何でできずに終わってしまう。どうすればいいんだら、どうすれば、どうすれば……。

そのとき、はっと思い至りて、私は会場内を見回した。そうだ、
もつちー……。もつちーはどこにいるだらつ。今、このかいじょう
のどこかで私のことを見てくれているのだらつか。まー君は。みち
るさんは。ついさっき見たリョー君やローラたちも、今この私の
の姿を見てくれているだらうか。

そして私は見つけた、横断幕を持つて、ハチマキをして（の
んちゃん）LOVEと書かれていた、さすがに恥ずかしい）、メガホ
ンを持つて私のことを見つめてくれている、彼らを。まー君を、み
ちるさんを、……もつちーを。

そして、もう一人、

「……リカちゃん」

どうして彼女がここに。一瞬疑問に思つたが、すぐにわかつた。
もつちーカリヨー君あたりが、連れてきたのだろう。先生の晴
れの舞台を見せるために、そして私にも、生徒が見てくるというブ
レッシュヤーを『えること』で、ちゃんとした演技ができるよう、気を
引き締めさせるために。あるいは、授業中を思い出させるため、
だらうか。

そうだ、ここは塾の教室だ。

私は思つた。田の前にいるのは、偉い審査員の先生方なんかじゃ
なくて、かわいい生徒たち。私がこれからするのは、何の変哲もな
い、いつもの授業。まるで生徒にわかりやすく言い聞かすようじ、

語りかけるよつこ、ゆつくつと、平常心でしゃべれば何も問題はない。

「エントリーナンバー10番、北原乃梨恵。課題演技を始めさせていただきます」

そして私は、全身の力を抜き、いつもの教室にいる心地で、「授業」を始めた。

（もっちー、どう？ あたし、間に合った？ 終わっちゃった？）

（しつ。今、始まつたところ。ちょうどよかつたね）

（ええつ、あらがのんちゃんなの！？ 別人にしか見えなかつた：

…。あの子、あんなに上手かつたの？）

リョーゴが会場に戻つてくる。ほどなくして、ロードが（手早く柳田という子を絞め上げた上で）会場入りした。こうして、ワナビ荘のメンバーが勢ぞろいしたわけである。

もし本番でのんちゃんがつつかえるようなら、ちょっととくらいた応援のセリフを飛ばしてもいいだろうか、などといろいろと画策していた僕たちだが、現実には、全員が口をポカンと開けてのんちゃんの姿に見入るだけだった。ステージ上で演技するのんちゃんは、まるで女優のように輝いており、その姿はもはや神々しくすらあつた。

課題演技を一度も間違えることなく終え、しなやかな動作でお辞儀をするのんちゃん。直前に急いで連れてきたリカちゃんも「先生、スゴイ……」と言葉が出ない様子だ。

そして自由演技の時間に入った。ここでの演目は基本的に自由であり、これまでの出場者はダンスや歌、既存の作品のセリフの演技や早口言葉など、いろいろなパフォーマンスに挑戦していた。総じてレベルは高い。

だが、のんちゃんは昨日、月の下で歌つていた「翼をください」を歌うはずだ。あれだけの歌声ならば、審査員の先生方も仰天するに違いない。僕はそう思い、期待に胸をときめかせながら、彼女が歌いだすのを待つた。

だが、すうっと息を吸つたのち、彼女が口に出したのは、まったく違うものだった。

「今日は、誠に勝手ですが、この場を借りてお礼を言いたい人

たちがいます。私の人生を、……生き方を、変えてくれた人たちです」

ざわつ。

会場が一瞬ざわつく。こんな自由演技を行つた参加者はこれまで一人もいなかつた。そもそも、これでは単なる語りであり、演技ではない。

だが、そんな雰囲氣にも構うことなく、のんちゃんは淡々と続ける。

「まず、DJ。私がワナビ荘に入った時から、積極的に話しかけてくれて、たくさんいろいろなことを教えてくれて、料理とか掃除の仕方とか、本当に、ありがとう。クラブでのDJも、大好きです。DJは、私にとつての、第一のお父さん、です」

「お母さんでもいいのよ」

DJはそう壇上ののんちゃんに呼びかけ、少しだけ笑いが起きた。「次に、リョーノさん……いつもいつも私に優しくしてくれて、ありがとう。あなたがいたから、私は本当に楽しく、BLや耽美な漫画の世界を知ることができた……」

「公の場でそういうことを言つたな……」

がつくりとうなだれるリョーノである。

「そして、まー君、みちるさん。あなたたちのおかげで、たくさんモチベーションをもらうことができたし、幸せそうなあなたたちを見ていたら、私もたくさん幸せな気持ちになれた。ありがとう。ハルさんも、元気なあなたのおかげでワナビ荘がとっても明るくなつた。あなたたちと漫画を一緒に描いたときは、正直徹夜は辛かつたけど、凄く楽しかつた。あんなに達成感を感じたのは、生まれて初めてだつたかも。本当に、ありがとう」

突然の展開に面食らいつつも、会場は少しずつ静かになつた。こういうドラマチックな展開は好きな人もいれば、くさい、と感じて好まない人もいるだろう。だが、結局はどちらでもいいと思う。ただ、彼女は、僕たちに感謝を告げたかっただけなのだろうから。

「リカちゃんも、私にとつては本当に大切な人の一人。あなたは昔の私に似ているの。あなたと話していると、昔の私と向き合つているような気持ちになつて、それが凄くもどかしいときもあつたんだけど、結果的にあなたのおかげで私はとても大きな成長をできたと思う。リカちゃん、本当にありがとう」

リカちゃんは、ガラス玉のような大きな目を見開いて、瞬きもせずにのんちゃんのことをじつと見つめていた。彼女の名前が呼ばれると、ほんの微かに、こくん、と頷くのがわかつた。

「ついでに、この会場にいないけど、カフカ。私の話を聞いてくれて、ありがとうございます。あなたがいないと、ワナビ荘は、ワナビ荘らしくないよ。いてくれて、ありがとうございます」

そこまで言つて、セリフを一区切りし、のんちゃんは、ふうふと深呼吸をする。

「そして……、もつちー」

最後にのんちゃんは、僕の名前を呼んだ。……さて、いつたいどう来る。僕は思わず身構えた。

「……もつちー、私をお嫁さんに、してくださいー！」

……ガーン。

ざわざわ、ざわざわ。

そう来るか……、そう来るか。僕は周りの好奇の視線を一身に浴びているのを感じた。おいおい、どうするの……。なんだか気持ちだけが僕の肉体から逃避していくような、どこかぼんやりした気分で、人「」とのように僕は思つた。

「もつちーのことが、大好きです！　あなたのおかげで、私は好きな自分になれた！　だから、だから、ずっとあなたと一緒にいたい！　もつちー、私はあなたの、お嫁さんにしてくださいっ、お願ひしますっ！」

最後あたりの助詞の使い方がおかしかつた気がするが、もはやそんなところを指摘する気力は僕には残つていなかつた。

周囲の観客は、僕がどう返事をするかじつと息を殺して見守つて

い。ええい、ままで。もつばつにでもなれだ。僕はメガホンを口に当てる。投げやりな口調で、一言、

「ああ！ 僕も愛してるよーー！ ゼひ僕のお嫁さんになってくれ、のんちゃん！」

ぱち、ぱち、ぱち。

僕がそつ抜けた後に、まばらな拍手がどこからともなく起つた。ぱちぱちぱちぱち。やがてそれはさざ波のように広がつていつた。ええい、くそつたれ、恥ずかしいつたらあいつやしない。僕は思わずその場に顔を隠してうずくまつてしまつた。

「……嬉しい」

壇上ではのんちゃんが口を抑えて涙をいっぴに溜めている。あー、泣くな泣くな、ますますどうしていいかわからなくなるじゃないか。こんなに恥をかかせやがつて、あとでおしおきが必要だな。僕は思つた。

しかしのんちゃん、すぐに姿勢を正すと、一呼吸と一つ咳払いして、

「……それでは、みなさんへの感謝の気持ちを込めて、歌います。

『翼をください』

ブーッ。

そこで演技終了のブザーが鳴つた。出演者は速やかに退場。次の出演者が順番を待つて、原則として延長は許されないのであつた。

ぶーぶーと観客からブーイングが跳ぶ中、司会進行は平然として「それでは、エントリーナンバー11番」と次に進めてしまう。そしてやがて、何事もなかつたかのようにコンクールはその後も流れていつた。

さて、のんちゃんのパフォーマンスは成功だつたのか、失敗だつたのか。それは、見る人によつては成功とも映つただろうし、外しているとも映つただろう（小説だとこういう場面は感動的だが、現実においてはなかなか賛否両論な部分がある、というものである）。

まあ、いざれにせよ、のんちゃんはやつたことがやられたので満足
そうな表情だつたが。

後で聞いた話だが、この後、のんちゃんは舞台裏で、緊張が一氣
に解けたせいでへなへなとくずおれてしまい、そしてそれどころか、
その場で眠つてしまつたというのである。どれほど勇気を絞り出
してあれだけのパフォーマンスをしたといふのか、察せられて余り
あるというものだ。

まったくもつて、本当に、可愛い奴である。

「声優学校を辞めた！？」

それからしばらくして 本当にじぱぱらくして、どのくらいじぱぱらくかと云つて、その次の春が巡るくらいまでじぱぱらくして、僕は驚くべき知らせを聞いた。

僕の恋人 すなわちのんちゃんが、声優学校をやめて、教育大に入学し直したのだという。

「うん。私、すっかり教育の道に目覚めちやつて。私、これから頑張つて、学校の先生になるつもり」

一昔前からは考えられないよつなしゃつきりとした姿勢、ハキハキとしたしゃべり方である。ちょっとネクラな頃ののんちゃんも好きだった僕からすれば、ほんのちょっとだけ、残念ではあるのだけれど（贅沢である）。

あの日 、のんちゃんが出場したコンクールでは、残念ながらのんちゃんは賞を受賞することはできなかつた。まあ、自由演技で声優としての演技を何ら発揮できなかつたのだから、当然と言えれば当然の結果である。だが、のんちゃんは少しも暗い顔をしなかつた。にこにこと笑つて 、そのまま、ワナビ荘に戻つた僕たちは夜通し打ち上げというののんちゃん騒ぎをし、近所からのひんしゅくを買つた（本当にじめんなさい）。

そして 、のんちゃんは塾の仕事に今まで以上に打ち込み、リカちゃんとはすっかり師弟関係を築き上げ、その結果、リカちゃんは、別の学校ではあるけれど、学校のカリキュラムに編入し、不登校を脱する決意をしてくれた。そして、のんちゃんはそれをきっかけに、教育という仕事に心からやりがいを感じ始めたのである。

「声優は 、いいのか。夢だったんじやあ」

「うん。今でも、ちょっとだけ惜しいかな、っていう気持ちはある。だけど、今の私には新しい夢ができたから」

桜舞う季節のこと。のんちゃんは、ぴしつとしたスースを実に纏い、教育大学でしつかりと教育の勉強を受けることになった。塾での活躍を見ていれば、彼女がいすれいい先生になるであろう、ということは言つまでもなかつた。

「ねえもつちー、良かつたの？」

「うん？」

DJとコビングでせんべいを食べながら、僕はのんびりと話している。テレビでは、新生活応援フェア、だと、入学・就職応援セールなどの広告が次々に映し出されている。

「のんちゃんがここを出でていく、ってこと、止めなくて。最近ここ意外にも、専門学校でもしつかり友だちを作ったみたいだし、おそらく新しい教育大でもたくさん友だちを作るわよ。のんちゃんすっかり垢抜けて可愛くなつたから、男の子もたくさん寄つてくるかも。不安じやないの？」

「……そりやあ、そんなこと言われたら不安にならざるを得ないけどよ」

僕は口を尖らせる。今のリビングには一人以外は誰もいない。バリバリ、とせんべいをかじる音が無駄に広い部屋に響く。

「この春からリヨーロたちも出て行つちやうわけだし、寂しくなるわねえ」

「でも、新しい借り手も見つかつたんだろ？ なら、すぐにまた元みたいにワイワイやれるようになるよ。またいいワナビ仲間を探せばいいじゃん、DJならできるだろ。僕だつて、まだしばらくはいる予定だしさ」

「そうよねえ、あんたもいすれはいなくなるのねえ、はあ……」

いつになくセンチメンタルなDJである。まあ、この歳にもなれば色々あるのだろう。こういうときは黙つて聞いてあげるのが大人というものである（生意氣）。

「もつちー！」

そういうしてこるうちに、玄関先から元気な声が聞こえてきた。

僕の、大好きな人の門出である。僕も湿っぽい溜息なんてついていないで、張り切つてやらねばならない。

「じめんね、引越しの手伝いまでさせちゃつて……。入学式までに済ませたいとか、ちょっと無茶だつたかなあ」

「いや、こういうのはできるだけ早くやつちやつた方がいいんだ。

大丈夫、だいじょうぶ……」

そう言いながらも運んでいる筆筒の重さに思わず腰を屈めてしまった僕である。「あらもう、何なの。情けないわねえ」と笑う口であるが、奴から見ればたいていの男は情けない。

まあ、そんなこんなで、僕たちは新しい生活に移行していくわけである。僕は、愛する人と共に、これからもワナビの道を歩んでいくことだろう。……すでに先輩となってしまった、まー君やリョーゴの背中を追いかけながら。

さて、こんな風にして春といついつつけな季節にして、なんとなく綺麗に終わるそつなこの物語であるが、実は、もうひとつだけ続くんじやよ。

そう、まだ大事な人のエピソードが描かれていないじゃないか。皆さま、お忘れどうか、だとしたら僕は嘆かざるを得ない。ワナビ荘の登場人物たちに少しでも愛着を持つて下さった読者諸兄ならば、おそらく、最後の話は誰のためのものか、おおよその目測はついていることと思う。

ぜひ、期待しながらページをめくつてほしい（かつ、サブタイトルはまだ読まないでほしい）という無茶な注文をしてみる。わがままな語り部である）。

「ワン

お前じゃねえよ。

第5話 おやすみD」。その1

月日が流れれば個人の世界は否応なしに変化していくものである。付き合う人間、住む場所、する仕事、趣味、読む本、見る番組、聞く音楽、寝るベッド……。習慣が人間を作り、環境が人間を変えてゆく。

ずっと同じ環境に人は長くいられない。それは、僕がさして長くない人生の中で、それでも身に染みて感じた、現実的な教訓だった。そして、僕はその長くはいられない環境の中で、青春をしていた。

得難い友たちと、一生のうちに一度とは訪れないような、素晴らしい青春を送った。

のんちゃん、D」、リョーロ、ハル、まー君、みちるさん、ついでにカフカ。

彼らと過ごした日々は、何物にも代えがたい僕の一生の宝だった。しかし、そんな宝物のような、愛おしい日々こそが、無情にも目の前をあつという間に過ぎ去っていき、そして引きとめることのできないものであると、僕はそれをはつきりと失つてしまつてから気付いたのだった。もとはといえば、早く作家になつて世に出て、「ワナビ荘」を出ていくことが僕らの共通の目標だったのだから、それは当然と言えば当然の流れであるの、だけれど。

気付けば。

僕一人が、「ワナビ荘」に取り残されていたのである。

「だからあー、俺はそういう努力とかを正当化するのが嫌いなんスよね。別に努力がいけないわけじゃなくて、努力そのものを評価して、みたいな風潮? あれが我慢ならないんス。なんていうか、どんな分野にしても結局は結果出してナンボ、だつて思うんですけど「ワナビ荘」のリビングである。僕の目の前にいる彼は、黒川といつ

て、まー君がいなくなつた後に入つてきた新しいワナビ荘の住人だ。今も、ギターを片手に持つてかき鳴らしており、夢はシンガーソングライターだそうだ。それはけつこうな事なのだが、朝でも昼でも関係なく歌つて弾いてという生活なので、はつきり言つて相当ひつるさい。イライラする。この音から逃れるためにワナビ荘を出ることすら考えてしまうほどだ。

「それなら結果を出せばいいじゃないか……。そんなことをここでグダグダ言つても何も始まらないぞ、それに努力はしないよりした方がいい、というだけの話だ。努力を認めるかどうかは個人の価値観によるものだ」

「うーん、優等生な解答つすねえ。正直、つまんないス」

僕は、よっぽど「君と会話している方がつまらないよ」と言つてやろうかと思つた。僕の方が先輩に当たるので、一応自重はしたけれど。

まー君、のんちゃん、リョー「が出て行つて、ハルやみちるさんも出入りしなくなつてしまつてから、ワナビ荘の雰囲気はがらりと変わつた。まー君の代わりに黒川、リョー「の代わりに東田、のんちゃんの代わりに仁科という新しい「ワナビ」たちが入居してきたのだが、どうも、正直に言つて、僕は彼らと反りが合わなかつた。

東田は画家になりたいワナビだ。分厚いメガネをかけたいがぐり頭の青年で、毎日部屋にこもつて、キャンバスと向き合つている。彼が通るといつも油絵の具のにおいがふんふん漂つてくる。一応料理や掃除当番は無難にこなすのだが、それだけなのである。積極的にコミュニケーションを取るうとしてはこないし、基本的に無口で、何を考えているのかわからない。僕が話しかけても知らん顔でいることが多い。「今時の他人に無関心な若者」というやつかもしけない。

そして仁科は、芸能人になりたい女性のワナビであった。子どもとともに子役として映画に出演したことがあるとかで、それ以来「女優」を肩書にしているというが、よく聞くと出演作はそれだけの

ようだつた。しかも、その作品は興行的には「けでいるので、あまり出演した面みもない。

だが、本人はそこでちやほやされてしまい、さらに運悪くもそれが当たり前だと誤解してしまったのだろう、いわゆる女王様体质になってしまったのだ。顔が綺麗なせいで周囲の男子からほよくモテたし、女優業はできずとも周りにちやほやされながらここまで来てしまったため、勘違いから覚めなかつた、覚めるチャンスの得られなかつた不幸なケースだ。ワナビ荘でも「ちょっと、靴を揃えておいて」だとか「私の分の夕食当番、誰か代わつてよ」などとワガママを言つては誰にも相手にされず、機嫌を悪くしている。

まあ、そんな感じで、ワナビ荘の中は、それまでのメンバーの頃とは一転し、一気に雰囲気が悪くなつてしまつたといつわけである。

しかし、そんなメンバー相手にも、Dの態度はそれまでと全く変わらなかつた。僕はこれには素直に感服した。Dくらいの年の人から見ると、前のメンバーも今のメンバーも、同じ「子ども」とでも映つてゐるのだろうか。いざれにせよ、Dは僕が思つていた以上に器のでかい男らしいと知ることになつた。

「ほーら、仁科、何やつてるの。脱いだものをその辺に置いといたらダメ。きちんと洗濯籠にまとめなさい。ほら、下着もちゃんと整えて。女の子でしょ」（Dは女の子の裸を見ても眉一つ動かない強者だ。単に彼から見たら子供もの裸も同然だからなのか、それとも異性に興味がないのか。おそらく両方だ）

「黒川、今日は食事当番でしょ。例外は許されないわよ、たとえ音楽の神が下りていようが何だろうが、食事の準備は欠かさずやらないといけないの。さもないと、音楽の神はあるか、グレートスピリッツにまで見離されちゃうのよ。食べる、というのは他社の命を食らう行為。そしてグレートスピリッツは全ての命の根源なのよ」（わかるよくなわからないような文句だ。さしもの黒川も、Dお得意の「グレートスピリッツ」が出てくると、煙に巻かれざるをえ

ない）

「東田、あんたはちょっと愛想が悪過ぎるわ。芸術家には愛想はない、っていう方針なのかもしれないけれど、せめて同居人に対してはきちんと受け答えができるようにならないといけないわね。ようじ、あとでじっくりと会話の練習よ。今夜あたしの部屋にくるよーに」（この後東田がどうなったか誰も知る者はなかつた……）

（嘘）

かように、ロッはなかなかに態度の悪い　というか、かなり自分勝手な入居者たちに対しても根気よく説教し、叱り、語りかけ、改善させようとした。だが、彼らはそれをうつとうしがつたり、無視したり、いざれにせよ眞面目に聞こうとするものはほとんどないなかつた。

僕はそんな光景を目の当たりにして、なんだか悲しくなつてしまつた。こんなにも優しいロッの好意を素直に受け入れられないだなんて、なんてつまらない連中なんだろう。こいついうとき、のんちゃんやリョー、ロッやまー君なら、どんな風に反応しだろう、ここからどんな面白い会話が生まれていただろう、ここからどんなドラマが生まれていただろう　、そう夢想せずにはいられなかつた。明らかに以前のワナビ荘の住人たちの方が、クリエイティブな才能を携えていた、と思う。そういうことは、こいつした日常の一ページ、会話の端々にもうががえるのだった。彼らは、生活の中野一瞬一瞬に、その口から放つ一言一言に、僕たちとの交流のひとつひとつ、その全てに　何かを生み出していた。

僕の、前の住人の方が良かつた、という想いは、口に出さずとも態度の端々には現れていたのだろう、ある日の夕食時、僕は些細な事で黒川と喧嘩になつてしまつた。

「俺、いつも思うンスよね。どうして望月先輩は俺たちに対するとき、不満そうな顔ばっかりするのかー、って。気付いたんですけど、ひょっとして、悔しいんじやないスか？」

「悔しい……？」

テーブルを挟んでの会話である。僕のことを好意的に思つていな
いらしい黒川が、妙に突つかかってきたのだが、僕は不覚にもそれ
に乗つてしまつたのだ。虫の居所が悪かつたせいかもしれない。

「いやー、だつてそうじゃないスか。前にここにいたメンバーは、
ほとんどが夢を叶えて、小説家になつたり漫画家になつたりしてデ
ビューして出ていったんでしょう？ 望月先輩の彼女さんも新しい
夢を見つけたわけだし。そうなると、作家になりたいっていうレベル
にどどまつて、未だにくすぐつてゐのつて先輩だけじゃないですか。結果、俺たちみたいに一周り若い連中と一緒になつちまつて。

悔しいンじゃないスか、内心」

「……てめえ、何をわかつた風な口を聞いてるんだ」

僕はガタンと椅子から立ちあがる。ただでさえ会話もなく険悪だ
った食卓がさらに悪い方向に凍りついた。仁科はこちらをおびえた
ような目で見ているし、東田はいつも通りのまつたくの無反応で黙
々と食事を続けている。

「僕は、あいつらと一緒に作品を作つたり、夢を語り合つたり、イベ
ントに出たり、そりやもう、いろんなことをした。あいつらがい
なかつたら今の僕はない。あれだけの奴らだ、僕より先にデビュー
したところで何の不思議もないし、僕があいつらにそんなに単純な
嫉妬感情を抱くわけはない。……僕たちはお互いに尊重し合い、高
め合える仲間だつたんだ。お前たちと一緒にするな」

「それこそ失礼ッスねえ。先輩こそ、俺たちの何を知つてゐるつてい
うんですか。謝つてくださいよ。それに、そんなにいい仲間たちが
いたんなら、そいつらについて出ていけばよかつたじゃないスか。
どうしてここに居続けるんです？ ……ああ、ひょっとしてあれス
か。夢を叶えられなかつた者同士、D-Jさんと傷の舐め合いつてと
ころですか」

「……いい加減にしろこの野郎！」

僕はテーブル越しに黒川に掴みかかつた。お互い我慢の限界に來
ていたのだろう、「上等つすよ、やつてやうじやないすか！」と

黒川も応戦して食卓は滅茶苦茶である。料理は床に落ち、食器が次々に砕けた。「きやあつ」と仁科が悲鳴を上げる。

「何やつとるんじゃクラア！」

キッチンからD君が鬼のような形相で現れた。掴み合つてもなんどりうつ僕たちを認めるD君は容赦なく僕たちの頭に鉄拳を食らわせた。ゴツン、という嫌な衝撃が頭の中に走る。激しい眩がした。

とりあえず僕たちを大人しくさせたD君は状況を見て、何が起きたか簡単に把握したようだ。はあつと溜め息をついて、

「……あんたたち、もうちょっと仲良くできないの？ アタシは悲しいわ、ガキのケンカの仲裁役なんかやりたかないのよ。口はみんながそれに夢を叶える場所なのよ。足を引っ張り合っている時間なんて一秒でもあつていいの？」

「…………つ」

僕は何も言い返せずに、黙つて俯くことしかできなかつた。「あーあ、つまんねえ」そう言つて部屋に引っ込んだ黒川はやけくそ様にギターをかきならし始める。僕はひとり、割れた食器や料理を片付け始めた。かちや、かちやと情けない音が食卓に響いた。

仁科と東田は、そんな僕を薄気味悪そうな目で見ていただけだつた。手早く自分の分の食事を済ませると、さつやと自室へ戻つてしまふ。こういうとき、のんちやんたちだつたらきっと片付けを手伝つてくれたのにな……、などと過去のメンバーを思い出すと、自分のみじめさが余計に際立ち、涙がにじんでくるのだった。

力チヤ。

そのときようやく、一人だけ僕を手伝つてくれる大きい手が横から差し伸べられた

「手伝うわよ」

D君だった。D君は僕に笑いかけると、ぶちまけられた自分の作った料理を、嫌な顔一つせずに、新聞紙で包むと「!!袋に放り込む。「D君……」

そこまでが限界だつた。僕は、情けない、恥ずかしいと思ひながらも、ぽろぽろと涙を流してしまつた。

D.Jは何も言わずに、僕の頭にやさしく手を置いてくれた。大きく、無骨で、温かい手。僕はその手の大きさになんだか安心してしまつて、気が済むまで声を殺して泣いた。心中には、いつかのワナビ荘の、わいわいとした賑わいが、彼らの声が、何度も繰り返し響いていた。

第5話 おやすみD。その2

「それは、たぶんもっちーが変えて行かなければならぬ状況なんじゃないかな。ある意味で、試練であるとも取れるね」

「試練……」

「うん。かつて私が直面したいじめ問題と同じようなね……。あ、もっちーそのソーセージおいしそうだね。一個もついていい?」

「一個つて、一個しかないじゃねえか。おいコラ、勝手に食うな」
ファミリーレストランでのんちゃんと食事しているある昼下がりのことであった。もう僕とのんちゃんは恋人というか、ずっと一緒にいる、ある意味で夫婦のような状態であったので、せっかくのデートも新鮮味がない。もつとも彼女と会うだけで、「いつもの日常」の幸せを再確認できるので、それだけで僕は心から満足なんだけどね（ノロケ）。

「その子たちは、まだワナビ荘に入り立てで、私ももっちーより一周り年下の後輩に当たるわけだよね。そうなると、やっぱり子供もなのは仕方ないよね……私が入ったての頃、そつだつたように。だから、一緒になつて喧嘩してるようにじや、やっぱダメだと思つんだ」

「まあ……、そりやあそつなんだけどさ」

言しながら、ああ、のんちゃんは本当に立派に自分の意見を言えるようになつたな……と、心のどこかで感心しながら、一方で寂しくも感じていた。なんだか、僕がいなくてものんちゃんは一人でも生きて行けるようになつてしまつた、そんな気がして。

「まず、なんでその黒川君だけ、その子がもっちーに突つかつてくるようになったのか、考えないと。本当にもっちーに原因はないの? 他の、仁科さん、東田君についても同じ。どうして彼らが馴染めないのか、彼ら同士が仲良くできないのか。もっちーがやつたこと、もっちーの言動のひとつひとつを思い出してみて」

「僕の、言動……」

なんだろう。僕は彼らに、話が弾むようにいろいろ話しかけたり、それなりにアクションを起こしてきたつもりだし、彼らを怒らせたりするようなことは言つてはこなかつたつもりだけど……、どうして、

「そう、それじゃないかな」

「うん?」

僕が列挙したいいくつかの行動を、のんちゃんは鋭く指摘する。
「要するにね、どうしてもおつちーは先輩だから、上から目線になつちゃうの。意識していなくてもね。それが鼻につくっていう後輩がいても、おかしくないよ」

「上から目線……」

言われてみれば……そういう節も、あるよつな、ないよつな。自分で気付いていないとことは、それだけ重症なのだろうか、

僕は。

「彼らはね、きっと、『自分が一番』って思つてしまつ、思いたがる年頃なんだと思うの。根拠はないけど、万能感、全能感が全身を支配して突き動かす、というよつな、そういう時期。だから、上から説教されたり、自分のやつていることに水を差されたり、つていふことを何よりも嫌うの。私も専門学校時代、周りの人たちを観察して感じたことだから、わかるんだ」

「万能感、か……。まあ、わからなくもない気持ちだけど。じゃあ僕はどうすればいいのかな。彼らを持ち上げる? 彼らの言つことを全面的に肯定してあげればいいんだろうか」

「その必要もないよ。そういうのは一歩間違えれば『媚び』になつちやうから、逆に相手から嫌われる可能性がある」
のんちゃんは人差し指をピンと立てる
「だからね、『何もしない』っていう選択肢もあるんだよ

「『何もしない』?」

「うん、そう。『何もしない』。相手の言つことに正論で対抗する必要もなければ、積極的に賛同する必要もない。要は、適当に流す

んだよ。ただ、相槌はちゃんと打つてあげてね。それだけで、相手は満足する。話を聞いてあげるだけで、そういう人とは仲良くなれる

る

「つまり、真剣に応えない、ってこと?」

「ある意味ではそういうこと。たまに人間付き合いにすゞく真剣になつちやつて、相手の言つこと全てに全身全霊で応えようとする人がいるんだけど、それは無駄なエネルギーだよ。人間関係、ある程度の適当さが必要なんだよ。人を嫌いになつたり好きになつたり、どうしても他人が気になるもんだけど、だからこそどこかで『別にどうでもいいんだけどサ』って思うべきなんだよ。その方がストレスが溜まらないし、案外うまくいく

「……それって、のんちゃんが見てる生徒のこと?」

「……うん」

のんちゃんはアルバイトとして、今でも塾の講師を続けている。リカちゃんは今ではすっかり学校に馴染んでおり、塾はやめてしまつたということだ(ときどきのんちゃんに会つてに来るとは聞いているが)。

だが、学校で問題を抱えて不登校になつた子や、勉強についていけなくなつた子は、当然次から次へと塾へ入つてくる。のんちゃんはその一人一人に本当に真摯に向き合い、彼らの声に耳を傾け、そして彼らの問題に「うまく」対処しているのだった。

「なるほどねえ、確かに子どもならムキになりやすいし、いちいち相手に突つからないと気が済まないつてこともあるかもしけないなあ。僕たちものんちゃんを見習わないとなあ。いつの間にか、すっかり頼れる先生らしくなつちやつて。僕ものんちゃんの生徒になりたいぐらいだぜ」

「もつちーだつて、私から見たらまだまだ生徒みたいなもんだよ」

「……さすがにそこまで言わるとへ口む」

しかし、のんちゃんの言つことも間違ひなかつた。僕は先輩として、もうちょっと「聞き上手」にならねばならない。そしてそのい

い例がDっだわつ。真剣になりすぎて、相手を否定するようなことをせずに、うん、そう心がければ、ひょっとしたら僕も「いい先輩」になれるかもしれない。

「……もっちー」

そんなことを考えている僕に、ふと、何かに気付いたかのよう、のんちゃんが話しかけた。

「あのころのワナビ荘……、懐かしんでるの？」

「……、ああ」

のんちゃんが少しだけ寂しそうに言った言葉に、僕は頷いた。確かに、僕はあの、今はもうなくなってしまった「ワナビ荘」の姿を、どこかで追いかけ続けているかもしれない。

「私も気持ちはよくわかるよ。あの頃のワナビ荘、すっごく楽しかったもんね。もっちーがいて、Dっ、まー君、リョーコさん、ハルさん、みちるさん、みんないて……、毎日がお祭り騒ぎみたいだったね。騒がしくて、ゆっくり落ちつくないうな暇もないくらいに騒がしくて、最初はそれがちょっと疲れちゃうこともあったんだけど、だんだんそれがないと寂しいくらいになってきて……。今の私も、少し寂しいと感じてる。一人暮らしぶ、誰もいないもん。もっちーがよく遊びに来てくれるし、その点では昔の自分なんかとは比べ物にならないくらい恵まれてる、っていうのはわかるんだけど……。だけど、やっぱりあの頃のどんちゃん騒ぎが、懐かしくなるよ」

「……ああ、僕も、同じだ」

すっかり静かになってしまったワナビ荘の食卓。いま一つ弾まない会話。なんとなく、ギスギスした関係。昔のワナビ荘との落差が余計に、僕の心に影を落としていることは確かだ。

「だけど、仕方ないんだよね」

「ん」

「いつまでも同じ環境つていうのは続かないから。新しい環境の中で、自分の立ち位置をしつかり作って、また新しい仲間と頑張つていかないと……。そりゃもちろん、全てがうまくいくわけじゃない

けれど、「うまくいかないなりに、環境に適応する努力をしていかないと、そこにいる人たちに悪い、と思う」

「……そうだね」

新しい環境。

以前のそれがあまりにも心地よかつたせいで、どうしても不満が溜まってしまう毎日だけど、だからといってそれを態度に出しては彼らにも失礼というものだ。

人はみんな、違う。

いいところもあれば悪い所もある。

前のメンバーも、今のメンバーも。

だから、頭を切り替えて、新しい付き合い方を考えて、前に進まないといけないんだ。

「ところでのんちゃん」

「ん？ 何？」

僕の呼びかけにつっこり笑って答えるのんちゃん。

「……今日、のんちゃんち行つてもいい？」

「言つと思つた。いいよ」

理屈では割り切れても、気持ちが寂しいのはまあ、仕方がないと いうものだ。

このくらい、甘えるのはご容赦いただきたい。のんちゃんは僕の 恋人なんだし、放置するのも悪いしね。

……ノロケに関しても、うん、ご容赦いただきたい。もうなるべく書きませんから（ペコリ）。

第5話 おやすみD」。その3

「望月先輩、すみませんっした。ちょっと自分、調子に乗ってたところあつたッス。許してっさい」

その夜ワナビ荘に帰った僕は（と、のんちゃんの家に行つた場面を華麗にスルーしつつ）、突然謝つてきた黒川に面食らつてしまつた。

「あ、ああ……。あのときは僕も悪かったよ、反省してる」

言いつつ、D」にこつてりしほられたのかなあ、と想像したりした。しゅんとしょげており、いつもの霸気がない。帰つたらしつかり目前の相手に立ち向かうぞお、なんて気合を入れていた僕からすれば、なんだか拍子抜けな気持ちにもなる。

「まあ、もうちょっと君の話をちゃんと聞いてあげればよかつたなあ、なんていう風にも思つてゐる。そんなわけで、なんなりと話してくれ、黒川君。僕が君の話の良い聞き役になろう。どんな意見でも、突っぱねたりはしないつもりだ」

「え、い、いや、そういうのはいいス。別に」

困つた顔で僕の申し出を断る黒川であつた。ううん、せつか歩み寄るチャンスだと思つたのに。僕が残念そうにしていると、仁科が頭に手をやつて溜め息をついていた。彼女の反応を見るに、なんだか僕自身が残念なヤツになつてゐるようだつた。

「あらあら、帰つてたの？ もつちー。ただいまくら言いなさいよ」
そう言いながらエプロン姿で、おたまを持つという伝統的スタイルでキッチンから登場するD」。その脇には、今日の食事当番の東田が、げつ、なんかD」の服のすそを掴んでるし。

「あらあ、東田くん。服を掴まないで、つていつも言つてるのにい。もづ、本当に甘えん坊なんだからあ」

ぞわぞわと嫌な感じに全身が粟立つ僕である。……ま、まあ、D」はD」で新しい住人と仲良くなつてゐるようで、よかつた、よか

つた。

「そうだ、もつちーにお土産があるのよ。見て驚かないでよ、じゃーん！」

「あつ、それは……」

それは一冊の本だつた。一冊は、ついに出版されたまー君とみちるさんの小説。そしてもう一冊は、ハル リョーコの手からなる、初の単行本であつた。

「Dー、それって何？ 道塚魔太郎にハル リョーコ……。誰？」

「HーJの、前の住人たちよ」

Dーはとても嬉しそうな笑みを浮かべていた。僕はDーの手からそれを受け取ると、なんだかとても愛おしいものを手にしたような気がして、その表紙を思わず手で撫ぜてしまつのだった。タイトルは「ゴーストタクシーにつつてつけの夜」。夜道を走るタクシーを中央に据え、その窓に驚いた女の顔が写つてゐる、そんなホラー小説らしい構図の表紙だつた。

ハル リョーコの作品は「マリー・ゴールドの少女」。あの日、ワナビ荘スタッフ総出で描いた例の作品を連載用に描き直したものだつた。マリー・ゴールドの花言葉は「嫉妬」や「可憐な愛情」だつたな、などと僕はリョーコの話を思い出す。

「……やたらと嬉しそうな顔をするんつすね」「ん？ ああ」

僕は黒川が怪訝そうな顔をしているのに気付いた。

「普通、こうこうときつて、確かに嬉しいかもしけないけど、同時に嫉妬して、『くつそー、俺も！』って感じになると思つんスけど……。望月先輩の場合、それがないんスか」

「もちろん、ないわけじゃないよ。だけど、正味な話、あいつらに嫉妬してもしようがないんだ。あいつらは嫉妬するのも馬鹿らしくなるくらい、ぶつ飛んだ奴らだつた」「へえ……」

興味ありそうな表情で返事をする黒川。僕はリビングのソファに

座り、本をパラパラとめくる。彼らによつて丁寧に綴られた文字、

絵、それらが僕の視界を、撫でるかのように優雅に通過していく。

一ページ一ページに、彼らの息遣いが籠つていてるような気がした。

なんだか、すぐ近くに彼らがいるかのような錯覚すら覚えるほどに。

「そうねえ。あの子たちは確かにぶつ飛んでたわあ。私が今まで出会つてきた歴代のワナビ荘住人たちの中でも、ぶつちぎりだつたかもね」

「へえ。DＪがそう言つほどにねえ……。どんな人たちだつたんですけど」

「ハル リヨーノの漫画をめぐりながら尋ねる仁科。そういえば、彼女は少女漫画が好きだとか、いつか聞いた気がする。

「そう言えば、僕も、DＪがここの大冢始めてから、どんな人たちが出入りしてきたのか、あまりちゃんと聞いたことがなかつたなあ」「これまでにどのくらいの人数が出入りしてきたんですか？」

「そうねえ、あなたたちを含めれば、ざつと五十人つてところかしら」

「五十人！？」

これには僕もびっくりした。そんなにもの人々がここに……。といふことは、あれほど長い間一緒にいたかのように思つていた僕たちメンバーも、DＪからすれば、ほんの一時期一緒に住んだ入居者たちの一部にすぎなかつた、ということか。

「今までどんな人がいたんです？ 一番凄かつた人はどんな人ですか？ その人たちって今ではなにやつてるんです？」

昨日まであんなに機嫌が悪かつた黒川が、今では興味津々である。人の心というのをわからぬものだ。

「ふうむ。そうねえ、どこから話そうかしら」

ソファにどつかりと腰かけるDＪ。そして彼につき従つてすぐ隣に座る東田。いつの間にか、仲の悪かつたはずのワナビ荘の住人たちは、DＪを中心に、輪を作りつつあるのだった。DＪおそるべし。

「これは、遠い遠い昔のお話。まだ私も若くて、右も左もわからな

い、世間知らずのこりだつたわ。私は突如事故で亡くなつた叔父の土地を譲り受け、このワナビ荘の経営を始めたの」

ローハ語り始めた。その、優しく、聞くものを安心させるような語り口で。

「眠くなつた人は自由に部屋に帰つて寝てくれていいわ。でも、今から話すことは、とっても面白いわよ。このワナビ荘に住んだ中でも、とびっきりおかしな子だとか、天才肌の子だとか、はたまたとんでもないトラブルメーカーの子だとか、そういう話がいっぱいあるんだから。もし良ければ、ゆっくり腰を据えてお聞きなさい、我が家が子たち。あたしがこんな話することなんて、本当に滅多にないんだからね」

第5話 おやすみD。その4

飛行機を下りると、東京の暑さがむわっと全身を包んだ。すぐに空港内へ向かう冷房の効いたバスに乗り込むのだが、日差しのつゝとしさはバスの中でも防げなかつた。

なぜ東京は、こういう嫌な暑さなのだろう。僕は襟をぱたぱたせながら空を仰いだ。ついさっきまでいた沖縄では、確かに肌を焼く日差しもきつかったし、湿気もそれなりにあつたが、なぜかこういう、全身を痛めつけられるような暑さではないのだ。理由はわからない。悪いのは、東京の空氣かもしれない。

僕が空港ビル内に入り、荷物を受け取り到着口から出ると、そこには笑顔の妻が待つっていた。

「おかえりなさい。ずいぶん荷物が多いのね」

「これから僕が『ワナビ荘』を経営するわけだからね。いろいろとアパート経営に必要な本とかを読んでたのさ。それにしても、東京は人が多いよね。早くも那覇に戻りたくなってきたよ」

「私はいつそ沖縄に住んでもいいんだけど……。あなたがこっちに住むつて、決めたんでしょう？」

「ああ」

僕は気持ちを奮い立たせるようにぐいっと前を向いた。

「僕は、作家になるんだからね」

まだ若かつた僕は妻と同時に独身寮「ワナビ荘」の経営を始めた。ここがワナビ荘と呼ばれる理由は、夢を持つ若者たち、「なりたいもの」がある若者たちが集う場所だから。そんなところだつたと思うが、まあ、それはある意味で後付けであり、実際には単なる偶然によるものだった。

寮の経営を始めたとき、部屋は全部で四つ。そしてそこに住んだ若者全員が、たまたま「なりたいもの」がはつきりしていたのだ。

一人は作家、一人は漫画家、一人は舞台俳優、一人はデザイナー。それぞれが夢に向かつて努力を重ねる、そんな場所にこの寮はなつていった（一応付け加えておくと、漫画家とデザイナー志望だった若者は夢を叶え、作家と舞台俳優だった若者はそれに別の分野で現在は仕事をしているが、それぞれに充実した人生を送っているであろうことは間違いない）。

もつとも、若者は皆何かしら「なりたいもの」を持つているのかもしれない。理想の自分というものを、持つているのかもしれない。本当に無差別に入居者を選んでも、けつこうな確率で、その寮は「ワナビ荘」となるのではないか。僕はそんな風に思っている。

「wanna be」。なんとも良い響きではないか。

ワナビという言葉は、差別的ニュアンスで使われることもある。時には皮肉な意味を込めて、呼ばれることがあるそうだ。

だが、そんな風な冷たい視線を向けられたからと言つて、僕たちワナビがそれを気にする必要があるだろうか。

たとえどんな理由があつても、何か目標があつて、それに向かつて必死で努力している人間を、皮肉な目で見たりする連中に対し、僕たちが気後れしたり、遠慮する必要が果たして 、あるだろうか。

むしろ、上等じゃないか、何とでも言つとい 、 そう僕は思つて いる。

僕たちは夢を持つ者。それがどれほど実現からほど遠い、氣宇壮大なものだったとしても、それを追いかける僕たちは、僕たち自身を誇りに思い続ける。

それが、僕たち 、 「ワナビ」だ。

ワナビというのは、誇り高き生き物、なのだ。

「これから……、ここで、私たちの生活が始まっていくんだね」

今でも思い出す。僕と妻が、この「ワナビ荘」で共同生活を始めた日のことを。

「ああ。立派に経営していくぜ、このワナビ荘を」

「ところで、これからあなたをなんて呼べばいいかな。今まで通りでいい？ それとも」

「ああ、それは」

「そうだ。呼び名は大切だ。作家はワナビ時代から、いわゆるペンネーム、一つ目の名前を持つていいものだ。そう、呼び名と言えば

。僕は、僕の師である偉大なる人物の名前を思い出していった。その人の名は「城島ダイヤ」。次々と人気作を生み出し、一世を風靡したライトノベル作家である。僕は彼に直接的に世話になり、いろいろと作品作りについても指導してもらつた過去がある。

僕は思いついた。あの人の名前を借りてはどうか。ただ、そのままいたくのはさすがに失礼に当たるだろうから、ここは

「DJ」

「え？」

「ダイヤ・城島。略してDJ、だ。いい名前じゃないか

「DJ……、DJ、ね」

妻は顔をほころばせた。どうやらナイス・ネーミングだつたらし
いと僕はひと安心する。妻は思つていることが顔に出やすい。だか
らこうして笑顔になつてくれるといつひとま、素直に成功した、と
思つていいということだった。

「よろしくね、DJ。ステキな作家さんになつてね」

第5話 おやすみDJK。その5

「あ、もっかいー！」

ワナビ荘の庭の木に水をやつしていると、懐かしい声が聞こえた。見ると、すっかり大人っぽくなつたリヨーコが門の外から覗き込んでいた。

「あらあら、あの無精だったもっかいーがホントにワナビ荘の管理人やつてるのねえ。うん、感心感心」

「……相変わらず一言多いな、リヨーコは。まあ入れ、スイカも切つてあるぞ」

「わーい」

「おっじやまつしまーす！」

今までリヨーコの後ろに隠れていたのか、ひょっこりと現れるハルである。こいつはなんというか、うん、変わらないな。

「あー、カフカ！ まだいたんだ！？ 元気ー？」

「ワン」

カフカも嬉しそうに尻尾を振る。

「休日とは言え、こんなところに遊びに来て、連載は大丈夫なのか？ アニメの方も好調みたいだし、けつこう忙しいんじゃないの？」

「だいじょーぶ、もう五週間先の原稿まで終わらせちゃつたから。あたしたちこう見えても業界では有名なのよ、描くのがやたら速い漫画家、ってことでねー」

「ああ、確かにお前は異常な速筆だからな……」

「あつ、リヨーコさんにハルさん。お久しぶりです、よく来てくれました。今夜は泊まつていきますよね」

「あー、そつしたいとこだけど、アシさんにうちにうちの鍵渡しちゃつてるからなー。あたしたちが帰らないとアシさんが帰れなくなつちゃう……」

「鍵を郵便受けに入れてもうひとつか」

「あーダメダメ、ウチのマンションそれだけつこう泥棒に入られたんの。申し訳ないけど、明日も早いから遠慮させてもらうわ。またの機会に」

「そうですか。残念ですけど、仕方ないですわ」

そう言って、僕の妻、のんちゃんはにっこりと笑う。リヨーノたちがここで暮らしていた頃から、早くも十年の月日が経っていた。

DJの正体が城島ダイヤだつたと知ったのは、彼が引退して沖縄に引っ込むと言い出した、つい半年前のことだった。

「あたしねえ、実は作家の城島ダイヤだつたのよ」

「ふざっけんなああーー！」

そう告白された時、僕は混乱してDJにラリアットをしたたかに食らわせた。嘘だつたら許せなかつたし、本当だつたらさらに許せない。僕が城島ダイヤの大ファンだと知つていながら、今まで隠してきたのはいつたいどういう了見なのか。

そして、かくして彼は本物の城島ダイヤだつたのである（衝撃の展開）。

「あたしがみんなに見せてたのは、趣味で書いた原稿よ。自室ではずーっと商業用原稿を書いていたわ。あたしは自分で出版社に原稿を持って行く人間だつたから、ワナビ荘にも出版社の人は寄つてこなかつたしね。そもそも、来るな、って言つてあつたし」

なぜ隠していたのか、という問ひには、彼は平然とこう答えた。

「そりゃあ、知られたくないからに決まつてるじゃない。『あの』城島ダイヤがここに住んでる、なんて知られたら、嫌じやない。有名なならよくあることよ」

自分が有名人であることには絶対の自身を持つているDJである。そういうえば、城島ダイヤはどこにも顔を出さないことで有名だつたな……。今さらながらに、こんな身近に憧れの人人がいたことに気付けなかつた自分が憎い。

「そついえばD君はお昼はずっと引っ込んで何か書いてたしね。私はてっきり応募用原稿書いてるんだと思ってたけど、そつかー、あの場所で傑作は生み出されていたというわけかー」

D君が城島ダイヤであるという事実を知った後のリョー「やのんちゃんは思いのほか冷静であった。ただ、「D君はやっぱリタダモノじやなかつた」という純粋な賞賛があつただけだ。

そして、話は戻るが、そのD君が執筆業を引退し、沖縄に引っ込むことに決めたのだった。

「あたしはもう体力的にもいいところまで来ちまつたわ。女房も子どももない身だけど、そろそろ、親孝行しなきやね、と思って」

そう言って、彼は沖縄に住む高齢の両親のもとで一緒に住むことに決めたのだそうだ。若いころ、親の反対を無視して家を飛び出し、作家業を始め、さらに事故で亡くなつた叔父の土地を拝借して「ワナビ荘」の経営を始め、そんな怒涛のような生涯を送つたD君が、最後に下した決断は、親と和解し、若いころ反発した親に今度は尽くすということだった。

彼がD君として活躍していたクラブも（あまり出番がなかつたのでなんだか忘れ去られていそうだが）半年前に閉鎖となつた。閉鎖パーティーの際は、多くのD君のファンたちが駆けつけて、かなりの規模の式典となつた。やはりD君は、城島ダイヤとしてではなく、ディスク・ジョッキーとしても実に多くの人々を魅了していたのにな、と改めて思い知らされた。

そんなわけで沖縄に戻ることにした彼が、「ワナビ荘」の第一のオーナーとして指名したのが、地方公務員として就職し、自活しつつも、今でもワナビ荘で暮らし、作家業を目指し続ける僕だった。

「もつちー、第一の『D君』を勤められるのはあなたをおいて他にはいないわ。よかつたら、いえ、ぜひ、『ワナビ荘』二代目D君を襲名してちょうだい」

そんなわけで、僕はワナビ荘の経営権をD君から譲り受けたのだった（手続きなどがいろいろと大変で苦労した）。もつとも、僕が

行っているのは経営だけで、この土地も建物の所有権も、名実ともに未だにロッのものである。

僕はDJについて、彼の実家へ行き、ご両親と対面した（なぜそういう流れになつたかはわからない）。まだまだ元気でかくしゃくとしたお年寄りで、DJの生活的支援も必要かどうかもわからないくらいだった。なんというか、沖縄のイメージ通りであった（ステレオタイプだろうか？）。

そして、こうしてワナビ荘へ帰つてきて、リヨーノたちに襲名を報告して、その結果「お祝いしなきやね」ということでリヨーノたちがワナビ荘へわざわざやつてきてくれた、という状況で、ようやく今に至る。

さて、ハル リヨーノの近況はといつと、前述の会話からも分かる通り、彼女たちは今や誰もが知るところの（言い過ぎか）人気漫画家である。アニメ化もし、興行収入は好調。すでに映画化の話も来ているということだ。あの頃のワナビ荘メンバーの中では最も成功を納めた一人であるといつとができるよ。

蛇足かもしれないが、リヨーノの弟のコウジくんは長い長いハビリの末、ある程度は仕事もできるようになり、現在では「デスクワークについている。社内野球というかたちで、念願の野球にも参加できているとのことだ。

ハルと母親のトモエさんとの関係は、その後詳しくは聞いていない。仕事上の付き合いはきつちりやつてていると思われるが、親子の関係がどうなのがは、僕たちが立ちいる必要もない問題だ。だが、何もあの頃のようなトラブルらしきものが見受けられないということは、それなりにうまくやつているのだろう。

「あ、そうそう。あの一人は今度はベトナムへ行くつて言つてた」「あの一人つて、あの例の一人？」

「そうそう、あの二人。また現地で職務質問を繰り返し受けることになりそうだねー」

「いい加減やめればいいのに、『ーストタクシー……』

まー君とみちるさんのカップルは、本を五冊ほど出したところで、突然作家業休業宣言を出したかと思うと、なんと世界中を旅すると言い始めたのだった。世界中でゴーストタクシー業でお金を稼ぎながら、その土地その土地の文化を知り、歴史を知り、生活を体験することで、それまでの自分になかつたいろいろなものを得、吸収しながら有意義な人生を送っているのだという。ある意味羨ましい。（まだまだ世界は広かつたです。僕たちは井の中の蛙でした）

まー君が感慨深げに語った言葉が印象的だった。

「まあ、あの二人ならどこへ行つてもうまくやることだらう。みちるさんがついてるんだし」

「そだねー。あの二人には日本は狭すぎるよ……ん、このジュースおいしい。のんちゃんが作ったの？」

「はい。ワナビ荘の庭で取れた野菜で作った、名付けて『ワナビジュース』です」

「うーん、『ワナビ』っていう言葉がますます野菜か何かに聞こえてきました……」

そして我が家　のんちゃんは、もう教師生活五年目に入る。現在は近所の公立小学校で小学二年生の担任をしている。

僕たちは、のんちゃんの教育大学卒業、就職に合わせて結婚をした。してみると実にあつたりしたもので、案外それまでの生活と変わらなかつたことに純粹に驚いた。それくらい僕とのんちゃんの関係は、安定していたというか、もはや一つの家庭として完成していたということなのだろう。

そして今、僕たちは晴れてワナビ荘で、念願の同居を果たしたのだ。僕が二代目ローラとして、彼女とワナビ荘を共同経営する形で。

「ワン」

さつきからワンとかうるさいのがいるので、ついでに紹介しておこう。ワナビ荘のマスコットであるところの駄犬カフカは、結局大した見せ場もないまま、しかし十年という月日をまるで感じさせないくらいに、飄々と生きてきた。ある意味一番変化の無い奴である。

DJは沖縄に連れて行こうと思つていたらしいが、僕ができれば譲り受けたい、と申し出で、結局ワナビ荘に残ることになった。まあ、こいつがいないと、ある意味ワナビ荘らしくないしね。

「それにして、結局DJになくなっちゃったんだねー、この東京から。なんだか寂しくなるね」

「まあね。だけどまあ、彼も親御さんに寂しい思いさせてたわけだし、里帰りしたのは正しい判断だと思うよ。それに、これからは僕たちがワナビ荘のDJとしてしつかりやっていかないと」

「DJ、最後になんか言ってた?」

「ん……、いや、別に。あの人はあえて口に出すタイプじゃないからなあ。ただ、最後に『あんたもさつさといいもん書いて世に出なさいよ。そしてそんときや城島ダイヤの愛弟子として胸を張りなさい』って、いろいろアドバイスてくれた」

「へー、どんな?」

「バーカ、そりや企業秘密だ」

「はー。しかし、こうしてると昔を思い出しますねー」

ハルがスイカをシャリシャリと食べながら何気なく呟いた。すでに日は落ちかけ、空は赤くなっている。みんなんみんと、夏を告げる蝉が鳴き始めていた。

「そうだなー、思い出すな。あの頃はみんな、若かった」

「何よー、今だつてあたしたちは若いわよ。作家はいつまで経つても若いもんなの。老けるのはもっちーだけ」

「ねえ、みなさん、外に出てみません? カフカの散歩も兼ねて、少しだけ、夕涼みに」

のんちゃん突然の提案である。彼女も昔が懐かしくなったのだろう。すぐさまハルが「賛成!」と立ちあがる。「ほら、せめてスイカ最後まで食べ」と僕がはやるハルをたしなめる。まったく、いくつになつても子どもみたいなところは変わらない。

「いいんじゃないですか、行つてきたらいいと思います」

そのとき、キッチンから黒川が声をかけてくれた。彼はもう丸十

年ここで僕と一緒に暮らしている。すっかり弟のような存在だった。
「メシの用意は俺がやつておきますから。先輩たちは思う存分、昔
の思い出でも語つてきてください。積もる話があるんでしょう」
「……悪いな。いつもお前には助けられるよ」
「いえいえ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2217w/>

ワナビ荘の住人たち

2011年10月9日03時20分発行